

千葉県八千代市

# 栗谷遺跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書 I

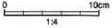
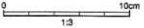




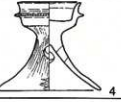









— 第1分冊 —



2001

大成建設株式会社  
八千代市遺跡調査会

栗谷遺跡 第1分冊 正誤表

頁	箇所	誤	正
挿目次	第4図	表土層断面図	土層断面図
写真図版目次	図版62	A022-2	A021-2
P35	第17図A015		
P84	第78図A005ab		
P88	第83図A008		
P89	第84図A009		
			
			
P92	第88図A037		
			
P117	第121図E001	25-15	A046
		28-14	C001
図版62	出土文字資料	A022-2	A021-2

# 序 文

八千代市は千葉県北部のほぼ中央に位置する印旛沼の南西にあります。この八千代市域には印旛沼と新川・桑納川などの豊かな水を背景として、旧石器時代以来たくさんの人々が生活を営んできました。江戸時代になると脇街道として佐倉道（現、成田街道）が整えられ、宿場町として人和田宿が周辺の村々の支えのもと賑わいをみせたとのことです。また、戦後は首都30km圏に位置する近郊住宅都市として昭和30年代より急激な発展を遂げ、人口17万人を超える都市へと発展しました。近年では大学も開校し、文教都市としての側面も併せ持つようになりました。このように戦後、急速に発展してきた八千代市ですが、市中央を南北に流れる新川沿いには豊かな自然も残されてきました。これから八千代市は水と緑豊かな環境を守りながら、着実に発展していくことと思われまます。

このような八千代市のなかで、市域の北東部の保品、神野、米本にわたる地区に「(仮称)八千代カルチャータウン」の開発が計画されたのは昭和40年代とのことです。しかし開発予定区域内には多くの遺跡の所在が知られていました。そしてこの区域内に所在する埋蔵文化財の保護について、関係諸機関による慎重な協議を重ねた結果、遺跡の一部を現状保存し、保存のできない地区についてはやむをえず発掘調査を行い記録保存することとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会により昭和63年3月から開始され、平成11年3月にすべての発掘調査を終了することができました。この期間に調査された遺跡は9遺跡34地点にわたり、旧石器時代から近世に至る膨大かつ貴重な資料を検出することができました。そして平成12年4月より順次、整理作業を進めております。

本報告書はこの9遺跡のうち栗谷遺跡についてその成果の一部をまとめたものです。栗谷遺跡では数多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が検出され遺物も数多く出土しておりますので、その成果をいくつかの地区ごとに3冊に分けて刊行することとなりました。本書が学術資料としてはもとより地域の歴史に関心をもたれている多くの方々や、教育資料ならびに文化財の保護のために広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本報告書の刊行に至るまでの長期間にわたって御協力いただきました大成建設株式会社をはじめとして、ご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会や八千代市教育委員会、関係諸氏・諸機関の皆様方に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査及び整理作業に従事された調査員・調査補助員・整理補助員の方々にも、深く感謝いたします。

平成13年12月

八千代市遺跡調査会  
会長 樟澤 明

# 例 言

1. 本書は、『千葉県八千代市栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』である。
2. 栗谷遺跡を3つの地区に分割し、各地区ごとに報告していく予定である。報告書は、栗谷遺跡で全3分冊となる予定である。
3. 本書は、栗谷遺跡全3分冊のうちの第1分冊である。本書で報告する地区は、栗谷遺跡のⅠ地区である。
4. 栗谷遺跡は、千葉県八千代市保田字中台谷1909-1他に所在する。
5. 栗谷遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
6. 発掘調査の実施期間、調査面積、担当者等については、第1章序説に記載した。
7. 整理作業及び報告書刊行作業は、藤茂美・武藤健一が担当し、平成12年4月1日～平成13年9月30日までの期間実施した。
8. 本書の執筆・編集は藤茂美が行った。
9. 本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP（Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成）システムによるデジタル化を図り、伊勢田めぐみ（株式会社東京航業研究所）が担当した。
10. 発掘調査における航空写真及び道標図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
11. 整理作業・報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
12. 遺物の実測図及びトレース図の作成については、一部を除き株式会社東京航業研究所に委託した。
13. 栗谷遺跡の内容については本書をもって正式報告とし、年報その他において公表された内容と相違する点については、本書の記述により訂正させていただくものとする。
14. 発掘調査に伴う出土遺物及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
15. 出土文字資料の判読・解読については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご教示をいただいた。
16. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育委員会、八千代市教育委員会、八千代市郷土博物館、財団法人千葉県文化財センター、財団法人印旛郡市文化財センターをはじめ、多くの方々からご指導、ご協力を得た。

# 凡 例

1. 遺構番号は発掘調査の時点では、遺跡の各地区ごとに通し番号を付した。遺物への注記、図面・写真への記録はこれによる。しかし、本書では遺構別に通しの遺構番号を新たに付け直した。詳細については、第1章序説にて新旧番号の対照表を掲載しているのでそちらを参照していただきたい。

2. 本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれの図も一部改変・合成して使用している。

第1図 参謀本部陸軍部測量局発行 第一軍管区地方1/20,000迅速測図（明治15年発行）

第2図 国土地理院発行 1/50,000地形図「佐倉」（平成10年発行）

第3図 大成建設株式会社発行 1/4,000 Y.Kプロジェクト空中写真測量図（昭和63年発行）

3. 本書の挿図において方位の表示のないものは、公共座標に基づく座標北を上としている。

4. 本書の遺構実測図における用例は以下の通りである。

(1)図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2)縮尺率は原則として以下を基準とするが、これ以外のものについては、実測図中に表示したスケールを参照されたい。

住居跡 1/80 掘立柱建物跡 1/80 方形周溝墓 1/80 土坑 1/50 溝 1/150及び1/600 炉穴 1/50

(3)住居跡平面図中に使用した一点鎖線は、床面の硬化範囲を示している。

(4)住居跡平面図中に使用した細い破線は、床面の赤色化範囲を示している。

(5)遺構実測図中で使用した太い破線は、推定復元線を示している。

(6)遺構実測図中のスクリーントーンの表示は原則として以下の通りであるが、個々については実測図脇に表示した凡例を参照されたい。

火床



カマド



焼土



粘土



柱痕



(7)遺構実測図中の土器の微細図では、出土状況をわかりやすくさせるために土器に対して特別にスクリーントーンをかけている場合がある。

5. 本書の遺物実測図における用例は以下の通りである。

(1)縮尺率は原則として以下の通りであるが、個々については実測図脇に表示したスケールを参照されたい。

土器実測図 1/4 土器拓影図 1/3 土製品 1/2 石製品・石器・石 1/2 1/3 1/4

鉄製品 1/4 銅製品 1/2 支脚 1/4

(2)遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下の通りである。

須恵器



釉薬



磨耗痕



赤彩



黒色処理・煤・織線土器



(3)墨書及び朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書には不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はバグ塗り、不明瞭な部分は20%のトーンをかけて表現した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は実線で縁取りを行った。なお、推定復元部分は破線で表現した。

墨書



墨書（不明瞭部分）



朱書



朱書（不明瞭部分）



6. 本書の遺物写真における用例は以下の通りである。

(1)写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。

(2)写真図版中の遺物写真の縮尺は、出上文字資料と一部を除き、概ね遺物実測図と同じである。

7. 本書では土器等に刻まれた文字「刻書」について、土器の焼成前に刻まれたものを「ヘラ書」、土器の焼成後に刻まれたものを「線刻」として区分している。

8. 鉄製品及び銅製品については、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。

# 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	

挿図目次	
表目次	
写真図版目次	

第1章 序 説	1
第1節 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連区域内埋蔵文化財調査の概要	1
1 調査に至る経緯と経過	1
2 調査組織	4
3 遺跡の立地と歴史的環境	8
4 各遺跡の概要	15
5 各遺跡の衣上基本十層	16
第2節 栗谷遺跡の概要	17
1 調査の経過	17
2 遺跡の立地と歴史的環境	20
3 調査の方法	20
(1) グリッドの設定	20
(2) 調査の方法	20
(3) 遺構の表記方法及び遺構番号の対応	21
4 調査成果の報告方針	21
第2章 遺構と遺物	24
第1節 I地区の概要	24
第2節 縄文時代	24
第3節 弥生時代	49
第4節 古墳時代	77
第5節 奈良・平安時代	93
第6節 中・近世以降及び時代不明	115
第3章 小 結	118

写真図版	
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第 1 図 周辺遺跡位置図 (1/50,000) .....	11	第 32 図 F021 .....	47
第 2 図 遺跡位置図 (1/50,000明治15年迅速図) .....	12	第 33 図 F022 .....	48
第 3 図 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業 区域及び遺跡位置図 .....	13	第 34 図 弥生時代遺構位置図 .....	51
第 4 図 衣土層断面図 .....	16	第 35 図 A013 .....	52
第 5 図 栗谷遺跡調査区域図 .....	18	第 36 図 A016(1) .....	53
第 6 図 栗谷遺跡本調査地区割図 .....	19	第 37 図 A016(2) .....	54
第 7 図 グリッド概念図 .....	21	第 38 図 A017(1) .....	54
第 8 図 栗谷遺跡 I 地区遺構検出状況図 .....	26	第 39 図 A017(2) .....	55
第 9 図 栗谷遺跡 I 地区遺構検出状況拡大図① .....	27	第 40 図 A017(3) .....	56
第 10 図 栗谷遺跡 I 地区遺構検出状況拡大図② .....	28	第 41 図 A017(4) .....	57
第 11 図 栗谷遺跡 I 地区遺構検出状況拡大図③ .....	29	第 42 図 A017(5) .....	58
第 12 図 縄文時代遺構位置図 .....	30	第 43 図 A017(6) .....	59
第 13 図 A011(1) .....	31	第 44 図 A018 .....	59
第 14 図 A011(2) .....	32	第 45 図 A020 .....	60
第 15 図 A011(3) .....	33	第 46 図 A023 .....	61
第 16 図 A011(4) .....	34	第 47 図 A029 .....	62
第 17 図 A015 .....	35	第 48 図 A030(1) .....	62
第 18 図 A038 .....	36	第 49 図 A030(2) .....	63
第 19 図 D007・D008・D009・D011(1) .....	37	第 50 図 A031 .....	63
第 20 図 D011(2) .....	38	第 51 図 A033 .....	64
第 21 図 D014 .....	39	第 52 図 A035 .....	65
第 22 図 D016 .....	40	第 53 図 A036 .....	65
第 23 図 D018・D019 .....	40	第 54 図 A043(1) .....	66
第 24 図 D023・D031 .....	41	第 55 図 A043(2) .....	67
第 25 図 D028 .....	41	第 56 図 A045 .....	67
第 26 図 D032・D033・F001・F002 .....	42	第 57 図 A046 .....	68
第 27 図 F003・F004・F005・F006 .....	43	第 58 図 A047(1) .....	68
第 28 図 F007・F008・F009・F010 .....	44	第 59 図 A047(2) .....	69
第 29 図 F011・F012・F013・F014 .....	45	第 60 図 C001(1) .....	70
第 30 図 F015・F016・F017・F018 .....	46	第 61 図 C001(2) .....	71
第 31 図 F019・F020 .....	47	第 62 図 C001(3) .....	72
		第 63 図 C002 .....	73
		第 64 図 C003 .....	74
		第 65 図 D002・D005 .....	74
		第 66 図 D006 .....	75
		第 67 図 D010・D013 .....	75



第 68 図	D021・D022・D030	76	第 96 図	A021	99
第 69 図	古墳時代遺構位置図	78	第 97 図	A022(1)	99
第 70 図	A001(1)	79	第 98 図	A022(2)	100
第 71 図	A001(2)	80	第 99 図	A024	100
第 72 図	A001(3)	81	第100図	A025	101
第 73 図	A002	81	第101図	A026(1)	101
第 74 図	A003(1)	82	第102図	A026(2)	102
第 75 図	A003(2)	83	第103図	A027(1)	102
第 76 図	A004(1)	83	第104図	A027(2)	103
第 77 図	A004(2)	84	第105図	A034	103
第 78 図	A005ab(1)	84	第106図	A039	104
第 79 図	A005ab(2)	85	第107図	A040	105
第 80 図	A006ab(1)	86	第108図	A041(1)	106
第 81 図	A006ab(2)	87	第109図	A041(2)	107
第 82 図	A007	88	第110図	A042(1)	108
第 83 図	A008	88	第111図	A042(2)	109
第 84 図	A009	89	第112図	A044(1)	109
第 85 図	A028	90	第113図	A044(2)	110
第 86 図	A032(1)	90	第114図	B001	111
第 87 図	A032(2)	91	第115図	D001	111
第 88 図	A037	92	第116図	D004・D012・D015	112
第 89 図	奈良・平安時代遺構位置図	95	第117図	D017・D020・D024・D025	113
第 90 図	A010	96	第118図	D026・D027・D029	114
第 91 図	A012(1)	96	第119図	D003	115
第 92 図	A012(2)	97	第120図	中・近世以降及び時代不明遺構位置図	116
第 93 図	A014(1)	97			
第 94 図	A014(2)	98	第121図	E001	117
第 95 図	A019	98			

## 表 目 次

第 1 表	(仮称)八千代カルチャータウン開発事業 関連区域内遺跡調査事業 一覧表	3	第 6 表	縄文時代上坑 一覧表(1)	24
第 2 表	遺跡・文献一覧表	14	第 7 表	縄文時代上坑 一覧表(2)	25
第 3 表	栗谷遺跡調査一覧表	17	第 8 表	縄文時代炉穴一覧表	25
第 4 表	栗谷遺跡新旧遺構番号対照表	23	第 9 表	弥生時代竪穴住居跡一覧表(1)	49
第 5 表	縄文時代竪穴住居跡 一覧表	24	第 10 表	弥生時代竪穴住居跡一覧表(2)	50
			第 11 表	弥生時代方形周溝墓 一覧表	50

第12表	弥生時代土坑一覽表	50
第13表	古墳時代竪穴住居跡一覽表	77
第14表	奈良・平安時代竪穴住居跡一覽表(1)	93

第15表	奈良・平安時代竪穴住居跡一覽表(2)	94
第16表	奈良・平安時代掘立柱建物跡一覽表	94
第17表	奈良・平安時代土坑一覽表	94

## 写真図版目次

図版1	(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業 関連遺跡周辺航空写真(昭和63年撮影)	図版12	A015・A038・D007・D008・D009・ D011・D016
図版2	空撮写真 A012・A013・A014・A015・ A016・A017・A018・A019・A020・ A021・A022・A023・A024・A027・ A028・A029・A030・A031・A032・ A033・A034・C002・D006・D007・ D008・F008・F009	図版13	D018・D019・D023・D028・D031・ D032・D033
図版3	空撮写真 A022・A023・A024・C002・ F008	図版14	F001・F002・F003・F004・F005・F006・ F007・F008
図版4	空撮写真 A016・A020・A021・D006・ D007・D008	図版15	F009・F010・F011・F012・F013・F014・ F015・F016
図版5	空撮写真 A013・A014・A015・A016・ A017・A018・A019・A020・A021・ A022	図版16	F017・F018・F019・F020・F021・F022・ A013・A014・A015
図版6	空撮写真 A028・A030・A031・A032・ A033・A034	図版17	A013・A016・A017
図版7	空撮写真 A002・A003・A004・A005ab・ A006ab・A008・A009・D001・E001・ F002・F003・F004・F005・F006	図版18	A017・A018・A020・A023
図版8	空撮写真 A001・A002・A003・A004・ A005ab・A006ab・A007・A008・C001・ D001	図版19	A023・A029・A030・A031
図版9	空撮写真 A040・A041・A042・A043・ B001・D015・D024・D025・D026・ D027	図版20	A031・A033・A035・A036
図版10	空撮写真 A042・A043・A044・A045・ A046・A047・D026・D027・E001	図版21	A043・A045・A046・A047
図版11	調査前風景 A011・A015	図版22	C001・C002・C003
		図版23	D002・D005・D006・D010・D013・ D021・D022・D030
		図版24	A001・A002・A003・A004
		図版25	A004・A005ab・A006ab
		図版26	A007・A008・A009
		図版27	A028・A032・A037・A010
		図版28	A012・A014・A019・A021
		図版29	A022・A024・A025・A026
		図版30	A027・A034・A039
		図版31	A040・A041・A042・A044
		図版32	A044・B001・D001
		図版33	D004・D012・D015・D017・D020・ D024・D025・D026

圖版34 D027 · D029 · D003 · E001 · D032 ·  
D033 · A043 · A044 · A045 · A047  
圖版35 B001 · D015 · D024 · A016 · A021 ·  
A023 · A017 · A019 · A020 · A001 ·  
A002 · A003 · A005ab · A006ab · C001 ·  
A004  
圖版36 A011(1)出土遺物  
圖版37 A011(2)出土遺物  
圖版38 A015 · A038 · D011(1)出土遺物  
圖版39 D011(2) · D014出土遺物  
圖版40 D016 · D028 · F021 · A013出土遺物  
圖版41 A016 · A017(1)出土遺物  
圖版42 A017(2)出土遺物  
圖版43 A017(3)出土遺物  
圖版44 A017(4) · A018 · A020出土遺物  
圖版45 A023 · A029 · A030 · A031出土遺物  
圖版46 A033 · A035 · A036 · A043出土遺物  
圖版47 A045 · A046 · A047 · C001(1)出土遺物  
圖版48 C001(2) · D006出土遺物

圖版49 A001(1)出土遺物  
圖版50 A001(2) · A002 · A003出土遺物  
圖版51 A004 · A005ab · A006ab(1)出土遺物  
圖版52 A006ab(2) · A007 · A008 · A009  
出土遺物  
圖版53 A032 · A037出土遺物  
圖版54 A010 · A012 · A014出土遺物  
圖版55 A021 · A022 · A024 · A025出土遺物  
圖版56 A026 · A027 · A034 · A039(1)  
出土遺物  
圖版57 A039(2) · A040 · A041(1)出土遺物  
圖版58 A041(2)出土遺物  
圖版59 A041(3) · A042(1)出土遺物  
圖版60 A042(2) · A044(1)出土遺物  
圖版61 A044(2)出土遺物  
圖版62 出土文字資料 A022-2 · A025-3 ·  
A034-1 · A034-5 · A039-5 · A041-1 ·  
A041-2 · A041-3 · A041-13 · A042-11 ·  
A044-1 · A044-9 · A044-10

# 第1章 序 説

## 第1節 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連区域内埋蔵文化財調査の概要

### 1 調査に至る経緯と経過

昭和62年12月、大成建設株式会社より、八千代市保品・神野・米木にわたる地区に計画する「(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業」関連区域内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が、八千代市教育委員会と千葉県教育委員会に提出された。開発事業関連区域は、面積620,000㎡に及ぶ広大な範囲であった。千葉県教育委員会及び八千代市教育委員会では、すでに周知の遺跡として数遺跡が存在することを把握していたが、現地踏査を実施し、縄文時代から近世にかけての遺物包蔵地約420,000㎡が存在することを確認し、昭和63年3月に、埋蔵文化財が存在するという回答を示した。

大成建設株式会社・千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の三者にて協議を重ねた結果、事業の計画上一部の区域については現状保存が可能であるがほとんどの区域において現状保存は困難であるという結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとなった。その後、残地森林として現状維持される保存区域を除き、造成工事が予定されている区域に対して発掘調査を実施することが決定した。

これにより、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導を受けて、昭和63年3月八千代市遺跡調査会は大成建設株式会社と委託契約を取り交わし、発掘調査を実施することとなった。

平成6年10月、開発事業計画の変更が発生し、事業若より再度照会文書が提出され、開発面積が696,257㎡・遺物包蔵地面積が385,900㎡とそれぞれに変更が生じたことになった。

開発事業関連区域内に所在する遺跡は、栗谷遺跡・栗谷塚・上谷遺跡・向境遺跡・境塚遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡・神野群集塚の9遺跡を数え、また、開発事業計画に合わせて一つの遺跡を数分割して発掘調査を実施したため、発掘調査の経緯については複雑になってしまっている。そこで、年度ごとにまとめてみることにした。

昭和62(1987)年度	3月25日～3月31日	(1)栗谷遺跡第1次確認調査
昭和63(1988)年度	4月1日～6月11日	(2)栗谷遺跡第1次確認調査 (前年度より継続調査)
	6月22日～10月13日	(3)栗谷遺跡第2次確認調査
	7月21日～3月31日	(4)栗谷遺跡第1次本調査
平成元(1989)年度	4月1日～8月31日	(5)栗谷遺跡第1次本調査 (前年度より継続調査)
	7月5日～3月31日	(6)栗谷遺跡第2次本調査
平成2(1990)年度	4月1日～10月19日	(7)栗谷遺跡第2次本調査 (前年度より継続調査)
	9月26日～12月14日	(8)向境遺跡第1次確認調査
	1月11日～3月31日	(9)栗谷遺跡第3次本調査
平成3(1991)年度	4月1日～12月19日	(10)栗谷遺跡第3次本調査 (前年度より継続調査)
	7月22日～3月31日	(11)栗谷遺跡第4次本調査
平成4(1992)年度	4月1日～6月2日	(12)栗谷遺跡第4次本調査 (前年度より継続調査)
	4月27日～10月14日	(13)上谷遺跡第1次確認本調査

	5月21日～12月25日	(14)栗谷遺跡第5次本調査
	10月22日～3月31日	(15)向境遺跡第1次本調査
	10月22日～3月31日	(16)境廻遺跡第1次確認本調査
平成5(1993)年度	4月1日～5月7日	(17)向境遺跡第1次本調査(前年度より継続調査)
	4月1日～8月20日	(18)境廻遺跡第1次確認本調査(前年度より継続調査)
	4月5日～4月9日	(19)雷遺跡第1次確認調査
	6月3日～8月5日	(20)栗谷遺跡第3次確認調査
	7月19日～9月30日	(21)栗谷遺跡第4次確認調査
	8月1日～3月31日	(22)役山東遺跡第1次確認調査
	10月1日～1月24日	(23)栗谷遺跡第6次本調査
	11月2日～3月31日	(24)栗谷遺跡第7次本調査
平成6(1994)年度	4月1日～8月8日	(25)役山東遺跡第1次確認調査(前年度より継続調査)
	4月1日～7月18日	(26)栗谷遺跡第7次本調査(前年度より継続調査)
	8月9日～10月28日	(27)向境遺跡第2次確認調査
	8月9日～10月28日	(28)境廻遺跡第2次確認調査
	9月5日～2月10日	(29)役山東遺跡第1次本調査
	9月5日～3月31日	(30)神野群集塚第1次本調査
	11月14日～3月31日	(31)向境遺跡第2次本調査
	11月14日～3月31日	(32)境廻遺跡第2次本調査
平成7(1995)年度	4月1日～6月30日	(33)神野群集塚第1次本調査(前年度より継続調査)
	4月1日～12月5日	(34)向境遺跡第2次本調査(前年度より継続調査)
	4月1日～12月5日	(35)境廻遺跡第2次本調査(前年度より継続調査)
	7月1日～7月31日	(36)雷南遺跡第1次確認調査
	7月10日～3月31日	(37)上谷遺跡第2・3次確認調査
	1月5日～1月31日	(38)神野群集塚第2次本調査
	1月5日～2月20日	(39)境廻遺跡第3次確認調査
	1月26日～3月21日	(40)境廻遺跡第3次本調査
	2月5日～3月21日	(41)向境遺跡第3次本調査
平成8(1996)年度	4月1日～3月31日	(42)上谷遺跡第2次本調査
平成9(1997)年度	4月1日～3月31日	(43)上谷遺跡第3次本調査
	12月19日～1月27日	(44)境廻遺跡第4次本調査
平成10(1998)年度	4月1日～3月31日	(45)上谷遺跡第4次本調査

平成11年3月31日にて、11年間続いた「(仮称)八丁代カルチャータウン開発事業」関連区域内の発掘調査を全て完了した。平成11年4月1日から平成12年3月31日までは、上谷遺跡を主体とした基礎整理作業を実施し、平成12年4月1日から、栗谷遺跡と上谷遺跡の本整理事業に着手している。

各遺跡の詳細な経過については、各遺跡報告書の巻頭に譲ることとし、ここでは省略することにする。

第1表 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連区域内遺跡調査事業 一覧表

遺跡名	調査事業名	対象面積	確認調査面積	本調査面積	調査年度
栗谷遺跡	第1次確認調査	52,000㎡	5,720㎡		昭和62・63年度
	第2次確認調査	29,000㎡	3,240㎡		昭和63年度
	第1次本調査			21,000㎡	昭和63・平成元年度
	第2次本調査			20,500㎡	平成元・2年度
	第3次本調査			4,900㎡	平成2・3年度
	第4次本調査			5,000㎡	平成3・4年度
	第5次本調査			24,000㎡	平成4年度
	第3次確認調査	30,000㎡	30,000㎡		平成5年度
	第4次確認調査	28,000㎡	28,000㎡		平成5年度
	第6次本調査			21,000㎡	平成5年度
上行遺跡	第7次本調査			28,000㎡	平成5・6年度
	第1次確認本調査		8,400㎡	8,400㎡	平成4年度
	第2・3次確認調査	107,000㎡	9,872㎡		平成7年度
	第2次本調査			28,816㎡	平成8年度
	第3次本調査			29,214㎡	平成9年度
向堤遺跡	第4次本調査			25,870㎡	平成10年度
	第1次確認調査	19,300㎡	2,477㎡		平成2年度
	第1次本調査			7,200㎡	平成4・5年度
	第2次確認調査	24,000㎡	1,304㎡		平成6年度
	第2次本調査			14,500㎡	平成6・7年度
堤堰遺跡	第3次本調査			1,060㎡	平成7年度
	第1次確認本調査		2,260㎡	2,260㎡	平成4・5年度
	第2次確認調査	16,000㎡	1,016㎡		平成6年度
	第2次本調査			5,100㎡	平成6・7年度
	第3次確認調査	1,570㎡	174㎡		平成7年度
	第3次本調査			1,286㎡	平成7年度
雷遺跡	第4次本調査			230㎡	平成9年度
	第1次確認調査	2,870㎡	2,870㎡		平成5年度
役山東遺跡	第1次確認調査	16,600㎡	16,600㎡		平成5・6年度
	第1次本調査			3,330㎡	平成6年度
神野帯集塚	第1次本調査			1,800㎡	平成6・7年度
	第2次本調査			28㎡	平成7年度
雷南遺跡	第1次確認調査	8,500㎡	720㎡		平成7年度

## 2 調査組織

昭和62年度八千代市道跡調査会調査組織（事業番号1）

会長	志青 重夫	八千代市教育委員会教育次長
事務局		
事務局長	植原 三郎	八千代市教育委員会社会教育課長
事務局係長	菊島 一利	八千代市教育委員会社会教育課係長
事務局員	木原 善和・秋山 利光	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	森 竜哉・巖 茂美	八千代市教育委員会職員

昭和63年度八千代市道跡調査会調査組織（事業番号2、3、4）

会長	志青 重夫	八千代市教育委員会教育次長
事務局		
事務局長	伊藤 勇敏	八千代市教育委員会社会教育課長
事務局係長	菊島 一利	八千代市教育委員会社会教育課係長
事務局員	木原 善和・秋山 利光	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	森 竜哉・巖 茂美・常松 成人	八千代市教育委員会職員
	峰村 篤	八千代市道跡調査会雇用調査員

平成元年度八千代市道跡調査会調査組織（事業番号5、6）

会長	越川 久治	八千代市教育委員会教育次長
事務局		
事務局長	伊藤 勇敏	八千代市教育委員会社会教育課長
事務局係長	菊島 一利	八千代市教育委員会社会教育課係長
事務局員	木原 善和・秋山 利光	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	巖 茂美・常松 成人	八千代市教育委員会職員
	峰村 篤	八千代市道跡調査会雇用調査員

平成2年度八千代市道跡調査会調査組織（事業番号7、8、9）

会長	磯貝 潤吉	八千代市教育委員会教育次長
事務局		
事務局長	伊藤 勇敏	八千代市教育委員会社会教育課長
事務局係長	坂田 猛	八千代市教育委員会社会教育課係長補佐
事務局員	木原 善和・秋山 利光	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	巖 茂美	八千代市教育委員会職員

平成3年度八千代市道跡調査会調査組織（事業番号10、11）

会長	磯貝 潤吉	八千代市教育委員会教育次長（10月31日離任）
	鈴木 重男	八千代市教育委員会生涯学習部長（11月1日着任）
事務局		
事務局長	伊藤 勇敏	八千代市教育委員会社会教育課長（10月31日離任）
	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長（11月1日着任）
事務局長補佐	鈴木 賢治	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長補佐（11月1日着任）
事務局係長	菊島 幹夫	八千代市教育委員会社会教育課係長
	磯貝 幹夫	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長（11月1日機構改革）
事務局員	木原 善和・秋山 利光	八千代市教育委員会職員

## 調査班

調査員	廣 茂美	八千代市教育委員会職員
-----	------	-------------

## 平成4年度八千代市進路調査会調査組織（事業番号12、13、14、15、16）

会長	伊藤 勇毅	八千代市教育委員会生涯学習部長
事務局		
事務局長	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
事務局長補佐	鈴木 賢治	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長補佐
事務局係長	綱島 幹夫	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長
事務局員	秋山 利光	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	廣 茂美・宮澤 久史	八千代市教育委員会職員

## 平成5年度八千代市進路調査会調査組織（事業番号17、18、19、20、21、22、23、24）

会長	伊藤 勇毅	八千代市教育委員会生涯学習部長
委員	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
事務局		
事務局長	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
事務局長補佐	鈴木 賢治	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長補佐
事務局係長	酒井 久男	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長
調査班		
調査員	廣 茂美・宮澤 久史	八千代市教育委員会職員

## 平成6年度八千代市進路調査会調査組織（事業番号25、26、27、28、29、30、31、32）

会長	八角 敏正	八千代市教育委員会生涯学習部長
委員	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社事業開発部開発室長
	安村 忠明	大成建設株式会社八千代カルチャータウン作業所長
監査	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社事業開発部開発室長
事務局		
事務局長	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
事務局係長	酒井 久男	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長
事務局員	秋山 利光	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	廣 茂美・武藤 健一	八千代市教育委員会職員
	市村 誠和	八千代市進路調査会雇用調査員

## 平成7年度八千代市進路調査会調査組織（事業番号33、34、35、36、37、38、39、40、41）

会長	八角 敏正	八千代市教育委員会生涯学習部部長（5月14日兼任）
	村越 利光	八千代市教育委員会生涯学習部長（5月15日兼任）
委員	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社事業開発部開発室長
	安村 忠明	大成建設株式会社八千代カルチャータウン作業所長
監査	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社事業開発部開発室長
事務局		
事務局長	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
事務局係長	酒井 久男	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長（5月14日兼任）
	小名木 伸雄	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長（5月15日兼任）
事務局員	秋山 利光	八千代市教育委員会職員
調査班		



調査員	廣 茂美・武藤 健	八千代市教育委員会職員
	山村 義和	八千代市選抜調査会事務局調査員

平成8年度八千代市選抜調査会調査組織（事業番号42）

会長	村越 利光	八千代市教育委員会生涯学習部長
委員	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部参事兼社会教育課長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社事業開発部開発室長
	安村 忠明	大成建設株式会社八千代カルチャー・タウン作業所長
監査	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社事業開発部開発室長
事務局		
事務局長	今井 利久	八千代市教育委員会生涯学習部参事兼社会教育課長
事務局係長	小名木 伸雄	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長
事務局員	秋山 利光・常松 成人	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	秋山 利光・廣 茂美・武藤 健	八千代市教育委員会職員

平成9年度八千代市選抜調査会調査組織（事業番号43、44）

会長	村越 利光	八千代市教育委員会生涯学習部長
副会長	石毛 幸治	八千代市教育委員会生涯学習部次長
委員	宮川 憲	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社事業開発部開発室長
	武内 利幸	大成建設株式会社八千代作業所長
監査	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社事業開発部開発室長
事務局		
事務局長	宮川 憲	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
事務局係長	小名木 伸雄	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長
事務局員	秋山 利光・常松 成人	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	廣 茂美・常松 成人・武藤 健	八千代市教育委員会職員

平成10年度八千代市選抜調査会調査組織（事業番号45）

会長	藤城 恒昭	八千代市教育委員会生涯学習部長
副会長	三浦 幸子	八千代市教育委員会生涯学習部次長
委員	實川 憲	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長
	武内 利幸	大成建設株式会社八千代作業所長
監査	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長
事務局		
事務局長	實川 憲	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
事務局係長	小名木 伸雄	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課係長
事務局員	秋山 利光・常松 成人・宮澤 久史	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	森 竜哉・廣 茂美・宮松 成人・武藤 健一	八千代市教育委員会職員

平成11年度八千代市選抜調査会調査組織（上谷選抜を主体とする基礎整理事業）

会長	藤城 恒昭	八千代市教育委員会生涯学習部長
副会長	三浦 幸子	八千代市教育委員会生涯学習部次長
委員	實川 憲	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習者課長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長
監査	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長

## 事務局

事務局長	實川 憲	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長
事務局係長	小名木 伸雄	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課主査
事務局員	秋山 利光・宮澤 久史	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	藤 茂美・常松 成人・武藤 健一	八千代市教育委員会職員

## 平成12年度八千代市道路調査会調査組織（栗谷道路・上谷道路整理事業）

会長	藤城 恒昭	八千代市教育委員会生涯学習部長
副会長	山本 正	八千代市教育委員会生涯学習部次長
委員	鈴木 賢治	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長
監査		
事務局		
事務局長	鈴木 賢治	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長
事務局係長	相馬 文了	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課主査
事務局員	秋山 利光・宮澤 久史	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	藤 茂美・武藤 健一	八千代市教育委員会職員

## 平成13年度八千代市道路調査会調査組織（栗谷道路・上谷道路整理事業）

会長	梅澤 明	八千代市教育委員会生涯学習部長
副会長	山本 正	八千代市教育委員会生涯学習部次長
委員	鈴木 賢治	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長
	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長
	加藤 孝	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長
監査	渡辺 俊一郎	大成建設株式会社管理本部管財部事業開発室長
事務局		
事務局長	鈴木 賢治	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長
事務局長補佐	立石 誠	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課副主査
事務局係長	高橋 博	八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課主査
事務局員	朝比奈 竹男・宮澤 久史	八千代市教育委員会職員
調査班		
調査員	藤 茂美・武藤 健一	八千代市教育委員会職員

### 3 遺跡の立地と歴史的環境

〔仮称〕八千代カルチャータウン開発事業」関連区域内に所在する栗谷遺跡(1)・栗谷塚(2)・上谷遺跡(3)・向境遺跡(4)・境淵遺跡(5)・役山東遺跡(6)・雷南遺跡(7)・雷遺跡(8)・神野群集塚(9)の9遺跡は、八千代市保品・神野・米木地区に所在する。これらの遺跡が所在する八千代市は、千葉県北部に広がる下総台地(標高20m~40m前後の起伏の少ない洪積台地)の西部、印旛沼の西岸に位置しており、市域中央部を南から北に縦断して印旛沼に流れ込む新川、その支流で市域北西部を東西に流れる桑納川と市域北部を東西に流れる神崎川によって大きく3つの台地に分かれている。これらの台地は樹枝状の谷津によって開析され、複雑な地形をつくり出している。昭和30年代中頃の印旛沼は、新川に沿って市域北部まで広がっており、現在とは違う形をしていた。これらの遺跡が営まれていた頃の印旛沼は、利根川や手賀沼そして霞ヶ浦とつながり、その先にある太平洋へもつながっていて、「香取海」と呼ばれる大きな入り江を形成していた。その後起こった海退現象によって海と離れただけでなく、霞ヶ浦や手賀沼そして利根川とも離れて印旛沼が形成されたのである。さらに、江戸から昭和へと続く干拓事業や河川工事などによって、現在の地形図に見られるような形へと大きく後退してしまっただけでなく、現在では花見川とつながり、印旛沼から東京湾へ流れる川へと変わってしまった。

これらの遺跡は、水上交通の便がかなり良く、2つの大きな谷津に沿った印旛沼を間近に望む標高20m~25mを測る台地上に展開していた。集落跡の中心は台地上縁部から平坦部にかけてであり、中央部分はとても薄い状態で集落跡はほとんど展開していなかった。現在の水田面との比高差は10m~15mを測る。低地へと下る斜面はほとんどが急斜面であり、人が容易に歩けるような緩斜面は上谷遺跡の南側斜面・上谷遺跡と栗谷遺跡の間的小支谷・栗谷遺跡の北側小支谷・向境遺跡と役山東遺跡の間的小支谷と2つの大きな谷津の最深部だけとなっている。

これらの遺跡の時代は、旧石器時代から中・近世まで続く幅広いものであるが、特に中心となる時代は、縄文時代の早期、弥生時代後期から古墳時代の前期、奈良および平安時代の3時代である。ほとんどの遺跡において3時代の遺構が混在して検出されているが、遺跡ごとに時期的な大きな特徴を持っているといえる。各遺跡の詳細については各報告書に譲ることにしたい。

これらの遺跡の周辺の地域においても同時代の多くの遺跡が分布している。ここでは、時代別に代表的な遺跡を取り上げていき、これらの遺跡を取り巻く歴史的環境について概観したいと思う。

旧石器時代の遺跡としては、空田遺跡群の白幡前遺跡(10)・井戸向遺跡(11)・坊山遺跡(12)・北海遺跡(13)・権根後遺跡(14)・ヲサル山遺跡(15)がある。特に坊山遺跡では6段階にわたる文化層が検出されている。その他の遺跡としては、松崎遺跡群(16)・下高野新山遺跡(17)・村上込の内遺跡(18)・向山遺跡(19)・沖塚遺跡(20)などがある。現時点において、調査された遺跡の数は少ないといえる。

縄文時代の遺跡としては、後期の佐山貝塚(21)や神野貝塚(22)がある。ともに汽水産のヤマトシジミを主体とし、海水産のハマグリやオキアサリなども少量まじえる貝塚である。佐山貝塚は、一部について調査がされており、現状汽水性貝塚であることが明らかになっている。その他の遺跡としては、早期の炉穴群が検出されたヲサル山遺跡(15)や瓜ヶ作遺跡(23)、早期の住居跡と炉穴が検出された下高野新山遺跡(17)、前期の集落跡が検出されたライノ作南遺跡(24)、前期の上坑群が検出された二重堀遺跡(25)、中期の集落跡が検出されたヲサル山南遺跡(26)、晩期の須賀が出土した大江間遺跡(27)などがある。縄文時代の遺跡で調査例が多いのは早期から中期までであり、後期の貝塚があるにもかかわらず、後期以降の調査例はなぜか少なくなってしまっている。

弥生時代の遺跡としては、州原窪遺跡(28)で中期の環濠集落が検出されている。東西約120m、南北約100mの楕円形の環濠(断面形はV字形で、幅2m~3m・深さ1m~2m)の中に40軒以上の住居跡が検出されている。

また、後期の集落遺跡もかなり多く検出され、佐山台遺跡 (29)・東山久保遺跡 (30)・松原遺跡 (31)・おおびた遺跡 (32)・阿蘇中学校東側遺跡 (33)・平沢遺跡 (34)・桑橋新田遺跡 (35)・菅地ノ台遺跡 (36)・白幡前遺跡 (10)・井戸向遺跡 (11)・北海道遺跡 (13)・権現後遺跡 (14)・ヲサル山遺跡 (15)・川崎山遺跡 (37)などが代表的な遺跡である。権現後遺跡では住居跡73軒と方形周溝墓3基、桑橋新田遺跡では住居跡3軒と方形周溝墓4基、阿蘇中学校東側遺跡では住居跡25軒、平沢遺跡では住居跡10軒、川崎山遺跡では住居跡41軒の遺構が検出されている。弥生時代の集落遺跡は、印旛沼の周辺地域において密度が濃くなっているといえる。

古墳時代の遺跡としては、栗谷古墳 (38)・平戸台古墳群 (39)・佐山台1号古墳 (40)・神野芝山古墳群 (41)・桑納古墳群 (42)・七百余所神社古墳 (43)・根上神社古墳 (44)・沖塚古墳 (45)・塚場台古墳 (46)などの古墳と、田原登遺跡 (28)・佐山台遺跡 (29)・桑橋新田遺跡 (35)・白幡前遺跡 (10)・井戸向遺跡 (11)・北海道遺跡 (13)・権現後遺跡 (14)・ヲサル山遺跡 (15)・持田遺跡 (47)・川崎山遺跡 (37)などの集落遺跡がある。栗谷古墳は、埴形遺跡のある台地先端部分にあった古墳であるが、明治・大正時代に破壊され、人骨や直刀などが出土したと伝えられているが定かではない。その後土取りのために消滅した。墓数や規模などは不明である。神野芝山古墳群では、2号墳の箱式石棺内より人骨・勾玉・なつめ玉・菅玉・鉄鏃・刀子などが出土し、桑納古墳群では、2号墳 (帆立貝式) から門筒埴輪や人物・馬などの形象埴輪が出土し、塚場台古墳では、箱式石棺内より人骨・直刀・鉄鏃などが出土し、沖塚古墳では、貝化石岩で造られた横穴式石室が検出されている。また、佐山台遺跡では前期の住居跡165軒、桑橋新田遺跡では前期の住居跡150軒以上、ヲサル山遺跡では前期の住居跡22軒・方形周溝墓3基、権現後遺跡では中期の住居跡の他に石製模造品の丁房跡4軒、北海道遺跡では中期の住居跡の他に石製模造品の丁房跡12軒、白幡前遺跡・井戸向遺跡・持田遺跡では後期の集落跡が検出されている。古墳時代になると印旛沼から離れた地域でも大規模な集落が営まれるようになる。

奈良・平安時代の遺跡としては、鳴神山遺跡 (48)・村上込の内遺跡 (18)・名主山遺跡 (49)・白幡前遺跡 (10)・井戸向遺跡 (11)・北海道遺跡 (13)・権現後遺跡 (14)・東山久保遺跡 (30)・松原遺跡 (31)・浅側内遺跡 (50)・高津新田遺跡 (51)・勝田大作遺跡 (52)などがある。大規模な集落跡から小規模な集落跡までと様々であるが、多くの遺跡が調査されている。鳴神山遺跡では住居跡202軒と掘立柱建物跡43棟、村上込の内遺跡では住居跡155軒と掘立柱建物跡24棟、白幡前遺跡では住居跡294軒と掘立柱建物跡151棟、井戸向遺跡では住居跡103軒と掘立柱建物跡44棟、北海道遺跡では住居跡116軒と掘立柱建物跡10棟、権現後遺跡では住居跡70軒と掘立柱建物跡18棟が検出されている。また、墨書土器も多数出土しており、「村神郷」と書かれた墨書土器が出土した権現後遺跡、人面墨書土器が出土した白幡前遺跡、「承和五年二月十日」(838年)の紀年銘入り墨書土器が出土した北海道遺跡が注目される。その他では、小金銅仏や三彩陶器が出土した井戸向遺跡、瓦葺が出土した白幡前遺跡で村落内寺院と考えられる遺構が検出されていることも注目されることである。奈良・平安時代になると、印旛沼からかなり離れた地域にも大規模集落が営まれるようになることがわかる。

中世の遺跡としては、高津館跡 (53)・正覚院館跡 (54)・尾崎館跡 (55)・吉橋城跡 (56)・米本城跡 (57)・島田城跡 (58)などの城館跡がある。正覚院館跡からは、堀底より板碑や花瓶が出土している。

中・近世の遺跡としては、神野新山塚群 (59)・島田塚群 (60)・熊野神社群塚 (61)・作畑塚群 (62)・村上第1塚群 (63)・村上第2塚群 (64)・勝田台群塚 (65)などの塚群があり、民衆の信仰の対象としての塚が多く造られたことがわかる。遺跡という視点からは外れるかもしれないが、常陸から上総へ向かう街道の馬籠ぎ場として米本宿 (66)が整備されてゆき、橋が架かかっていない印旛沼には神野 (67)と保品 (68)に渡し舟が設けられていた。佐倉藩の支配を受けていた江戸時代には、神野・保品から佐倉へ通じる道として「佐倉往塚道」(69)が整備された。

このように栗谷遺跡や上谷遺跡などの周辺は、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く所在している。弥生・古墳時代までは、印旛沼を中心とする文化圏が形成されていた。しかし、奈良・平安時代以降は、陸上交通の整備が進み印旛沼を意識しない文化圏が形成されるようになり、様子も大きく変わってしまった。現在では、京成電鉄沿線の市街地から離れていて、静かでのどかな田園風景が広がっている所となっている。

## 文献一覧

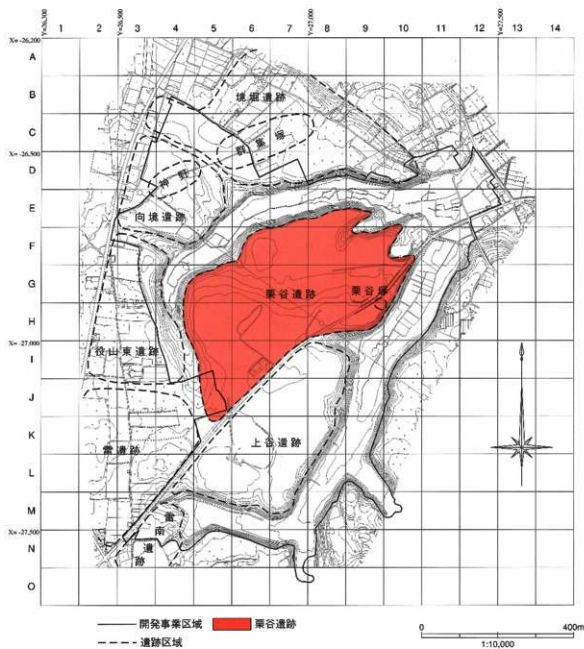
1. 本報告書
2. 八千代市史編さん委員会 1978 『八千代市の歴史』 八千代市
3. 八千代市史編さん委員会 1991 『八千代市の歴史 資料編 原論・古代・中世』 八千代市
4. 八千代市教育委員会 1983 『八千代の遺跡 千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告集-1』
5. 八千代市教育委員会 1995 『平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報』
6. 八千代市教育委員会 1996 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成6年度版-1』
7. 八千代市教育委員会 1997 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成7年度版-1』
8. 八千代市教育委員会 1987 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書』
9. 八千代市教育委員会 1988 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和62年度』
10. 八千代市教育委員会 1989 『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告書 昭和63年度』
11. 八千代市教育委員会 1990 『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告書 平成元年度』
12. 八千代市教育委員会 1992 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成3年度』
13. 八千代市教育委員会 1993 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成4年度』
14. 八千代市教育委員会 1994 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成5年度』
15. 八千代市教育委員会 1995 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成6年度』
16. 八千代市教育委員会 1996 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成7年度』
17. 八千代市教育委員会 1997 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』
18. 八千代市教育委員会 1998 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』
19. 八千代市教育委員会 1999 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』
20. 八千代市教育委員会 1999 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度』
21. 八千代市教育委員会 2000 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』
22. 財団法人千葉県文化財センター 1984 『八千代市権現遺跡 一壹田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
23. 財団法人千葉県文化財センター 1985 『八千代市北海道遺跡 一壹田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-1』
24. 財団法人千葉県文化財センター 1986 『八千代市ワサリ山遺跡 一壹田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ-1』
25. 財団法人千葉県文化財センター 1987 『八千代市井口向遺跡 一壹田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ-1』
26. 財団法人千葉県文化財センター 1991 『八千代市白幡前遺跡 一壹田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
27. 財団法人千葉県文化財センター 1993 『八千代市坊山遺跡 一壹田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ-1』
28. 財団法人千葉県文化財センター 1993 『八千代市権現後遺跡、北海道遺跡、井口向遺跡 一壹田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ-1』
29. 財団法人千葉県文化財センター 1994 『千葉県文化財センター年報No19 平成5年度-1』
30. 財団法人千葉県文化財センター 1995 『千葉県文化財センター年報No20 平成6年度-1』
31. 財団法人千葉県文化財センター 1996 『千葉県文化財センター年報No21 平成7年度-1』
32. 財団法人千葉県都市公社 1974 『八千代市村上遺跡群』
33. 財団法人千葉県文化財センター 1994 『八千代市沖波遺跡、上の台遺跡他 一東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書-1』
34. 八千代市市内八千代遺跡群調査会 1996 『千葉県八千代市仲ノ台遺跡、ツイノ作遺跡発掘調査報告書 一西八千代市都土地区西整理事業地内埋蔵文化財発掘調査-』
35. おおびた遺跡調査団 1975 『おおびた遺跡 一八千代市少年自然の家建設地内遺跡-1』
36. 八千代市遺跡調査会 1980 『阿蘇中学校泉原遺跡』
37. 八千代市遺跡調査会 1984 『千葉県八千代市阿蘇中学校東側遺跡Ⅱ』
38. 八千代市遺跡調査会 1979 『壹田町川崎山遺跡発掘調査報告書』
39. 八千代市遺跡調査会 1999 『千葉県八千代市正覚院跡跡 一埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
40. 財団法人千葉県文化財センター 1999 『千葉県北地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 内市島神社山遺跡、白井谷奥遺跡-1』
41. 財団法人千葉県文化財センター 2000 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅤ 一印西市鳴神山遺跡Ⅱ、白井谷奥遺跡-1』
42. 八千代市教育委員会 1972 『名止山遺跡』
43. 上高野原古墳群調査会 1974 『千葉県八千代市村上供養塚発掘調査報告書』
44. 八千代市教育委員会 2001 『千葉県八千代市(平)台2号墳発掘調査報告書』
45. 八千代市遺跡調査会 2000 『千葉県八千代市ツイノ作遺跡発掘調査報告書 一宅地造成に先行した埋蔵文化財発掘調査-1』
46. 板井和了、原ふさ子、鈴木志美子(八千代市郷土歴史研究会) 1988 『さくら道-もう一つのさくら道を探して。』 『史談八千代』 第13号



第1圖 周辺道路位置圖 (1/50,000)



第2図 遺跡位置図（1/50,000明治15年迅速図）



第3図 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業区域及び遺跡位置図



第2表 遺跡・文献一覧表

遺跡名	文献番号	遺跡名	文献番号
1. 栗谷遺跡	1, 3, 4, 5, 6	36. 青地ノ台遺跡	3, 4, 7, 10, 11, 13
2. 栗谷塚	1	37. 川崎山遺跡	3, 4, 5, 6, 7, 12, 14, 18, 19, 20, 21, 38
3. 上谷遺跡	1, 4, 5, 7	38. 栗谷古墳	2, 4
4. 向境遺跡	1, 4, 5, 6, 7	39. 平戸台古墳群	2, 3, 4, 44
5. 境塚遺跡	1, 4, 5, 6, 7	40. 佐山台1号古墳	3, 8
6. 役山東遺跡	1, 4, 5, 6	41. 神野芝山古墳群	2, 3, 4
7. 常南遺跡	1, 4, 7	42. 桑納古墳群	2, 3, 4
8. 雷遺跡	1, 4, 5	43. 七百余所神社古墳	2, 3, 4
9. 神野群集塚	1, 4, 6, 7	44. 根上神社古墳	2, 3, 4
10. 白幡前遺跡	3, 4, 26	45. 沖塚古墳	2, 3
11. 井戸向遺跡	3, 4, 25, 28	46. 塚場台古墳	3
12. 坊山遺跡	3, 27	47. 持山遺跡	1, 5, 13, 39
13. 北海道遺跡	3, 4, 23, 28	48. 崎神山遺跡	40, 41
14. 権現後遺跡	3, 4, 22, 28	49. 名主山遺跡	2, 3, 4, 42
15. ツサル山遺跡	3, 4, 24	50. 浅間内遺跡	4, 6, 7, 21
16. 松崎遺跡群	29, 30, 31	51. 高津新山遺跡	3, 4
17. ド高野新山遺跡	3, 4, 6, 10, 11	52. 勝田大作遺跡	3, 4
18. 村上込の内遺跡	2, 3, 4, 32	53. 高津前跡	2, 3, 4
19. 向山遺跡	3, 4, 33	54. 正覚院跡	2, 3, 4, 5, 7, 13, 16, 39
20. 沖塚遺跡	4, 5, 21, 33	55. 尾崎館跡	2, 4
21. 佐山山塚	3, 4, 5	56. 青橋城跡	2, 3, 4, 5, 8
22. 神野山塚	4, 5	57. 米本城跡	2, 3, 4, 5
23. 瓜ヶ作遺跡	3, 5	58. 島川城跡	4
24. ツイノ作南遺跡	3, 6, 7, 15, 16, 17, 34, 45	59. 神野新山塚群	4
25. 二重洲遺跡	4, 5, 15, 17	60. 高山塚群	4
26. ツサル山山遺跡	3	61. 熊野神社群集塚	4
27. 大江岡遺跡	3, 4	62. 作進塚群	4
28. 田原塚遺跡	5, 8	63. 村上第1塚群	4, 32
29. 佐山台遺跡	3, 4, 5	64. 村上第2塚群	4, 32, 43
30. 東山久保遺跡	3, 4, 5	65. 勝田台群集塚	4
31. 松原遺跡	3, 4, 5	66. 米本宿	
32. おおびた遺跡	2, 3, 4, 7, 16, 35	67. 神野の渡し舟	
33. 阿蘇中学校東側遺跡	3, 4, 36, 37	68. 保品の渡し舟	
34. 平沢遺跡	4, 6, 7	69. 佐倉往現道	46
35. 桑橋新山遺跡	3, 4, 5, 6, 13, 14		

#### 4 各遺跡の概要

(仮称) 八丁代カルチャータウン開発事業関連区域内に所在する9遺跡について、簡単ではあるがその概要についてまとめてみることにしたい。

栗谷遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡である。特筆すべきことは、遺跡北域の台地先端部において検出された弥生時代の集落と方形周溝墓群である。集落域と墓域とが明確に区分され、方形周溝墓群は主軸を同じにして整然と並べられた状態で透られていた。また、遺跡中央部域において、奈良・平安時代の四面庇の掘立柱建物跡を中心とした掘立柱建物跡群が検出されている。

栗谷城は、中世から近世にかけての時期と思われる塚である。当初は古墳かとも思われたが、周溝は検出できず、また、マウンドの状態からも塚であることが判明した。

上谷遺跡は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡である。特筆すべきことは、遺跡南域において検出された奈良・平安時代の「コ」の字状に並んだ2つの掘立柱建物跡群である。2群は並んだ状態で検出されている。それぞれ建て替えがされていた。また、周りの竪穴住居跡群からは、多量の黒土器が出土しており、紀年銘入りの人面黒土器や人面刻書土器なども出土している。また、縄文時代早期の穴欠群が遺跡南域において、多数検出されている。

向境遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡である。特筆すべきことは、奈良・平安時代の集落跡である。掘立柱建物跡群と竪穴住居跡群が検出されており、ここでも多量の黒土器が出土している。寺を思わせるかのような墨書土器や遺物も出土している。上谷遺跡とは、また違った集落跡を形成しているようである。

境掘遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡である。特筆すべきことは、遺跡東域において検出された奈良・平安時代の掘立柱建物跡群と竪穴住居跡群である。遺跡保存区域のため、その大半を調査することができなかったが、ここでも掘立柱建物跡群は、規則的に並んでいるかのようであった。また、遺跡北域において弥生時代の集落も検出されている。

役山東遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡である。遺跡東側の斜面域が調査区域であったため、遺物の検出数はとても少なく、遺跡の特徴を把握するまでには至らなかった。

重南遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡である。確認調査だけで終了した区域が多かったため、遺跡の詳細な特徴を把握するまでには至らなかったが、多くの竪穴住居跡が検出されており、弥生時代が中心を占めるようである。

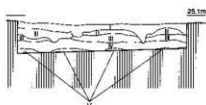
雷遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡である。確認調査だけで終了したため、遺跡の詳細な特徴を把握するまでには至らなかったが、多くの竪穴住居跡が検出されており、古墳時代が中心を占めるようである。

神野群集塚は、中世から近世にかけての時期と思われる塚群である。塚群の内、大型の塚3基と小型の塚2基を調査した。大型の塚3基の内2基のマウンドはしっかりと築き固められており、古墳と思えるほどであった。塚群の主体は開発区域の北側に展開していた。

簡単ではあるが、以上が各遺跡の概要である。縄文時代から奈良・平安時代までの遺構が各遺跡で検出されているが、その特徴は様々であるといえる。詳細については各報告書の刊行を待っていただきたい。

## 5 各遺跡の表土基本土層

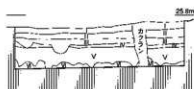
ここで各遺跡の表土基本土層について説明することにする。各遺跡とも、谷部や斜面部を除いた台地上平坦面においては、表土基本土層に変化はない。第Ⅰ層腐植土層（褐色土層）、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層暗褐色土層、第Ⅳ層ソフトローム漸移層、第Ⅴ層ソフトローム層、第Ⅵ層ハードローム層が基本土層である。第4図に各遺跡の代表的な土層断面図を示しているので参照していただきたい。



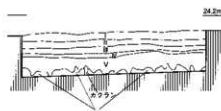
栗谷遺跡H10-1-1グリッド



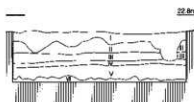
栗谷遺跡HS-3-1グリッド



上谷遺跡K8-27-1グリッド



上谷遺跡M6-61-1グリッド



境塚遺跡C4-85-1グリッド



向塚遺跡F5-1-1グリッド



桜山東遺跡F3-100-1グリッド



雷南遺跡N4-22-1グリッド



第4図 土層断面図

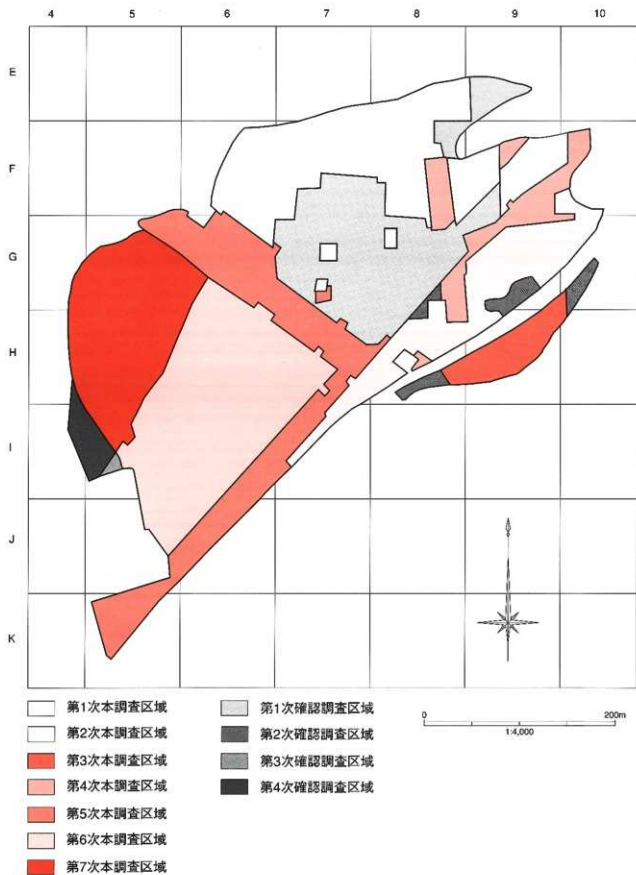
## 第2節 栗谷遺跡の概要

### 1 調査の経過

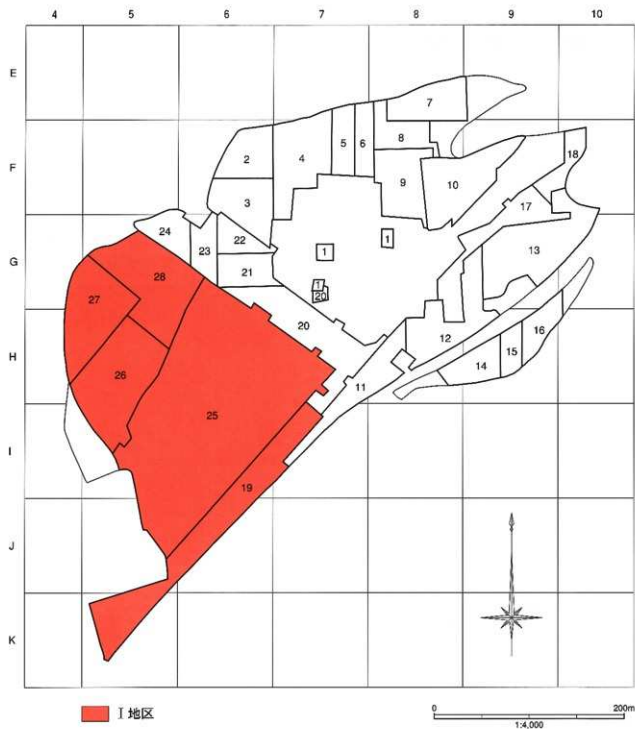
栗谷遺跡の発掘調査は、(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連区域区内における埋蔵文化財調査の一環として、昭和63年3月より開始された。東京成徳大学建設工事計画の関係で発掘調査はその建設用地から行うこととなり、その隣接地である研究施設用地を含めた区域に対して、第1次確認調査と第2次確認調査が実施された。第1次本調査と第4次本調査は大学建設用地に対して実施され、第2次本調査と第3次本調査は研究施設用地と県道移設用地に対して実施され、第5次本調査は大学外周道路用地と県道移設用地に対して実施されたものである。これらの発掘調査により大学建設用地・研究施設用地・県道移設用地の調査が終了し、引き続き住宅建設用地の調査へと移行していくこととなった。第3次確認調査と第4次確認調査が実施された後、第6次本調査と第7次本調査が実施され、平成6年7月をもって栗谷遺跡に対するすべての発掘調査が終了した。調査期間や調査面積などについては第3表を、調査区域については第5図を参照されたい。

第3表 栗谷遺跡調査一覧表

調査名	調査期間	調査面積	調査地区	調査員 (○担当調査員)	調査協力
1 栗谷遺跡 第1次確認調査 (昭和62・63年度)	昭和63年3月25日 ～ 昭和63年6月11日	52,000㎡	—	○栗 茂美 藤 茂美	要航業 (株)
2 栗谷遺跡 第2次確認調査 (昭和63年度)	昭和63年6月22日 ～ 昭和63年10月13日	29,000㎡	—	○栗 茂美 菅松 成人	要航業 (株)
3 栗谷遺跡 第1次本調査 (昭和63・平成元年度)	昭和63年7月21日 ～ 平成元年8月31日	21,000㎡	1・2・3・4・ 5・6・7・8・ 9・10地区	○栗 茂美 菅松 成人 鈴木 篤	要航業 (株)
4 栗谷遺跡 第2次本調査 (平成元・2年度)	平成元年7月5日 ～ 平成2年10月19日	20,500㎡	11・12・13地区	○栗 茂美 菅松 成人	要航業 (株)
5 栗谷遺跡 第3次本調査 (平成2・3年度)	平成3年1月11日 ～ 平成3年12月19日	4,900㎡	14・15・16地区 栗谷塚	○栗 茂美	要航業 (株)
6 栗谷遺跡 第4次本調査 (平成3・4年度)	平成3年7月22日 ～ 平成4年6月2日	5,000㎡	10・12・17・18 地区	○栗 茂美 百澤 久史	要航業 (株)
7 栗谷遺跡 第5次本調査 (平成4年度)	平成4年5月21日 ～ 平成4年12月25日	24,000㎡	19・20・21・22・ 23・24地区	○栗 茂美 百澤 久史	要航業 (株)
8 栗谷遺跡 第3次確認調査 (平成5年度)	平成5年6月3日 ～ 平成5年8月5日	30,000㎡	—	○栗 茂美 百澤 久史	要航業 (株)
9 栗谷遺跡 第4次確認調査 (平成5年度)	平成5年7月19日 ～ 平成5年9月30日	28,000㎡	—	○栗 茂美 百澤 久史	要航業 (株)
10 栗谷遺跡 第6次本調査 (平成5年度)	平成5年10月1日 ～ 平成6年1月24日	21,000㎡	25地区	○栗 茂美 百澤 久史	要航業 (株)
11 栗谷遺跡 第7次本調査 (平成5・6年度)	平成5年11月2日 ～ 平成6年7月18日	28,000㎡	26・27・28地区	○栗 茂美 百澤 久史 武澤 健一	要航業 (株)



第5図 栗谷遺跡調査区域図



第 6 图 栗谷遺跡本調査地区図

## 2 遺跡の立地と歴史的環境

(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連区域内に所在する遺跡の位置と歴史的環境についての詳細は、すでに前節において述べてあるので、ここでは栗谷遺跡について述べることにする。

栗谷遺跡は八千代市保品字栗谷・中台谷・巖谷に所在し、開発区域の北東部から中央部に位置している。印旗沼から入り込む2つの大きな谷津に挟まれた標高20m~25mを測る舌状台地上に立地している。現況は、ほとんどが山林であり、一部に少年野球のグラウンドがあるだけであった。土取りによって台地先端部分が大きく壊されている他は、破壊されている所もなく、遺跡の遺存状態は一部を除いて良好な状態であった。両側の谷津は、開発工事に着手するまでは、湧水を利用した谷津田として使用されていた。遺跡は、その谷津に沿って縁辺部から平坦部にかけて途切れることもなく展開していた。しかし、台地中央部においては少数の遺構が点在している程度でしかなく、集落としての広がりはいえ捉えることができなかった。栗谷遺跡南側の同台地上には上谷遺跡が隣接して立地している。県道八千代・宗像線が2つの遺跡の境となって把握されていたが、発掘調査の成果によって、2つの遺跡は連続する1つの遺跡として捉えられることが明らかになった。詳細については、報告書の最終冊へ譲ることにしたい。

## 3 調査の方法

### (1) グリッドの設定

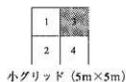
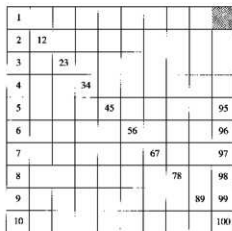
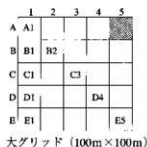
(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連の遺跡群の調査に際して、公共座標に沿って開発区域全域に対しグリッドを設定した。グリッドの設定にあたっては座標X=-26,200、Y=26,300を起点として、両軸をそれぞれ100m間隔で区切り大グリッドとした。さらに大グリッドを10m×10mの中グリッドに100分割し、またさらにこの中グリッドを5m×5mの小グリッドに4分割した。大グリッドのX軸は西から東へ1・2・3〜と数字で表記し、Y軸は北から南へA・B・C〜とアルファベットで表記した。中グリッドは、10m×10mのグリッド個々に1・2・3〜100の番号を付して表記した。大グリッド内の北西隅を1とし、南東隅を100としている。小グリッドは、5m×5mのグリッド個々に1・2・3・4の番号を付して表記した。通常、グリッドの呼称は、「A1-1、A1-2、A2-99、A2-100・・・」のように大・中のグリッドの表記の組み合わせにより行い、必要に応じてこれに小グリッドを組み合わせて、「A1-1-1、A1-1-2、A2-99-3、A2-100-4・・・」のように呼称した。第7図にグリッドの概略図を同示したので参照していただきたい。

### (2) 調査の方法

栗谷遺跡の発掘調査の方法は、大きく分けると2つの方法に分けられる。トレンチ・グリッド方法による確認調査を実施した後、調査区域を設定し本調査を実施した方法と、確認調査の時点で表土をすべて除去し遺構検出を実施し、検出された遺構に応じて調査区域を設定し本調査を実施した方法の二通りである。前者の方法で実施されたのが、第1次確認調査・第2次確認調査・第1次本調査・第2次本調査・第3次本調査・第4次本調査であり、後者の方法で実施されたのが、第5次本調査・第3次確認調査・第4次確認調査・第6次本調査・第7次本調査である。

二通りの確認調査とも遺物包含層の有無と広がりを把握するために、人力によるトレンチ及びグリッドの掘削を対象面積の約1%~2%に対して実施した。前者の残りのトレンチ・グリッドについては、重機による掘削の後、人力によって精査を実施した。後者では遺物包含層の確認が終了した後、重機による表土除去を実施し、遺構検出へと移行した。

表土の除去は、遺物包含層区域を除いて、ソフトローム上面まで重機による掘削を実施した。遺物包含層区域



第7図 グリッド概念図

ではソフトローム上位にある暗褐色上層上面まで重機による掘削を実施し、人力によってソフトローム上面まで記録を取りながら掘削を実施した。

二通りの確認調査とも本調査時における調査の方法については同じである。全域の遺構検出を実施した後、遺構の掘削、十層断面の記録、出土遺物の実測・取り上げ、遺構等の実測・写真撮影などの記録を実施し、最後に遺構図面作成のための航空写真を撮影して終了した。遺物の取り上げ等については、光波測距儀を使用したトータルステーションを採用した。

### (3) 遺構の表記方法及び遺構番号の対応

遺構番号は本調査の時点では、地区ごとに遺構の種類に関係なく001から順に通し番号を付した。遺物への注記、図面・写真への記録はこれによる。しかし、本書では遺構の種類別に通しの遺構番号を新たに付け直した。住居跡には「A」、掘立柱建物跡には「B」、方形周溝溝・方形周溝状遺構には「C」、土坑類には「D」、溝には「E」、灰穴には「F」、その他の遺構には「I」の記号を付して001からの通し番号とした。第4表に本書で報告する遺構番号の新旧対照表を掲載したので参照していただきたい。

## 4 調査成果の報告方針

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連区域内に所在する9遺跡の報告書を作成するにあたり、約2千近くの堅穴住居跡をはじめとする様々な遺構群をどのようにしてまとめあげていくかが大きな課題となった。栗谷遺跡や上谷遺跡は、その膨大な遺構数や諸々の事情から1冊にまとめることが、とても無理なことであった。やむなく分冊という形でまとめていくこととし、全4巻10冊の刊行を予定した。年間2冊の刊行を予定し、5年間で10冊の刊行を予定することとなった。報告書の構成は以下のとおりである。



- 第1巻 千葉県八千代市 栗谷遺跡・栗谷塚・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡  
(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ  
第1分冊 栗谷遺跡Ⅰ地区  
第2分冊 栗谷遺跡Ⅱ地区  
第3分冊 栗谷遺跡Ⅲ地区・栗谷塚・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡
- 第2巻 千葉県八千代市 上谷遺跡  
(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ  
第1分冊 上谷遺跡Ⅰ地区  
第2分冊 上谷遺跡Ⅱ地区  
第3分冊 上谷遺跡Ⅲ地区  
第4分冊 上谷遺跡Ⅳ地区  
第5分冊 上谷遺跡Ⅴ地区
- 第3巻 千葉県八千代市 向境遺跡・神野群集塚  
(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
- 第4巻 千葉県八千代市 境塚遺跡  
(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

報告書の内容については、その遺構数の多さから判断して、なるべく簡潔にまとめていくことにし、遺構については表形式を採用し、遺物については観察表を省かざるを得なかった。栗谷遺跡と上谷遺跡では報告にあたって調査地区を統合し再度分割することとした。栗谷遺跡は南側から3つの地区に分割し、上谷遺跡は北側から5つの地区に分割した。再度分割した地区名は、ローマ数字で表記することにした。また栗谷遺跡と上谷遺跡では、各分冊ごとに1つの地区を時代別に報告することとし、遺構に伴わない遺物や調査成果については最終冊にまとめて報告することとした。他の遺跡においては、すべてを1冊にまとめて報告することとした。

本書は、栗谷遺跡の第1分冊であるため、報告する地区はⅠ地区である。Ⅰ地区は、本調査時の地区名では、19・25・26・27・28地区にあたる。

第4表 栗谷遺跡新口遺構番号対照表

旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号
19-001	F021	25-038	D022	27-013	A024
19-002	F022	25-039	D023	27-015	C002
19-003	D028	25-040	D024	27-017	D006
19-004	D029	25-041	D025	27-018	D007
19-005	D030	25-042	D026	27-019	D008
19-006	D031	25-043	D027	27-020	F008
19-007	D032	26-001	A025	27-021	F009
19-008	D033	26-002	A026	27-022	D009
25-005a	A039	26-003	A027	27-023	F010
25-005b	D014	26-005	A028	27-024	F011
25-007	D015	26-006	A029	27-025	F012
25-008	A040	26-007	A030	28-001	A001
25-010	A041	26-008	A031	28-002	A002
25-011	A042	26-009	A032	28-003	A003
25-012	A043	26-011	A033	28-004	A004
25-013	A044	26-012	A034	28-005ab	A005ab
25-014	A045	26-013	A035	28-006ab	A006ab
25-015	A046	26-014	A036	28-007	A007
25-016	A047	26-015	A037	28-008	A008
25-018	B001	26-016	A038	28-009	A009
25-019	C003	26-017	D010	28-012	A010
25-020	E001	26-018	D011	28-014	C001
25-021	F013	26-019	D012	28-015	E001
25-022	F014	26-020	D013	28-017	F001
25-024	F015	27-001	A012	28-018	F002
25-026	F016	27-002a	A013	28-019	F003
25-028	F017	27-002b	A014	28-020	F004
25-029	F018	27-002c	A015	28-021	D001
25-030	D016	27-003	A016	28-022	F005
25-031	F019	27-004	A017	28-023	F006
25-032	F020	27-005	A018	28-024	F007
25-033	D017	27-006	A019	28-025	D002
25-034	D018	27-007	A020	28-026	D003
25-035	D019	27-008	A021	28-027	D004
25-036	D020	27-009	A022	28-028	D005
25-037	D021	27-011	A023	28-029	A011

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 I地区の概要

本書にて報告するI地区は栗谷遺跡の西側部分にあたり、遺跡が所在する舌上台地の最奥部で、台地西側縁辺部から台地東側縁辺部付近にかけての地区である。

I地区にて検出された遺構は、竪穴住居跡49軒（縄文時代3軒、弥生時代16軒、古墳時代14軒、奈良・平安時代16軒）、掘立柱建物跡1棟（奈良・平安時代）、方形周溝墓3基（弥生時代）、土坑33基（縄文時代13基、弥生時代8基、奈良・平安時代11基、中・近世1基）、炉穴22基（縄文時代）、溝1条である。

遺構は、各時代を通じて台地西側縁辺部に多く分布しているが、台地中央部では分布が少なくなっている。遺構の集中区は、古墳時代を除いて他の時代においては認められない。

### 第2節 縄文時代

栗谷遺跡I地区における縄文時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑13基、炉穴22基が検出されている。竪穴住居跡は台地縁辺部に検出されているが、土坑や炉穴は台地縁辺部から中央部にかけて検出されている。遺構が集中している所はなく、調査区全域に散在している状態である。竪穴住居跡と土坑は中期から後期にかけて位置づけられるものが多く、炉穴は早期に位置づけられるものがほとんどである。栗谷遺跡の中央部と上谷遺跡において早期の包含層が検出されているが、本地区においては検出できていない。陥し穴は、谷津最深部の台地縁辺部から中央部にかけて散在している。

第5表 縄文時代竪穴住居跡一覧表

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	規模(主軸×横軸)	壁高	炉
A011	G5-35	N-13°-E	4.7×4.1	0.4	1基
	プランは不整形円形。土柱穴4本。床面は硬度を有し中央部が特に硬い床となる。壁は少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A015	H5-21	N-64°-W	5.2×2.95	0.3	1基
	プランは不整形方形。土柱穴不明。床面は硬度を有し特に硬い床が3カ所に点在する。壁はひどく崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。A014に切られる。				
A038	H5-54	N-4°-W	3.65×3.7	0.15	1基
	プランは不整形円形。土柱穴4本。床面は軟弱であるが中央部にて少し硬度を有する。炉内の火床は淡い赤色に変色している。				

第6表 縄文時代土坑一覧表(1)

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	長軸×短軸	深さ	備考
D007	G5-38	—	1.05×1.05	0.25	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D008	G5-39	—	1.75×1.65	0.5	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D009	H4-91	—	1.75×0.8	0.35	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D011	H5-45	—	1.3×1.15	0.5	用途不明。覆まる途中で火が燃やされる。

第7表 縄文時代土坑一覧表(2)

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	長軸×短軸	深さ	備考
D014	H6-60	—	0.85×0.45>	0.15	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。 A039に切られる。
D016	H6-17	—	1.2×0.7	0.35	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D018	J5-93	N-1°-E	1.75×0.9	0.7	陥し穴か。遺構内に火・熱は受けてない。
D019	I5-60	N-26°-E	1.4×0.95	1.15	陥し穴。遺構内に火・熱は受けてない。
D023	16-85	—	1.45×1.2	0.65	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D028	K5-34	N-10°-W	1.85×1.05	0.85	陥し穴。遺構内に火・熱は受けてない。
D031	I7-14	N-36°-E	2.7×1.15	0.5	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D032	I7-22	N-59°-E	3.45×1.1	1.2	陥し穴。遺土の最下層はローム主体層。
D033	I7-31	N-25°-E	2.85×1.0	1.1	陥し穴。遺土の最下層はローム主体層。

第8表 縄文時代がく 覧表

(単位m)

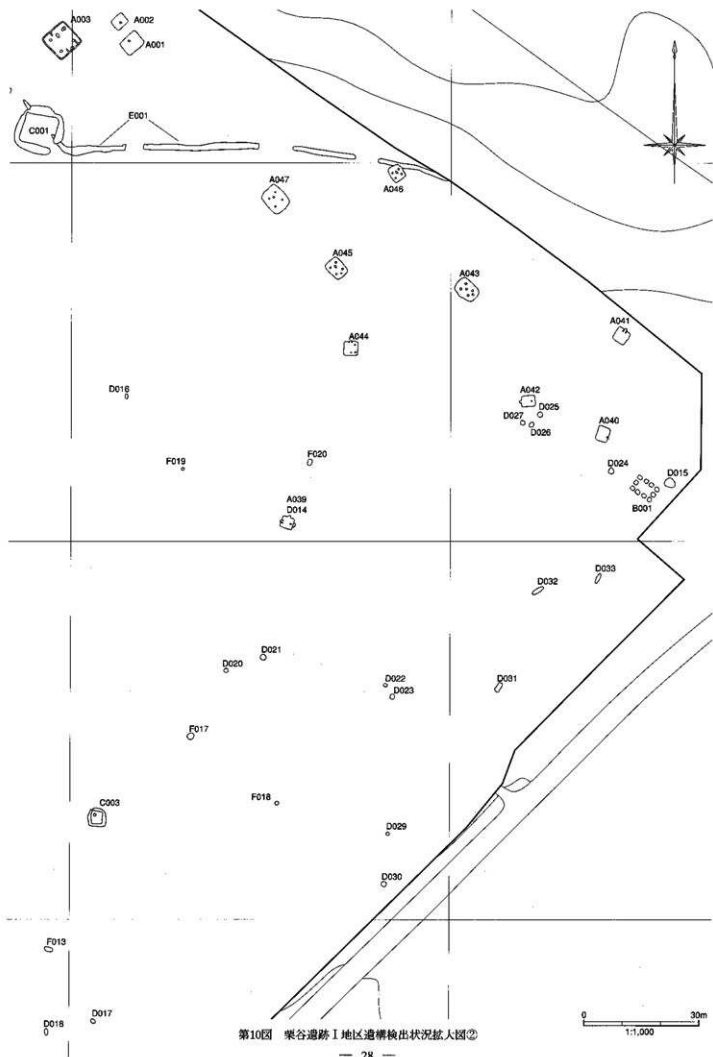
遺構番号	位置	主軸方位	長軸×短軸	深さ	備考
F001	G5-79	N-47°-W	0.85×0.6	0.05	火床は淡い赤色に変色している。
F002	G5-78	—	0.9×0.9	0.2	遺構内に火床はない。
F003	G5-77	N-60°-W	0.95×0.45	0.05	遺構内に火・熱を受けているが、変色はない。
F004	G5-77	N-72°-E	1.6×1.2	0.1	火床は真っ赤に変色している。
F005	G5-65	N-87°-W	0.6×0.45	0.05	火床は淡い赤色に変色している。
F006	G5-54	—	1.4×1.35	0.25	遺構内に火・熱を受けているが、変色はない。
F007	G5-45	N-33°-E	1.4×0.7	0.1	火床は真っ赤に変色している。
F008	G5-17	N-87°-W	0.75×0.5	0.1	火床は淡い赤色に変色している。
F009	G4-96	N-36°-W	0.95×0.6	0.1	火床は淡い赤色に変色している。
F010	H5-11	N-10°-E	0.95×0.65	0.05	火床は淡い赤色に変色し始めた程度のもの。
F011	H5-22	N-51°-W	0.95×0.45	0.05	火床は淡い赤色に変色し始めた程度のもの。
F012	H4-86	N-71°-E	0.75×0.45	0.15	火床は淡い赤色に変色し始めた程度のもの。
F013	J5-91	N-74°-W	2.2×1.15	0.4	遺構内に火床はない。
F014	I5-80	N-59°-E	1.3×0.95	0.15	火床は淡い赤色に変色し始めた程度のもの。
F015	I5-87	—	1.35×1.3	0.5	遺構内に火床はない。
F016	I5-62	N-15°-E	1.3×1.0	0.35	遺構内に火床はない。
F017	I6-36	N-83°-W	1.7×1.7	0.5	遺構内に火床はない。
F018	I6-57	N-2°-W	1.05×0.95	0.15	遺構内に火床はない。
F019	H6-29	N-76°-E	0.85×0.65	0.25	遺構内に火床はない。
F020	H6-68	N-19°-E	1.6×1.15	0.5	遺構内に火床はない。
F021	K5-26	N-54°-W	0.8×0.65	0.2	火床はない。埋まる途中で火が燃やされる。
F022	K5-41	N-46°-E	2.4×1.45	0.7	遺構内に火床はない。



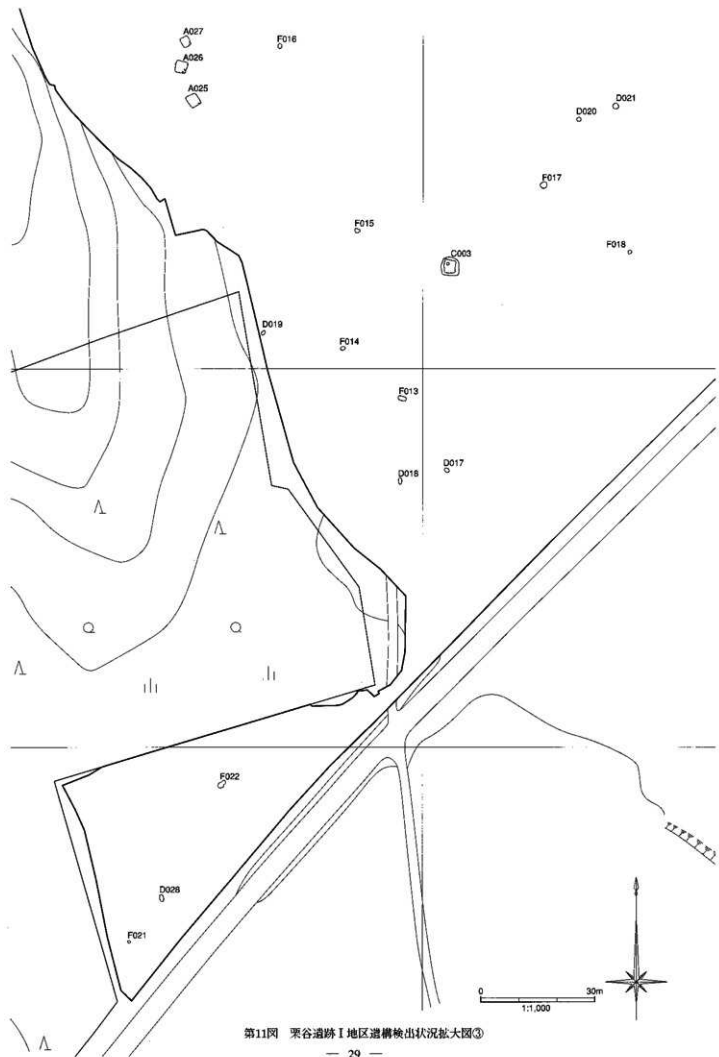
第8图 栗谷遺跡Ⅰ地区遺構検出状況図



第9图 栗谷遺跡Ⅰ地区遺構検出状況拡大図①



第10図 栗谷遺跡Ⅰ地区遺構検出状況拡大図②

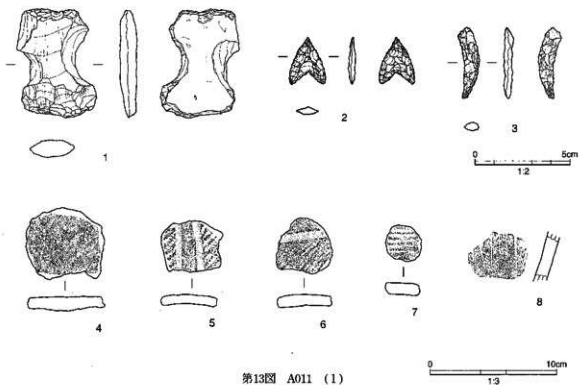
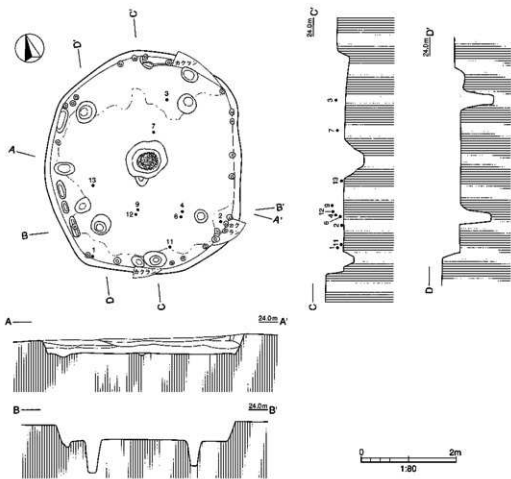


第11图 栗谷遺跡 I 地区遺構検出状況拡大図③



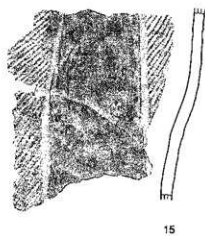
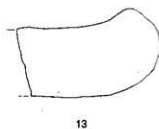
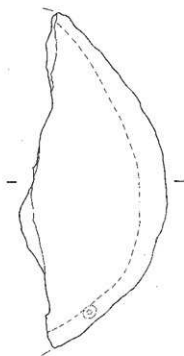
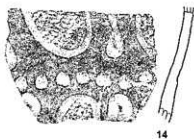
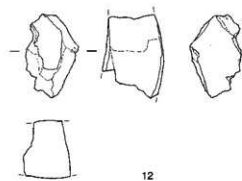
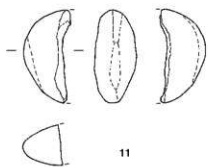
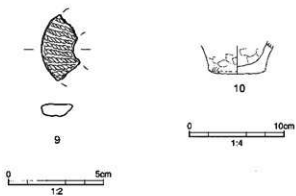


第12圖 繩文時代遺構位置圖



第13图 A011 (1)





第14图 A011 (2)





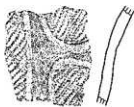
16



17



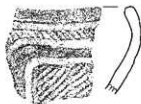
18



19



20



21



22



23

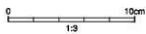


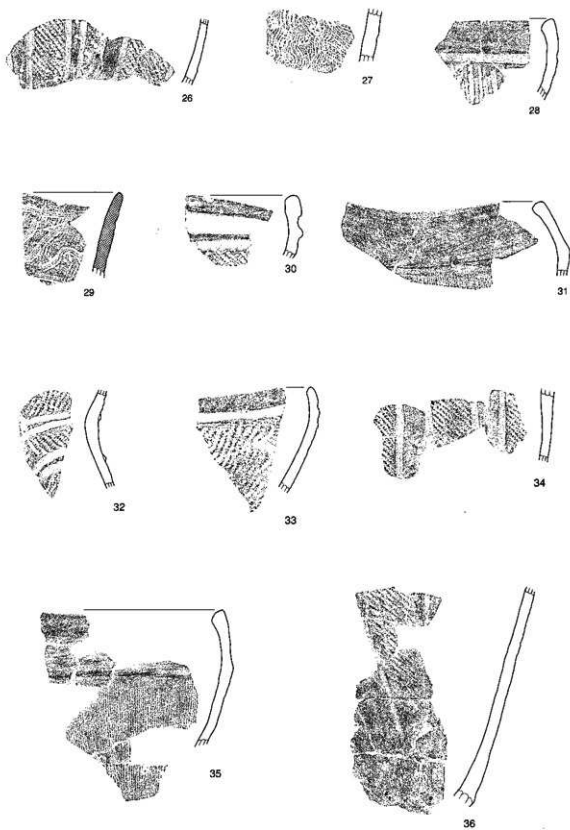
24



25

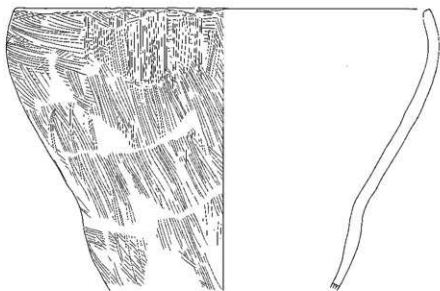
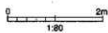
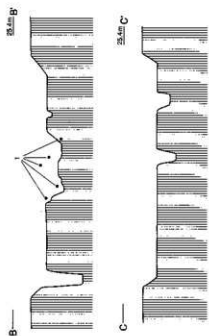
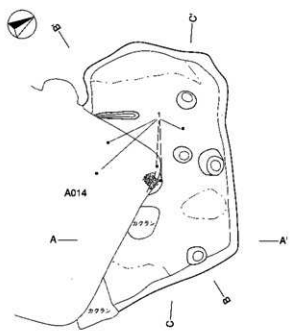
第15图 A011 (3)



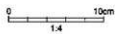


第16图 A011 (4)

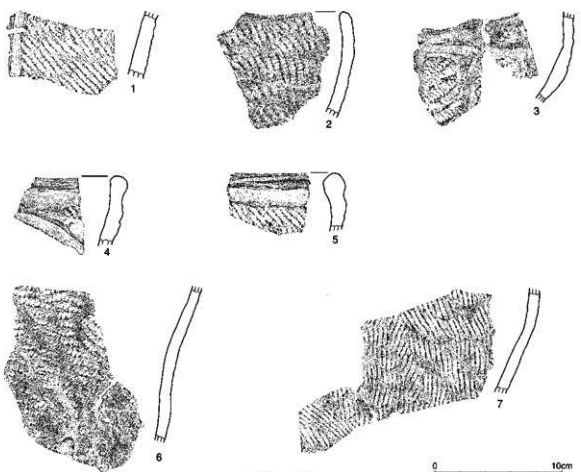
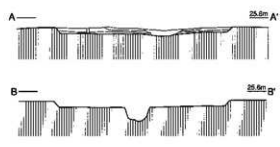
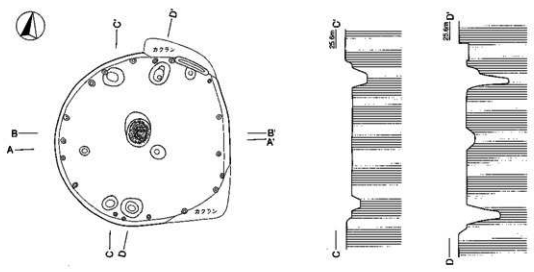




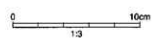
1

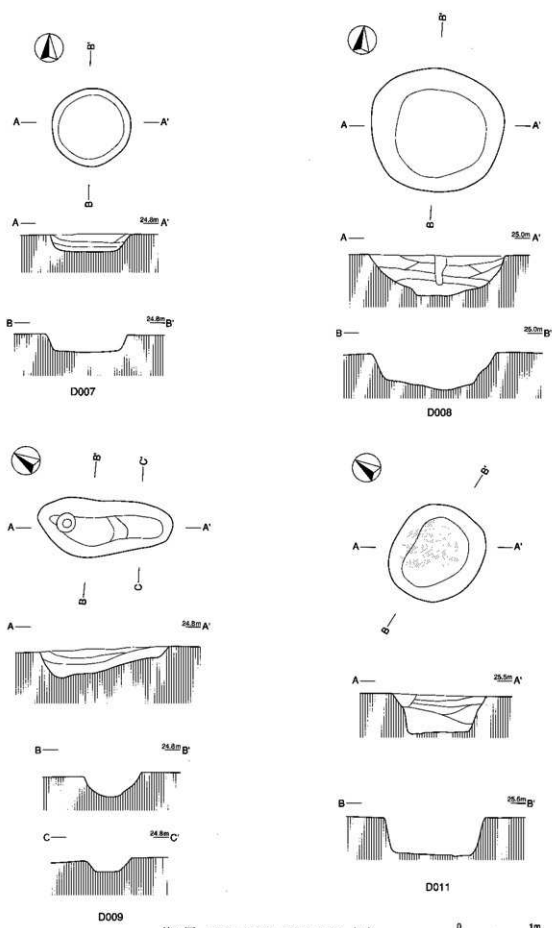


第17图 A015



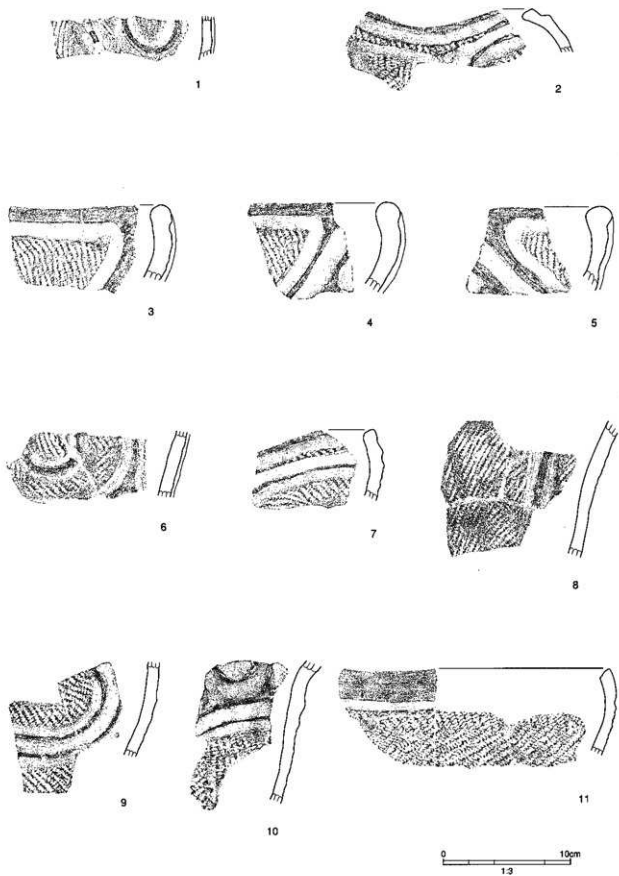
第18回 A038





第19图 D007·D008·D009·D011 (1)





第20图 D011 (2)



A039

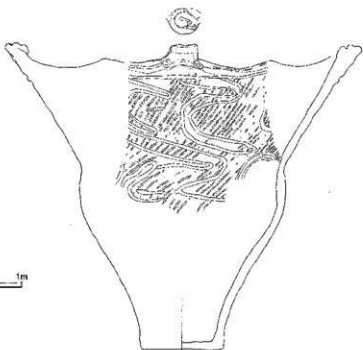
A—



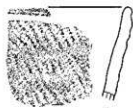
—A'

A—

—A'



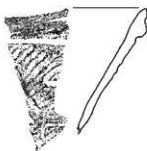
1



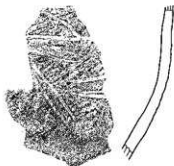
2



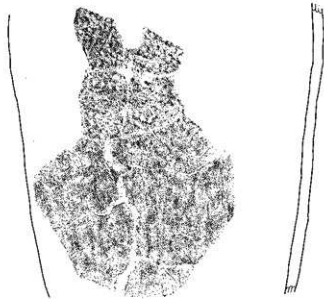
3



4



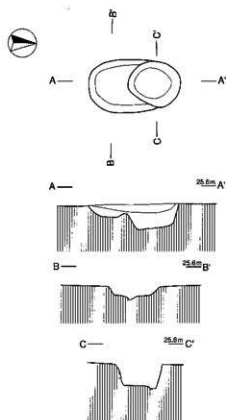
5



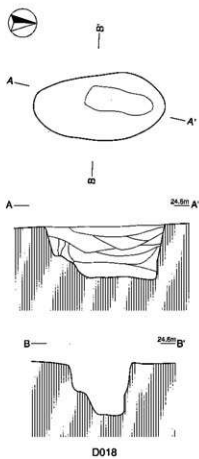
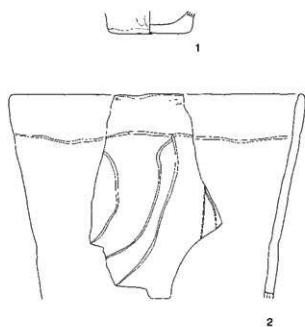
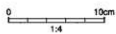
6



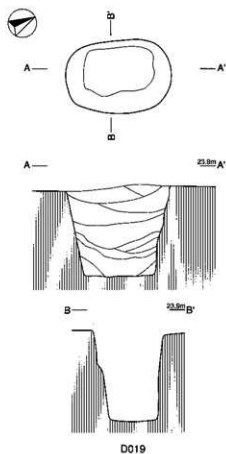
第21网 D014

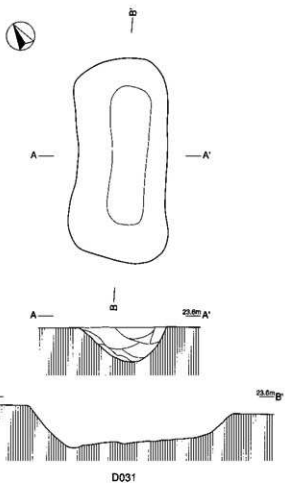
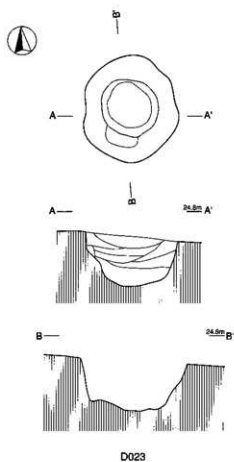


第22图 D016

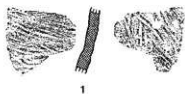
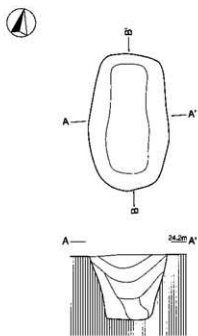


第23图 D018 · D019

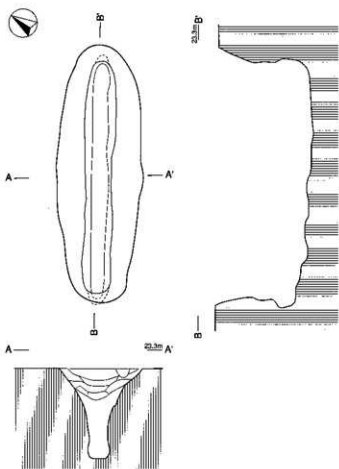




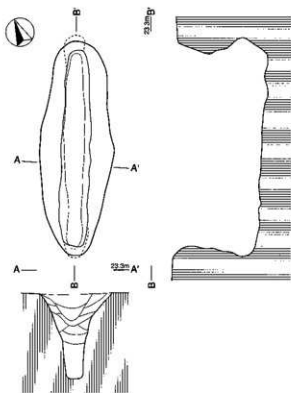
第24图 D023 · D031



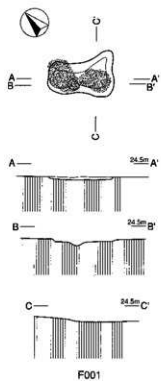
第25图 D028



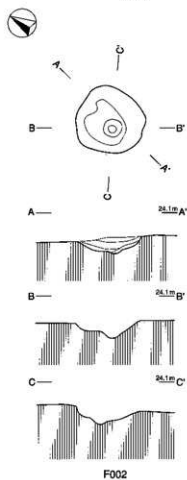
D032



D033



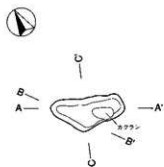
F001



F002

第26图 D032 · D033 · F001 · F002





A— 23.9m A'



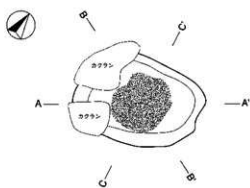
B— 23.8m B'



C— 23.8m C'



F003



A— 23.8m A'



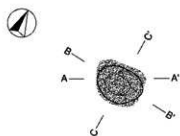
B— 23.8m B'



C— 23.8m C'



F004



A— 23.4m A'



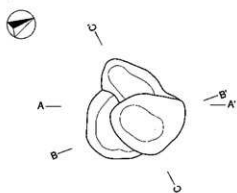
B— 23.4m B'



C— 23.4m C'



F005



A— 23.8m A'



B— 23.8m B'



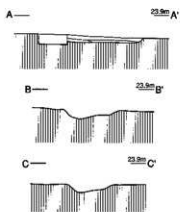
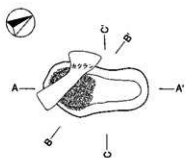
C— 23.8m C'



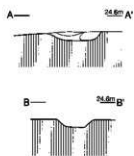
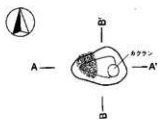
F006



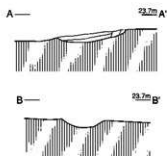
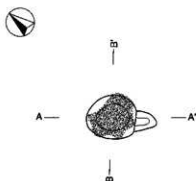
第27图 F003 · F004 · F005 · F006



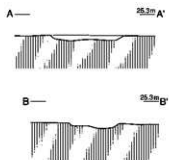
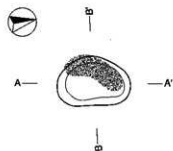
F007



F008

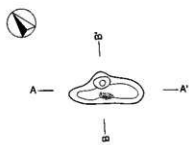


F009



F010





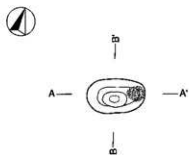
A — 25.4m A'



B — 25.6m B'



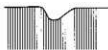
F011



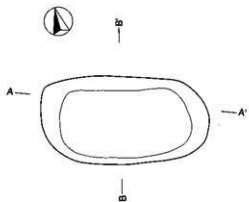
A — 23.6m A'



B — 23.8m B'



F012



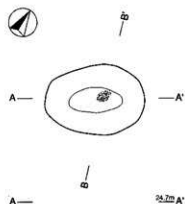
A — 24.7m A'



B — 24.7m B'



F013



A — 24.7m A'



B — 24.7m B'

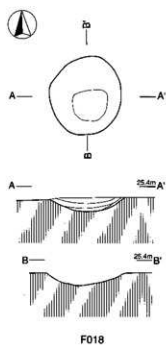
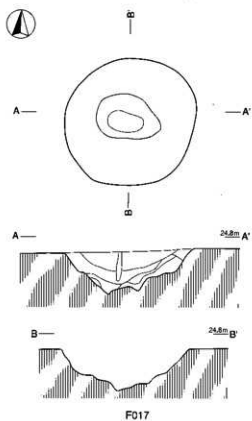
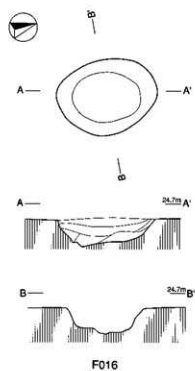
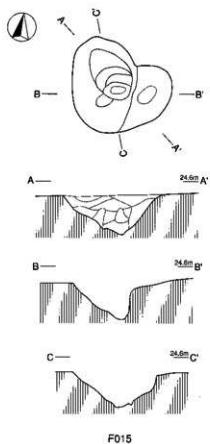


F014

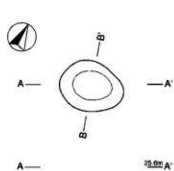


第29网 F011 · F012 · F013 · F014





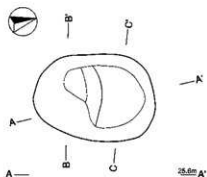
第30图 F015 · F016 · F017 · F018



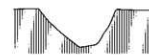
B — 25.0m B'



F019



B — 25.0m B'

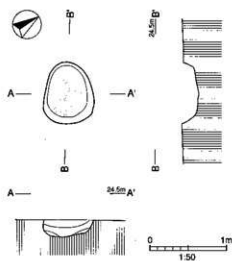


C — 25.0m C'



F020

第31网 F019 · F020



1

2



3

4



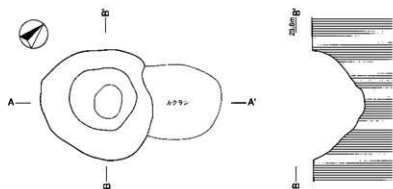
5



6

第32图 F021





第33図 F022

### 第3節 弥生時代

栗谷遺跡Ⅰ地区における弥生時代の遺構は、竪穴住居跡16軒、方形周溝墓3基、土坑8基が検出されている。竪穴住居跡は台地縁辺部と台地中央部の2群に分かれている。両者とも散在しており、集中区は認められない。竪穴住居跡のほとんどが後期に位置づけられるが、A016とA017は古墳時代前期まで営まれていたものである。方形周溝墓も散在しており、主体部があるのはC002の1基だけである。C001は後期から古墳時代前期にかけて位置づけられる。土坑も調査区全域に散在している。

第9表 弥生時代竪穴住居跡一覧表(1)

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	規模(主軸×横軸)	壁高	炉
A013	H5-21	N-51°-W	3.5×3.65	0.3	1基
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は伊の周辺部を除いて硬い床となる。壁はひどく崩れている。炉内に赤く変色した所はない。A014に切られる。				
A016	G5-40	N-53°-W	11.2×8.15	0.55	1基
	プランは小矩形。主柱穴4本。床面は中央部を除いて硬い床となる。壁は上部がひどく崩れている。伊内の火床は赤く変色している。拡張住居である。				
A017	G5-10	N-62°-W	7.45×6.3	0.65	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴は4本。床面は硬度を有し中央部が特に硬い床となる。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は赤く変色している。拡張住居である。				
A018	H4-91	N-10°-E	2.45×2.45	0.35	なし
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は硬度を有し北東壁沿と南西壁沿が特に硬い床となる。壁はひどく崩れている。				
A020	G5-19	N-56°-W	4.25×3.55	0.3	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は周辺部を除いて硬い床となる。壁はひどく崩れている。炉内の火床は赤く変色している。				
A023	G5-27	N-52°-W	6.85×5.3	0.5	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴4本。床面は硬度を有し周辺部が特に硬い床となる。壁はひどく崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A029	H5-60	N-42°-W	3.45×3.6	0.35	1基
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は硬度を有し東側半分が特に硬い床となる。壁はひどく崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A030	H5-48	N-44°-W	3.9×3.5	0.5	1基
	プランは隅丸方形。主柱穴4本。床面は中央部を除いて硬い床となる。南東壁沿の床面が一段低くなっている。壁はひどく崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A031	H5-48	N-56°-W	3.7×3.1	0.3	1基
	プランは不整隅丸方形。主柱穴なし。床面は硬度を有し中央部と西壁沿が特に硬い床となる。壁はひどく崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A033	H5-17	N-36°-W	4.95×4.0	0.55	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面はほぼ全面が硬い床となる。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A035	H5-77	N-54°-W	4.55×4.5	0.15	1基
	プランは不整円形。主柱穴なし。床面は大半が軟弱で硬い床は一部にしかない。床面の一部が赤色に変色している。壁は崩れている。炉内の火床は赤く変色している。				

第10表 弥生時代竪穴住居跡一覧表(2)

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	規模(主軸×横軸)	築高	炉
A036	H5-66	N-41°-W	4.1×3.25	0.35	1基
	プランは不整形丸長方形。主柱穴なし。床面は中央部を除いて硬い床となる。壁は少し崩れている。炉内の火床は淡い赤色に変色している。				
A043	H7-4	N-48°-W	6.35×4.5	0.6	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴4本。床面は中央部を除いて硬い床となる。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A045	H6-63	N-43°-W	5.4×4.15	0.55	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴4本。床面は中央部を除いて硬い床となる。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A046	H6-81	N-33°-W	4.15×3.6	0.5	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴4本。床面は中央部を除いて硬い床となる。南東壁沿の床面が一段低くなっている。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A047	H6-51	N-43°-W	6.9×5.5	0.6	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴4本。床面は中央部を除いて硬い床となる。南東壁沿の床面が一段低くなっている。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。埋土中に奈良・平安時代の遺構がある。				

第11表 弥生時代方形周溝墓一覧表

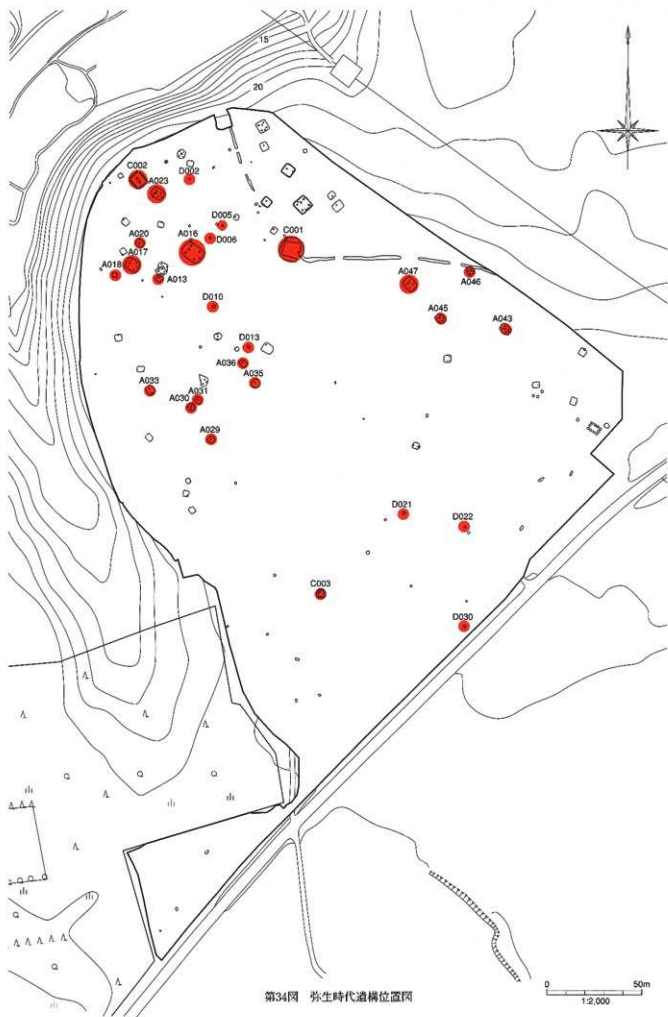
(単位m)

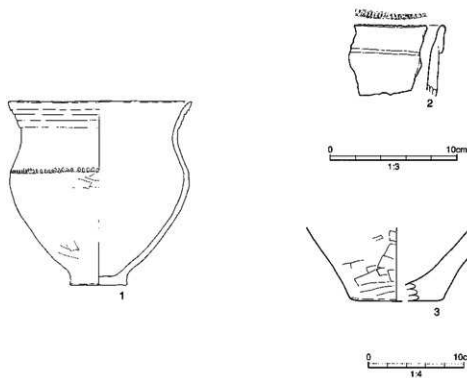
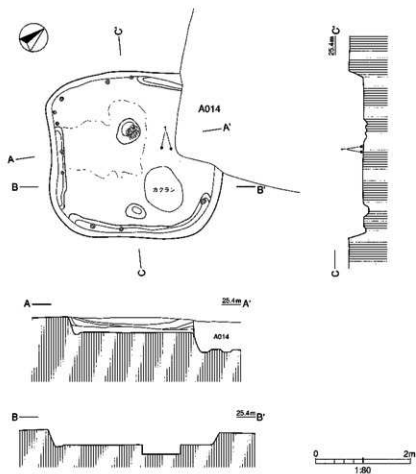
遺構番号	位置	主軸方位	主軸長×横軸長	周溝幅	周溝深さ
C001	G5-100	N-16°-E	12.55×12.5	0.6~2.5	0.25~0.5
	主軸部なし。				
C002	G5-16	N-41°-W	8.45×7.2	0.6~0.65	0.1~0.25
	周溝内側に土体部1基あり。主軸長×横軸長、<3.1>×1.05。深さ、0.15。				
C003	I6-8	N-4°-E	4.9×4.7	0.55~1.0	0.1~0.15
	周溝内側に上土1基あり。長軸×短軸、0.75×0.65。深さ、0.2。				

第12表 弥生時代土坑一覧表

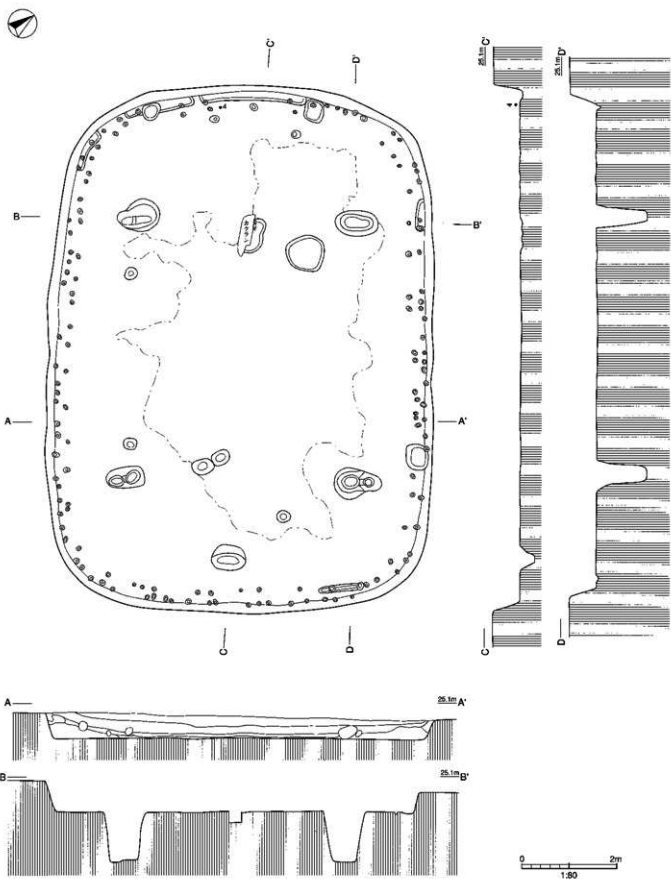
(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	長軸×短軸	深さ	備考
D002	G5-36	—	0.7×0.6	0.1	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D005	G5-58	—	0.95×0.95	0.1	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D006	G5-49	—	1.3×1.3	0.4	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D010	H5-53	—	1.9×1.45	0.45	用途不明。遺構内に火・熱を受けている。
D013	H5-65	—	2.0×1.35	0.95	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D021	I6-53	—	1.55×1.5	0.55	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D022	I6-84	—	0.95×0.85	0.4	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D030	I6-90	—	1.4×1.35	0.5	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。



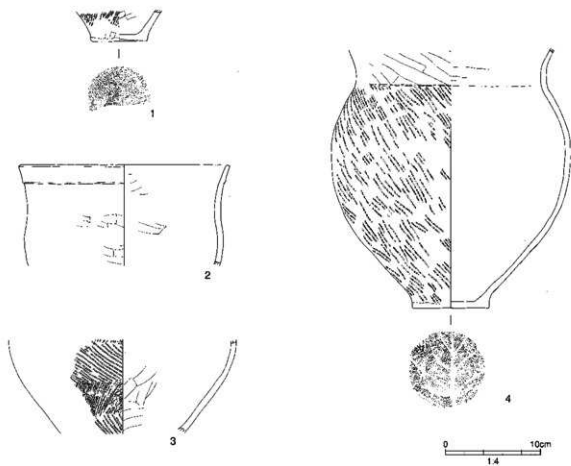


第35图 A013

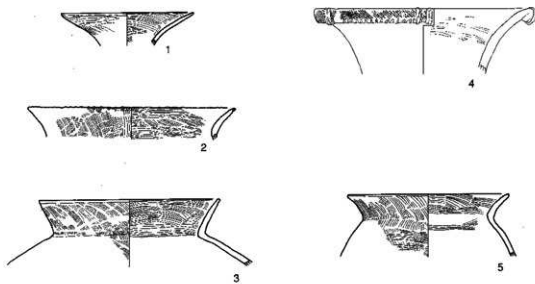


第36图 A016 (1)

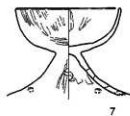
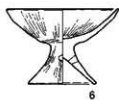
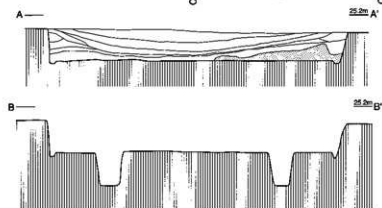
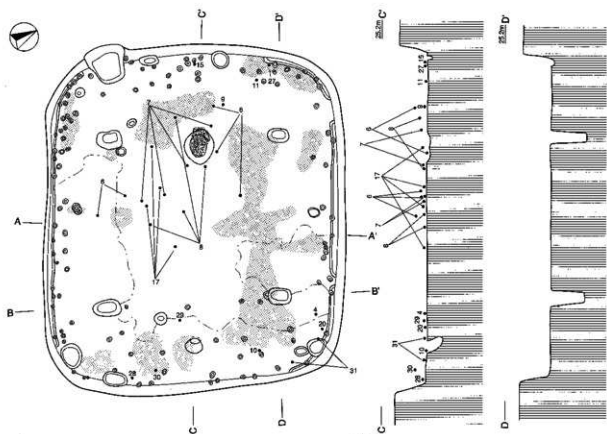




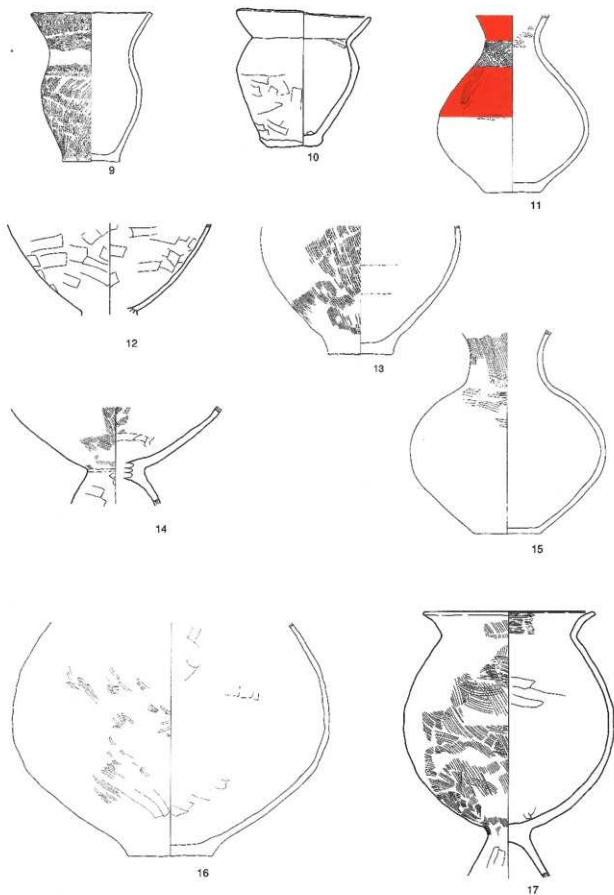
第37图 A016 (2)



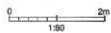
第38图 A017 (1)

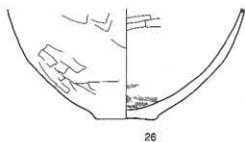
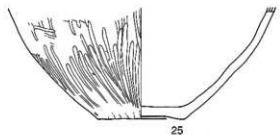
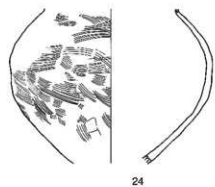
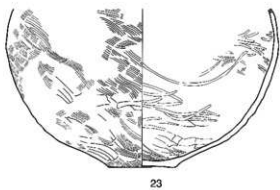
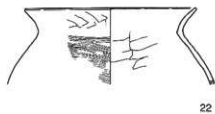
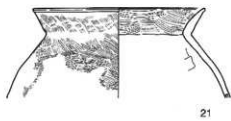
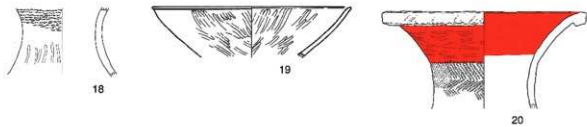


第39图 A017 (2)

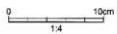


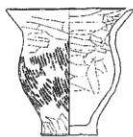
第40图 A017 (3)





第41图 A017 (4)

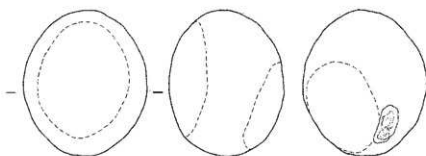




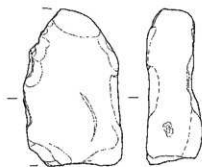
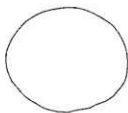
27



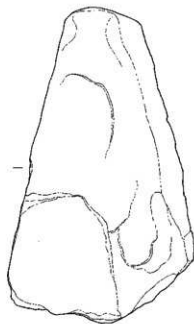
28



29



30

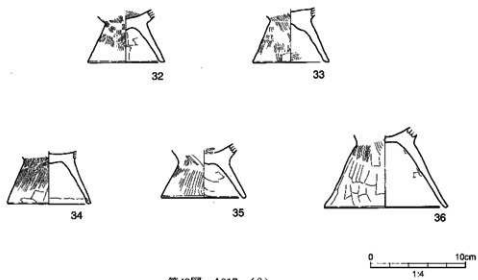


31

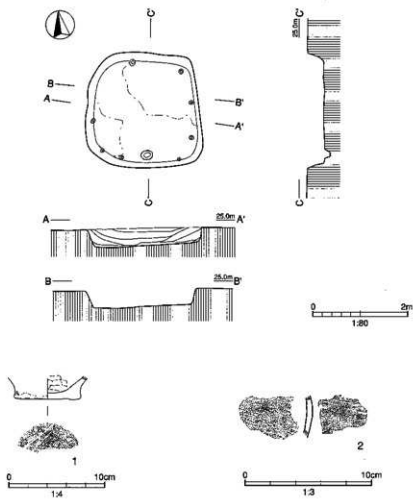


第42图 A017 (5)

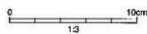
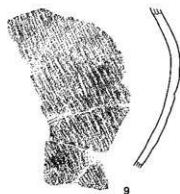
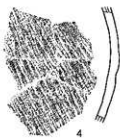
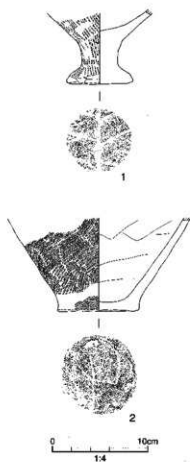
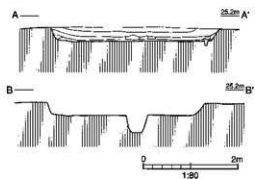
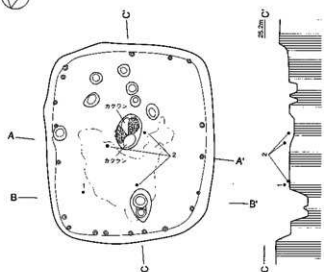




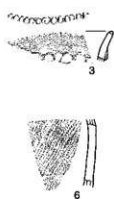
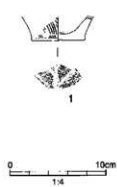
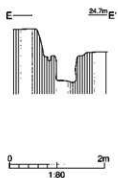
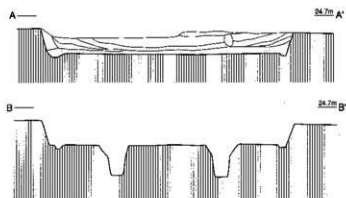
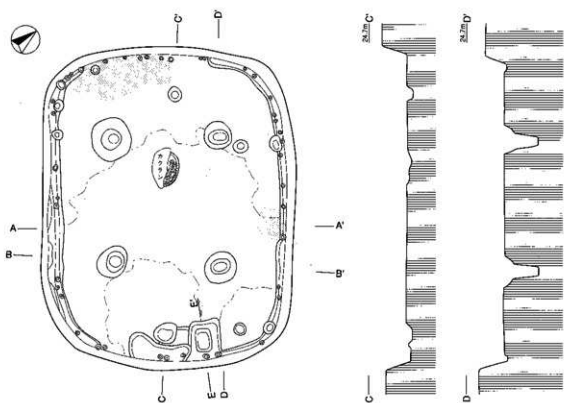
第43图 A017 (6)



第44图 A018

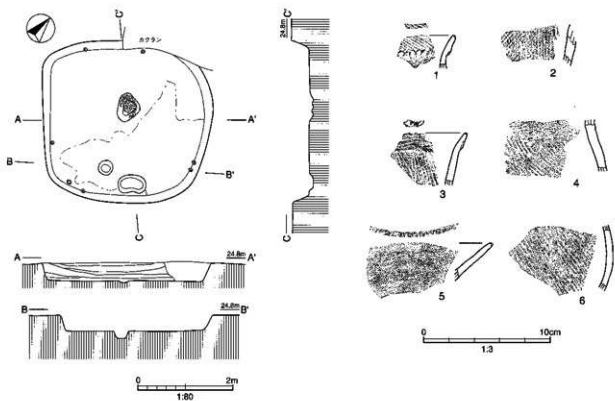


第45図 A020

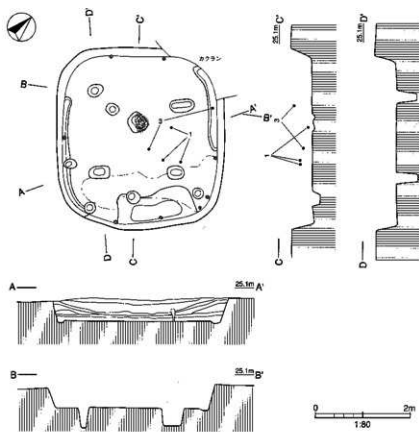


第46图 A023

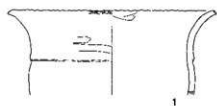




第47図 A029



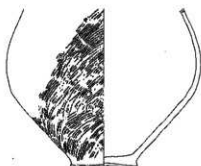
第48図 A030 (1)



1



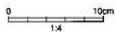
2



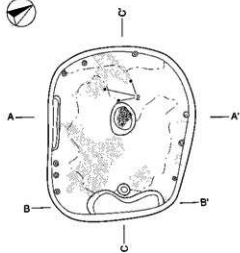
1



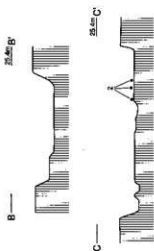
3



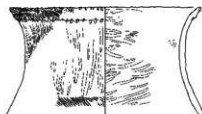
第49图 A030 (2)



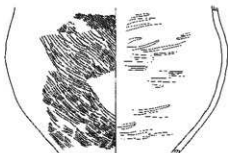
A ————— 25.4m A'



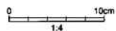
1



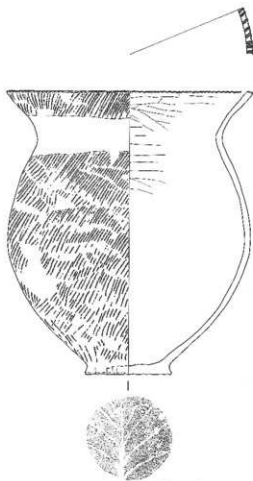
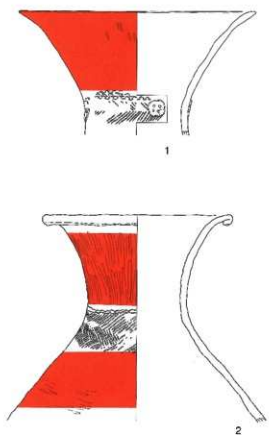
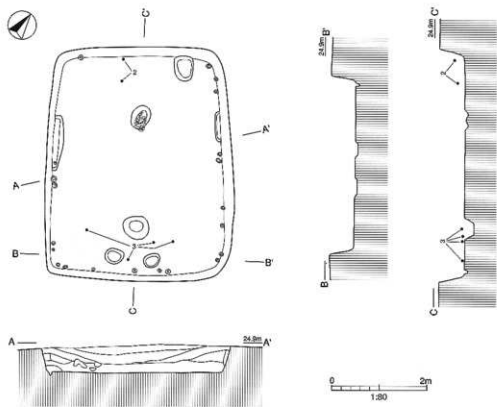
2



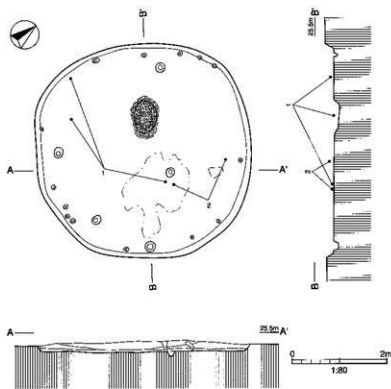
3



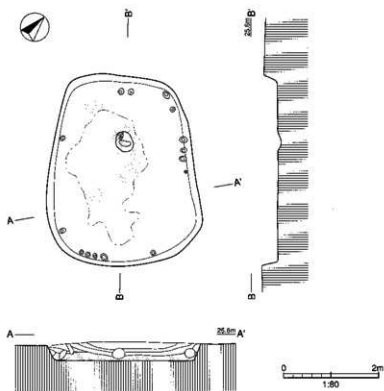
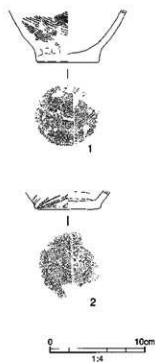
第50图 A031



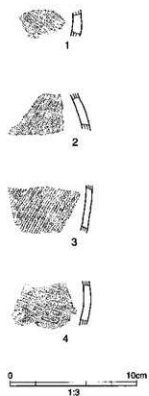
第51图 A033

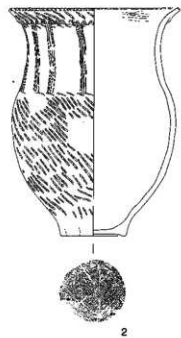
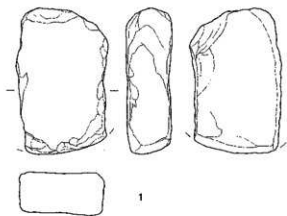
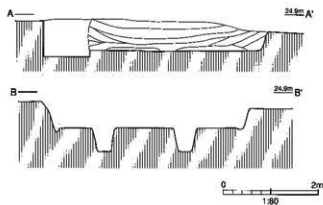
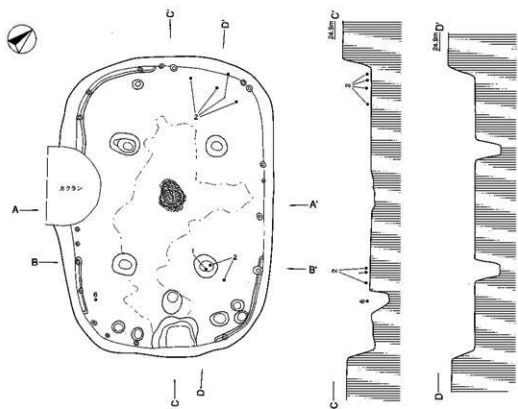


第52图 A035

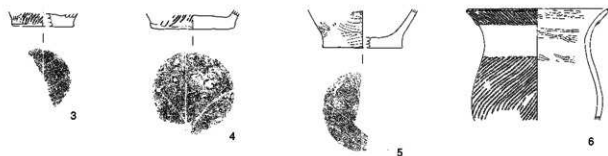


第53图 A036

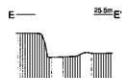
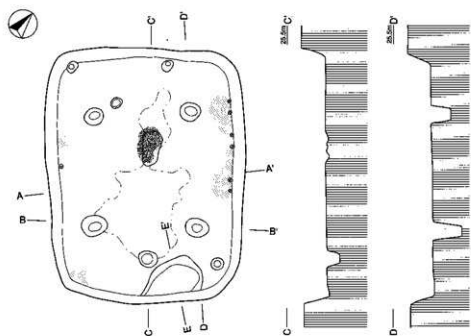




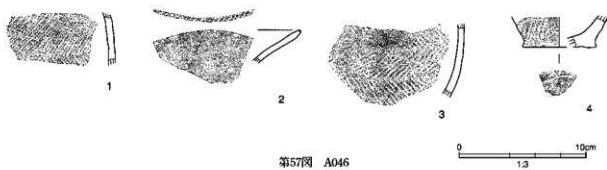
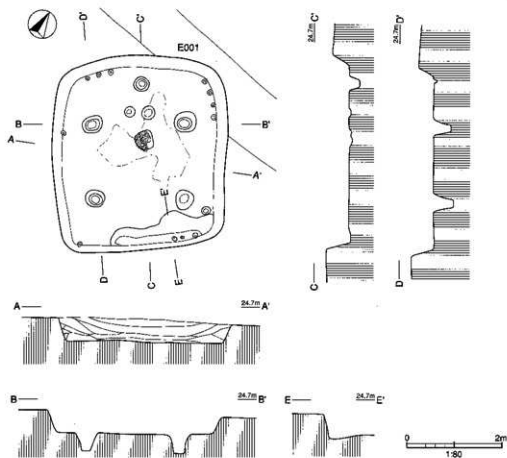
第54图 A043 (1)



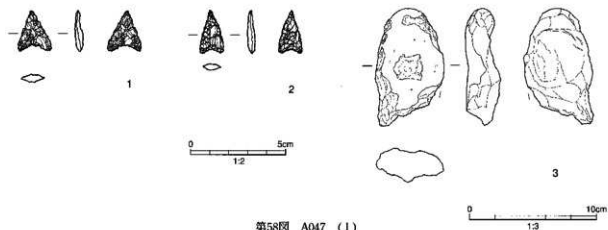
第55图 A043 (2)



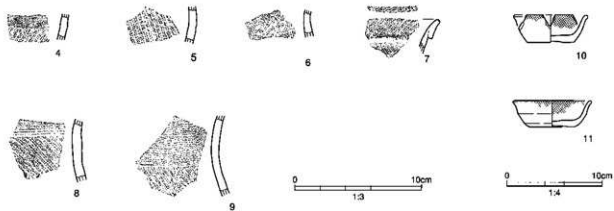
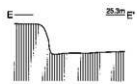
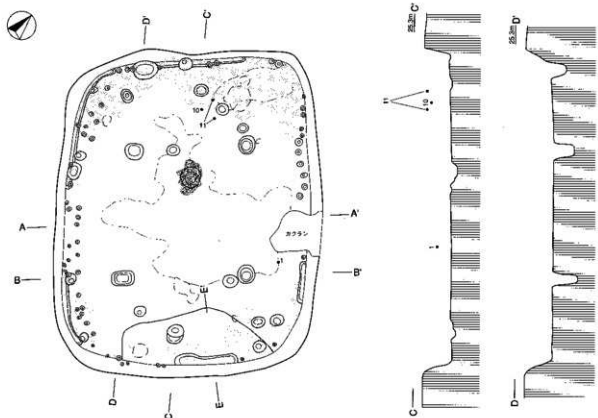
第56图 A045



第57图 A046

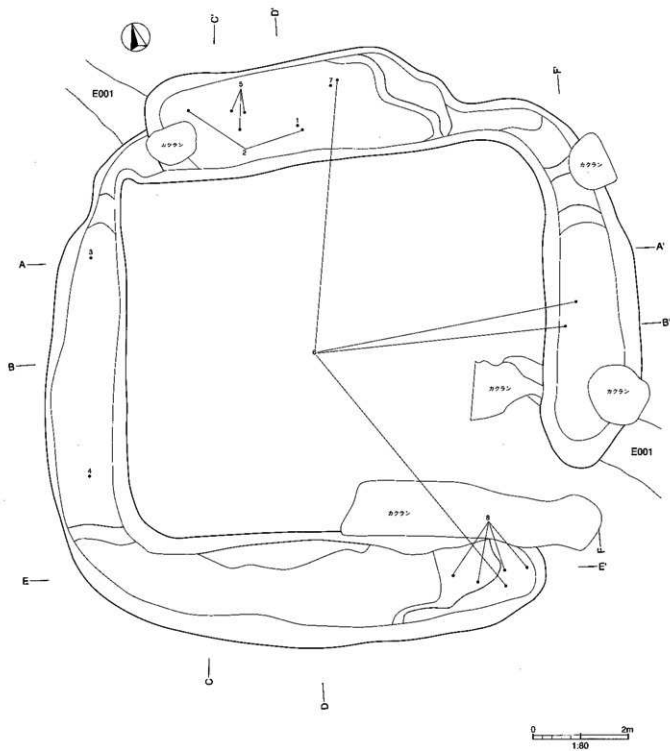


第58图 A047 (1)

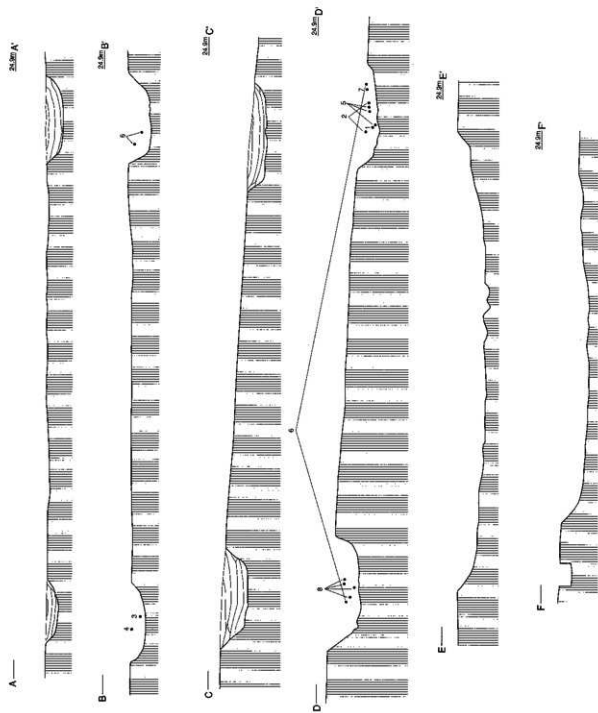


第59号 A047 (2)

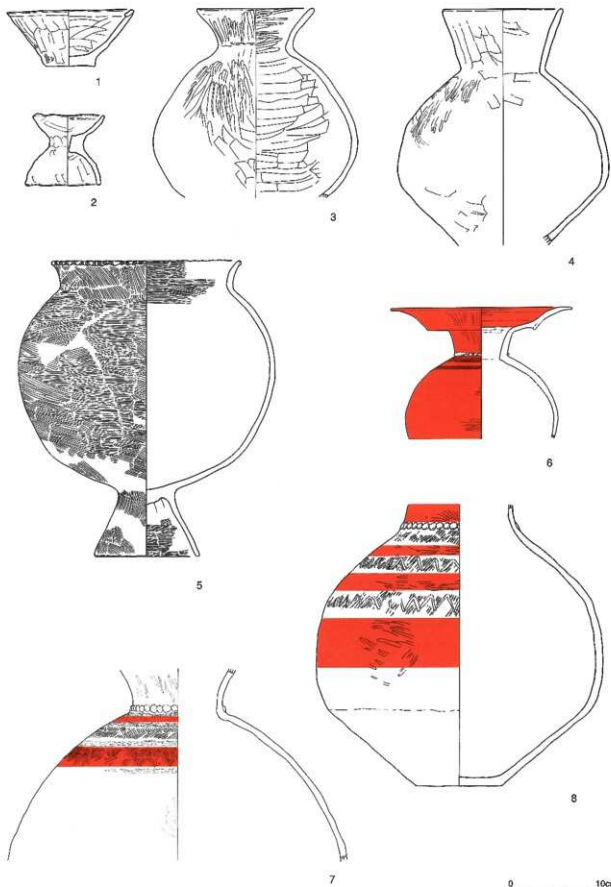




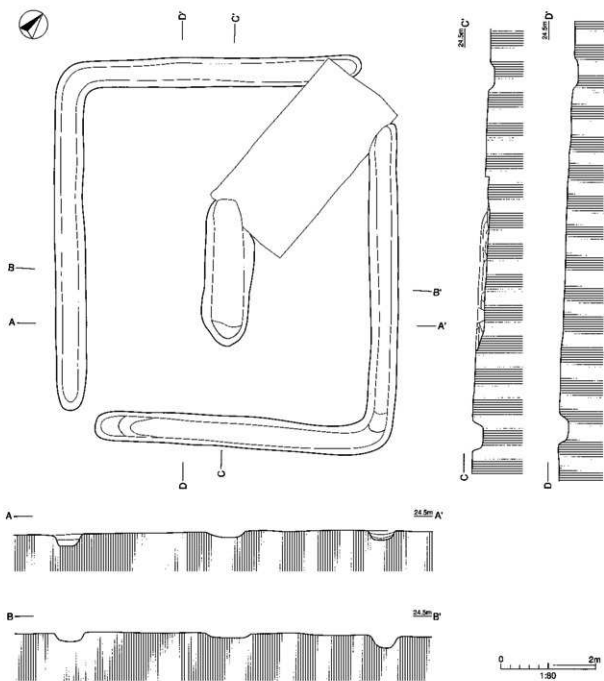
第60図 C001 (1)



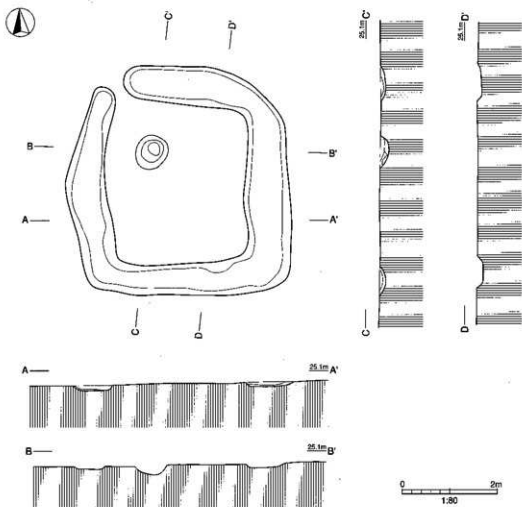
第61图 C001 (2)



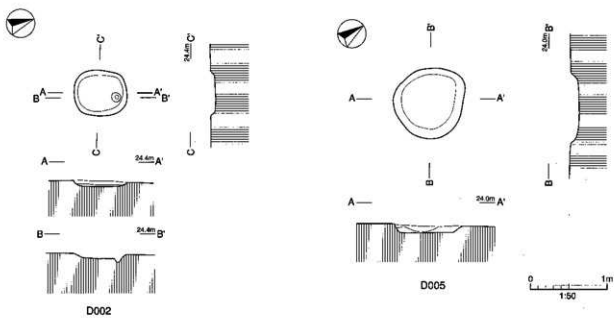
第62图 C001 (3)



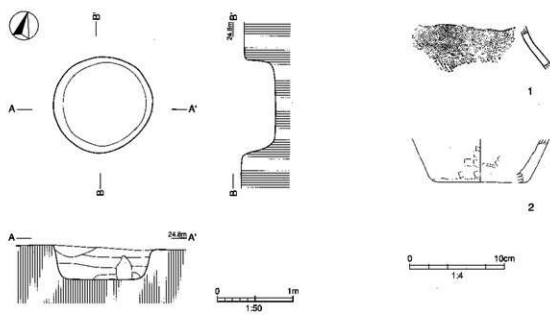
第63图 C002



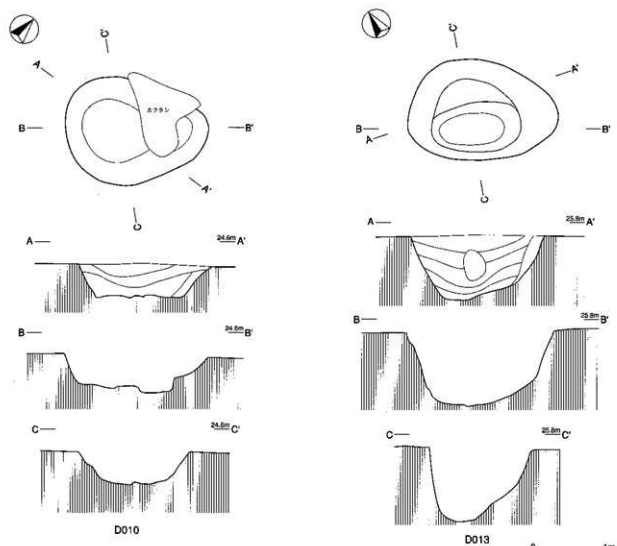
第64图 C003



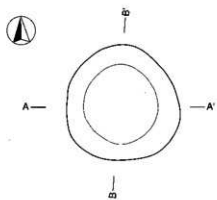
第65图 D002·D005



第66图 D006



第67图 D010 · D013



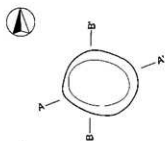
A — 25.5m A'



B — 25.5m B'



D021



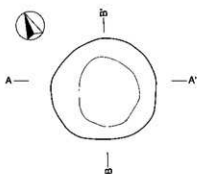
A — 26.7m A'



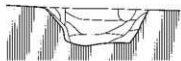
B — 24.7m B'



D022



A — 25.6m A'



B — 25.6m B'



D030



第68图 D021 · D022 · D030

## 第4節 古墳時代

栗谷遺跡Ⅰ地区における古墳時代の遺構は、竪穴住居跡14軒が検出されている。竪穴住居跡は調査区北側の台地縁辺部において11軒が集中して検出されている。他の3軒は、台地西側縁辺部から中央部にかけて散在している。竪穴住居跡のほとんどが前期に位置づけられる。A005とA006は、古い住居の床上に新しい床を張り、壁を拡張して建て替えをしている。

第13表 古墳時代竪穴住居跡一覧表

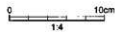
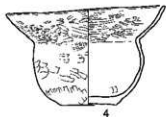
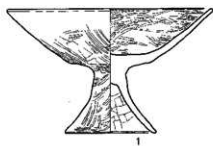
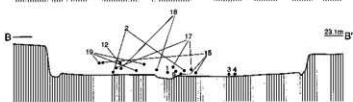
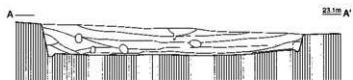
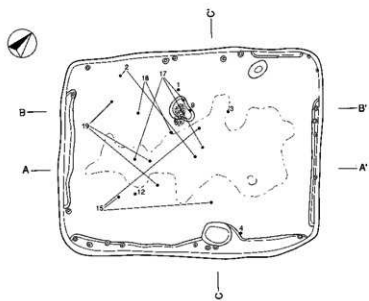
(単位m)

遺構番号	位置	七軸方位	規模(主軸×横軸)	壁高	炉
A001	G6-17	N-41°-W	4.5×5.5	0.6	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は中央部を除いて硬い床となる。床面の一部が赤色に変色している。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A002	G6-17	N-42°-W	3.15×3.85	0.1	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴不切。床面は大半が軟弱で硬い床はない。壁は少し崩れている。北西縁辺の床と壁は検出できなかった。炉内の火床に変色は認められない。				
A003	G5-97	N-43°-W	7.8×7.75	0.7	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴4本。床面は中央部を除いて硬い床となる。両仕切り溝が3本ある。壁はほとんど崩れていない。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A004	G5-89	N-56°-W	3.0×3.45	0.65	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は硬度を有し中央部が特に硬い床となる。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A005a	G5-85	N-55°-W	6.1×5.95	0.4	なし
	A005b住居の拡張住居である。プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は張り床で硬度を有している。壁は少し崩れている。				
A005b	G5-85	N-55°-W	5.6×5.55	0.5	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面はA005a住居の床面を構築する際に壊され軟弱になっている。両仕切り溝が1本ある。炉内の火床は淡い赤色に変色している。				
A006a	G5-77	N-50°-W	4.85×4.5	0.3	1基
	A006b住居の拡張住居である。プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は張り床で周辺部を除いて硬い床となり一部が赤色に変色している。壁は少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A006b	G5-77	N-50°-W	4.3×4.05	0.5	なし
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面はA006a住居の床面を構築する際に壊され軟弱になっている。				
A007	G5-68	N-55°-W	2.55×3.0	0.5	1基
	プランは小形隅丸長方形。主柱穴なし。床面はほぼ全面が硬い床となる。壁は少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A008	G5-74	N-25°-W	4.5×3.85	0.35	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は硬度を有し中央部が特に硬い床となる。壁はほとんど崩れていない。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A009	G5-73	N-31°-W	5.9×5.65	0.65	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴4本。床面は中央部を除いて硬い床となる。床面の一部が赤色に変色している。壁は上部が少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。				
A028	H5-20	N-42°-W	3.9×3.1	0.6	なし
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面はほぼ全面が硬い床となる。壁はひどく崩れている。				
A032	H5-47	N-67°-W	<5.7>×5.2	0.5	1基
	プランは小形影が想定できる。主柱穴2本を検出。床面は硬度を有し中央部が特に硬い床となる。壁は少し崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。拡張住居である。				
A037	H5-75	N-56°-W	5.85×5.05	0.45	1基
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は中央部を除いて硬い床となる。壁はひどく崩れている。炉内の火床は真っ赤に変色している。拡張住居である。				

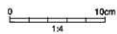
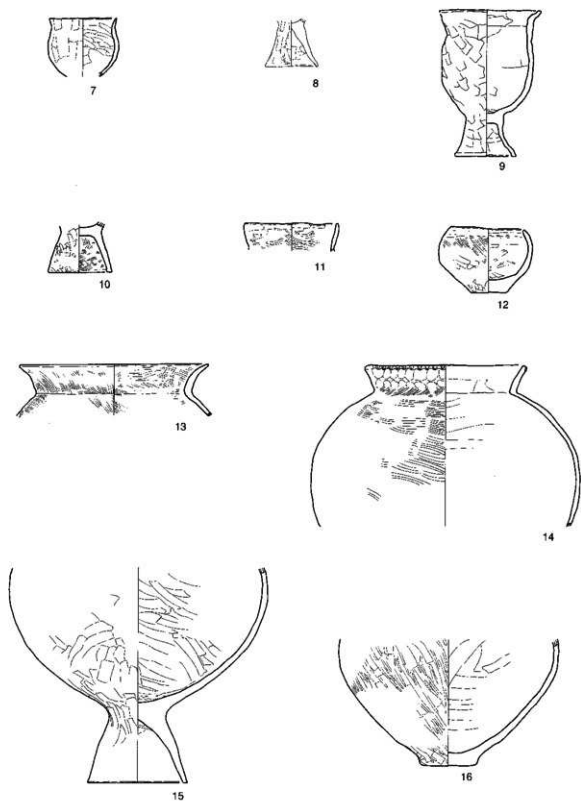




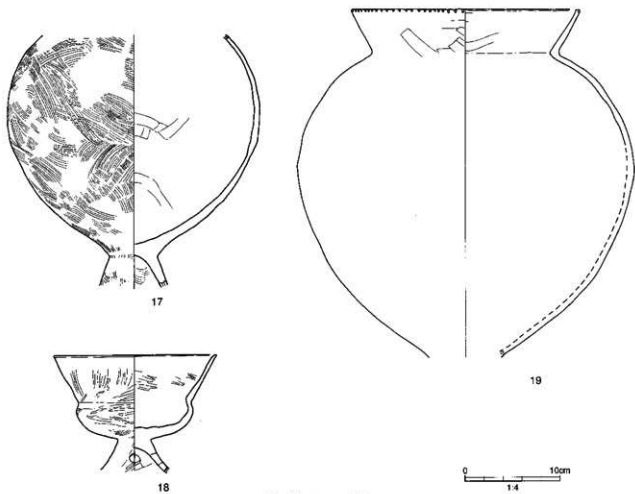
第69圖 古墳時代遺構位置圖



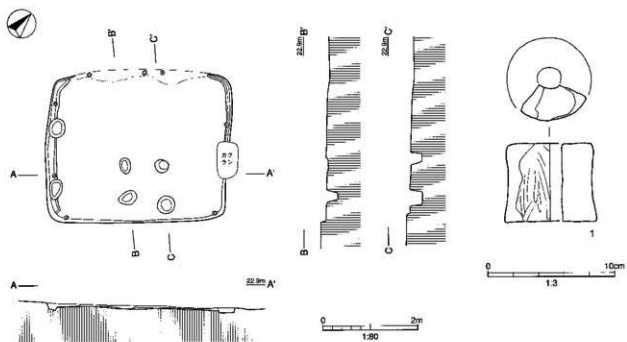
第70图 A001 (1)



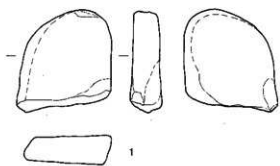
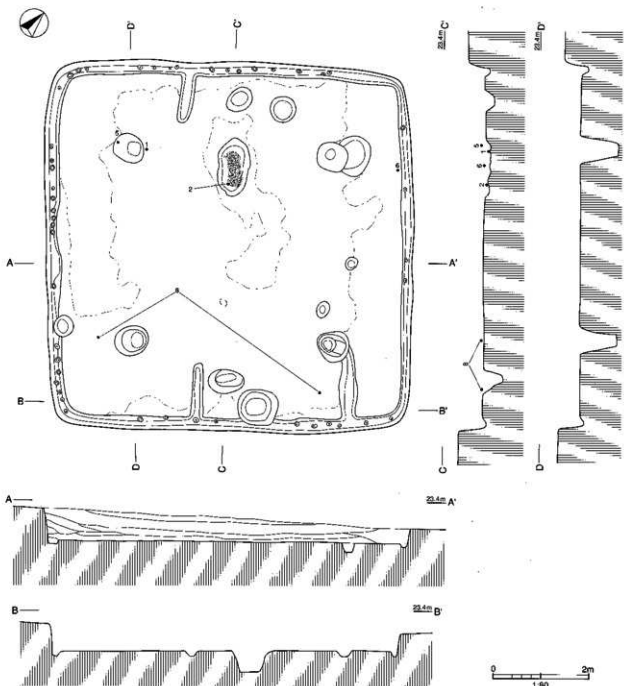
第71图 A001 (2)



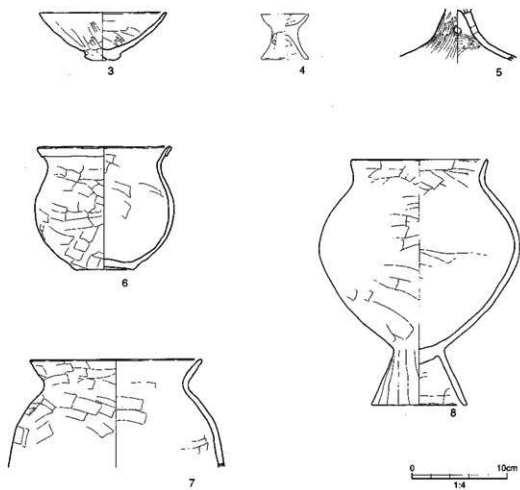
第72图 A001 (3)



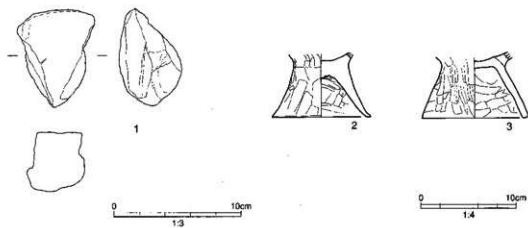
第73图 A002



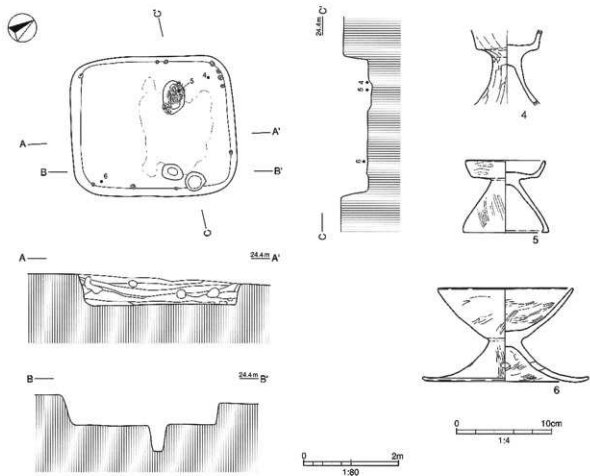
第74图 A003 (1)



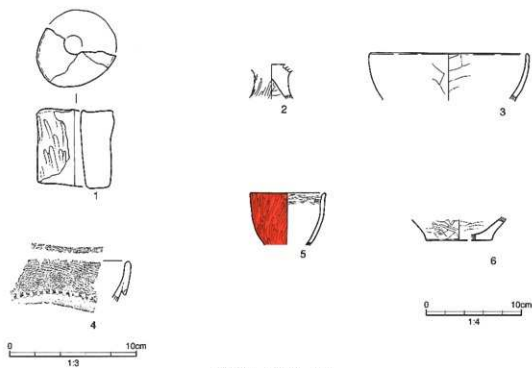
第75图 A003 (2)



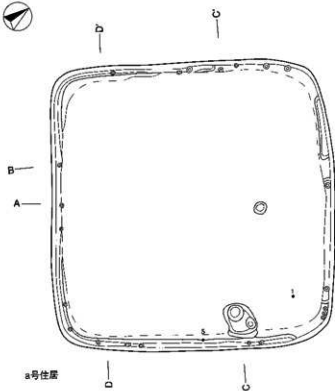
第76图 A004 (1)



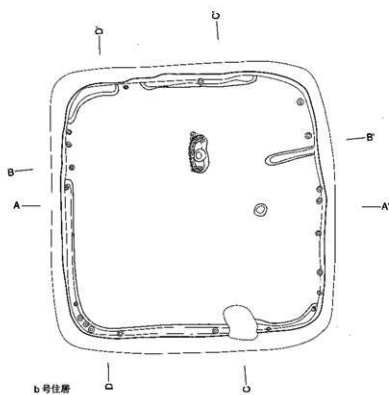
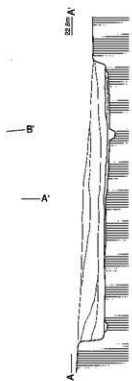
第77图 A004 (2)



第78图 A005ab (1)



a号住居



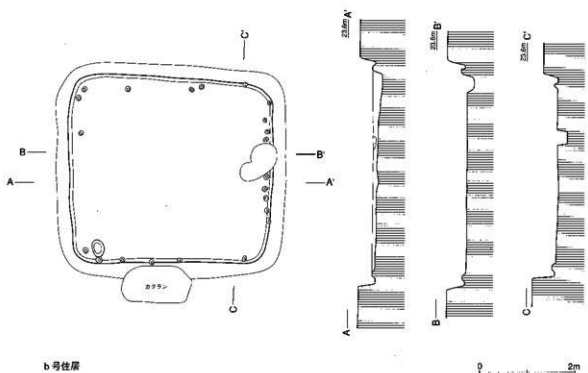
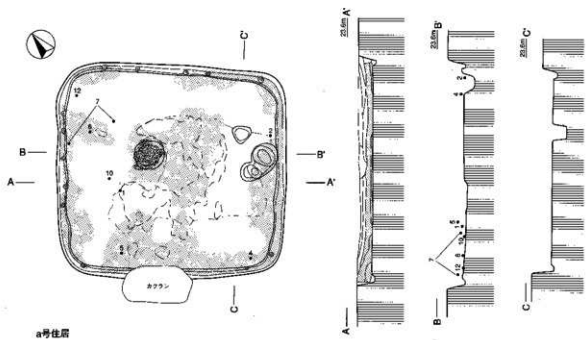
b号住居



第79网 A005ab (2)





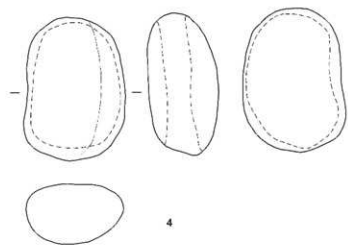


0 1.80 2m



0 10cm 1:4

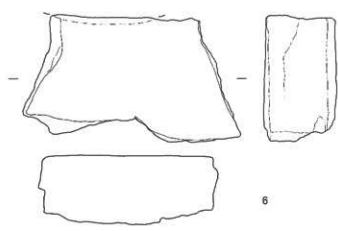
第80図 A006ab (1)



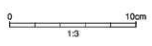
4



5



6



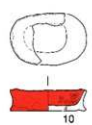
7



8



9



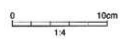
10



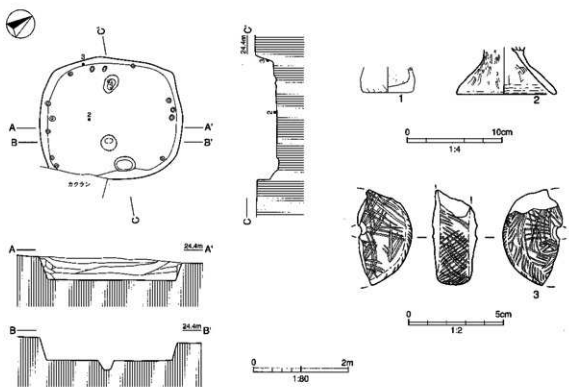
11



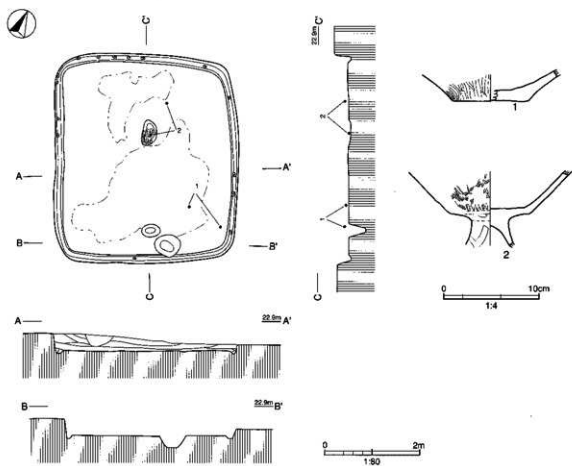
12



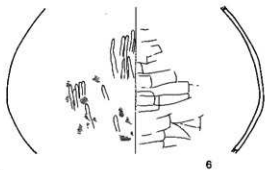
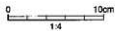
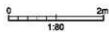
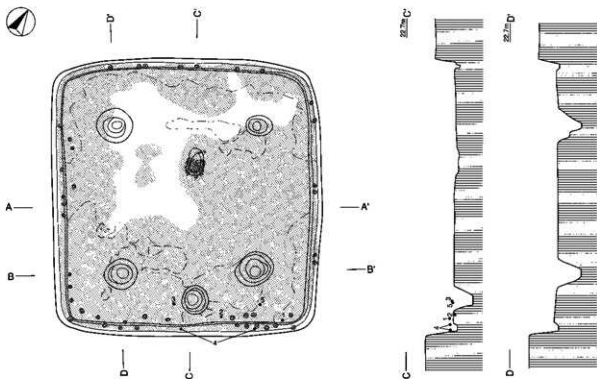
第81图 A006ab (2)



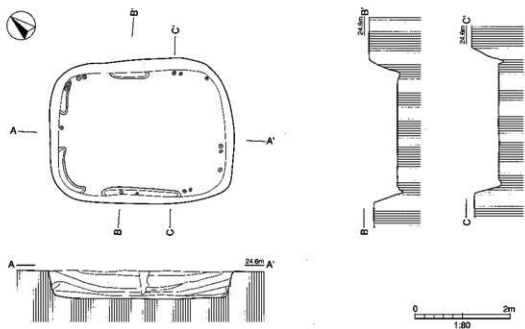
第82図 A007



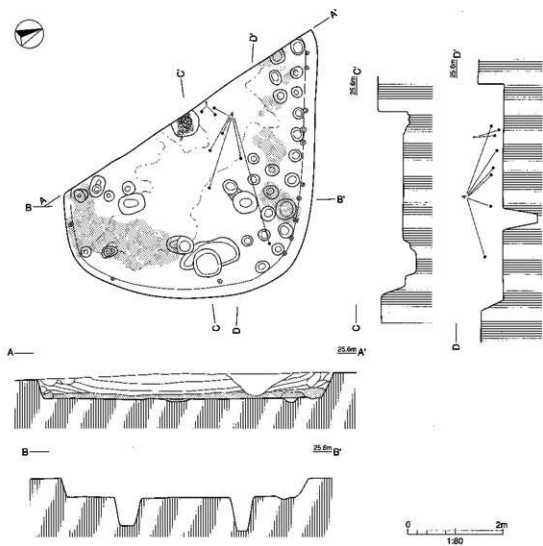
第83図 A008



第84图 A009



第85图 A028



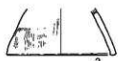
第86图 A032 (1)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



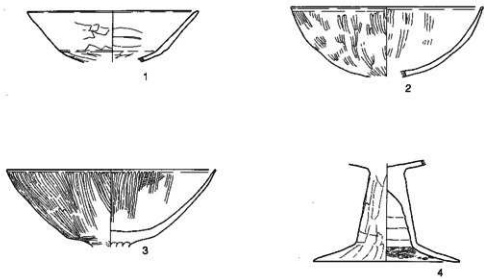
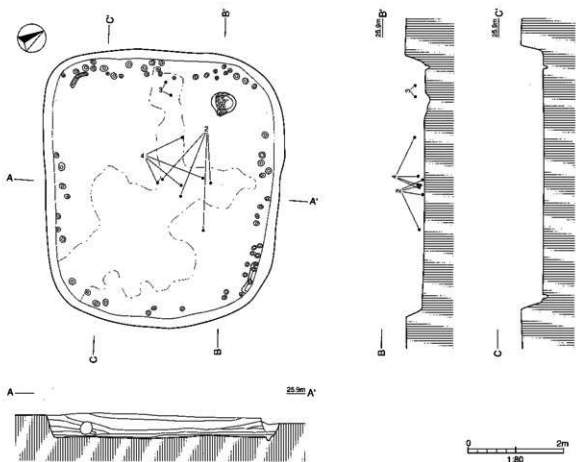
10



11



第87图 A032 (2)



第88图 A037

## 第5節 奈良・平安時代

平谷遺跡Ⅰ地区における奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡1棟、土坑11基が検出されている。竪穴住居跡は台地西側縁部と台地東側縁部付近の2群に分かれている。両者とも散在しており、集中区は認められない。掘立柱建物跡は、台地東側縁部付近の1群に属している。土坑も調査区全域に散在している。

第14表 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表(1)

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	規模(主軸×横軸)	収高	カマド
A010	G5-35	N-10°-E	3.15×3.45	0.1	北壁東寄り
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は硬度を有しカマド周辺部が特に硬い床となる。壁は少し崩れている。カマド内の火床に変色は認められない。				
A012	H5-4	N-12°-W	3.55×3.65	0.5	北壁中央
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面はカマド西側を除いて硬い床となる。壁はひどく崩れている。カマド内の火床に変色は認められない。床面に達しない時期不切の土坑が認められる。				
A014	H5-21	N-38°-W	4.7×4.7	0.6	北西壁中央
	プランは隅丸方形。主柱穴4本。床面は硬度を有し中央部が特に硬い床となる。壁はほとんど崩れていない。カマド内の火床は真っ赤に変色している。拡張住居である。A013とA015を切っている。				
A019	G5-10	N-148°-E	3.35×3.0	0.35	南壁隅
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は硬い床と軟弱な床が混じりあうがカマド周辺部では特に硬い床となる。壁は上部が少し崩れている。カマド内の火床は赤く変色している。				
A021	G5-28	N-15°-E	3.05×3.25	0.35	北壁東寄り
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面はほぼ全面が硬い床となる。壁はひどく崩れている。カマド内の火床は真っ赤に変色している。線刻土器が1点出土する。				
A022	G5-8	N-45°-W	3.7×3.3	0.5	北西壁中央
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は中央部を除いた四隅が硬い床となる。壁は上部が少し崩れている。カマド内の火床に変色は認められない。				
A024	G5-6	N-33°-W	2.4×2.4	0.3	なし
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面はほぼ全面が硬い床となる。壁はひどく崩れている。				
A025	I5-44	N-148°-E	3.3×3.0	0.9	東壁隅
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は中央部を除いて硬い床となる。壁はほとんど崩れていない。カマド内の火床に変色は認められない。拡張住居である。壺蓋土器が1点出土する。				
A026	I5-33	N-169°-W	3.0×3.1	0.85	東南壁隅
	プランは不整隅丸方形。主柱穴なし。床面は中央部を除いて硬い床となる。壁は少し崩れている。カマド内の火床に変色は認められない。				
A027	I5-32	N-151°-E	2.7×2.3	0.4	東壁隅
	プランは不整隅丸方形。主柱穴なし。床面は北壁沿を除いて硬い床となる。壁はひどく崩れている。カマド内の火床に変色は認められない。				
A034	H5-16	N-93°-E	3.9×2.8	0.45	東南壁隅
	プランは不整隅丸長方形。主柱穴なし。床面はカマド周辺部を除いて軟弱な床となる。壁はひどく崩れている。カマド内の火床に変色は認められない。壺蓋土器が2点出土する。				
A039	H6-60	N-72°-W	3.3×3.05	0.35	西壁中央・北壁中央
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は中央部とカマド(古)の周辺部を除いて硬い床となる。壁はほとんど崩れていない。カマド内の火床に変色は認められない。D014を切っている。壺蓋及びヘラ蓋土器が1点出土する。				



第15表 奈良・平安時代穴住付跡一覧表(2)

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	規模(主軸×横軸)	壁高	カマド
A040	H7-48	N-109°-E	3.25×4.0	0.1	東壁南寄り
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は北側半分を除いて硬い床となる。カマド内の火床は赤く変色している。				
A041	H7-45	N-34°-E	3.8×3.65	0.65	北東壁中央
	プランは隅丸方形。主柱穴なし。床面は硬度を有し周辺部が特に硬い床となる。壁は上部がひどく崩れている。カマド内の火床に変色は認められない。黒書土器が4点出土する。				
A042	H7-27	N-94°-W	3.8×2.9	0.2	西壁中央
	プランは隅丸長方形。主柱穴なし。床面は硬度を有しているが硬い床とはいえない。壁は少し崩れている。カマド内の火床は真っ赤に変色している。ヘラ書土器が1点出土する。				
A044	H6-75	N-1°-E	3.85×3.75	0.4	北壁中央
	プランは隅丸方形。主柱穴2本。床面は硬度を有し周辺部が特に硬い床となる。割れ目跡が1本ある。壁は上部が少し崩れている。カマド内の火床に変色は認められない。黒書土器が2点、ヘラ書土器が1点出土する。				

第16表 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	柱間(間)	梁行	桁行	深さ
B001	H7-59	N-54°-W	2×3	3.4-3.5	5.2-5.4	0.65-1.05
	底部はすべて平底でカクランにより壊されている1基を除いて小穴を有している。柱のあたり部は粘土やロームが強く締まった状態で検出されている。					

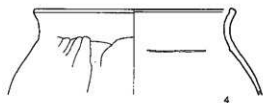
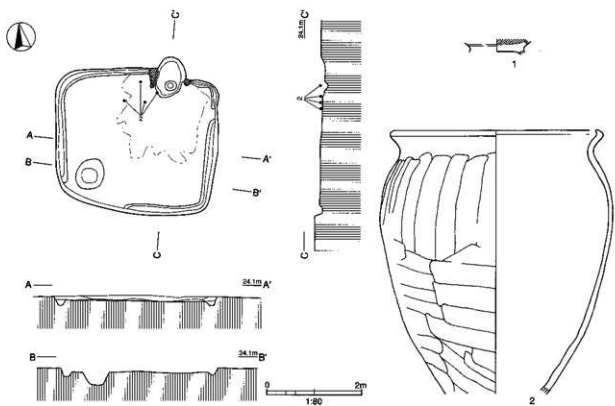
第17表 奈良・平安時代土坑一覧表

(単位m)

遺構番号	位置	主軸方位	長軸×短軸	深さ	備考
D001	G5-94	N-14°-W	1.9×1.95	0.3	用途不明。底面は硬く軟弱な所はない。住居跡の床面と似ている。
D004	G5-58	—	1.1×1.15	0.45	柱用穴。坪上は築き固められている。
D012	H5-65	N-14°-W	1.95×2.0	0.15	用途不明。底面は軟弱である。
D015	H7-59	—	2.8×2.45	1.05	用途不明。階段のような段差がある。ほとんどが崩れ落ちているが、一部に天井の痕跡がある。
D017	J6-3	—	1.25×1.0	0.55	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D020	I6-44	—	1.05×1.1	0.45	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D024	H7-49	—	1.25×1.6	0.45	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D025	H7-27	—	1.25×1.35	0.55	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D026	I7-27	—	1.1×1.25	0.5	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D027	H7-17	—	1.1×1.15	0.45	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。
D029	I6-88	—	0.9×0.9	0.45	用途不明。遺構内に火・熱は受けてない。

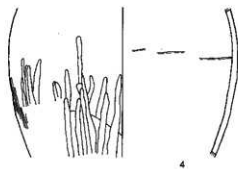
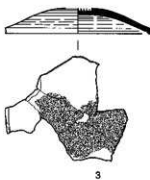
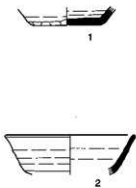


第89図 奈良・平安時代遺構位置圖



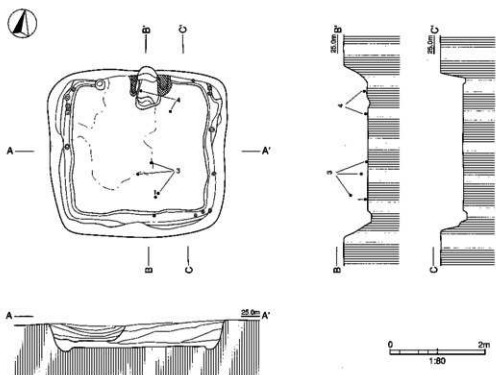
0 10cm  
1:4

第90图 A010

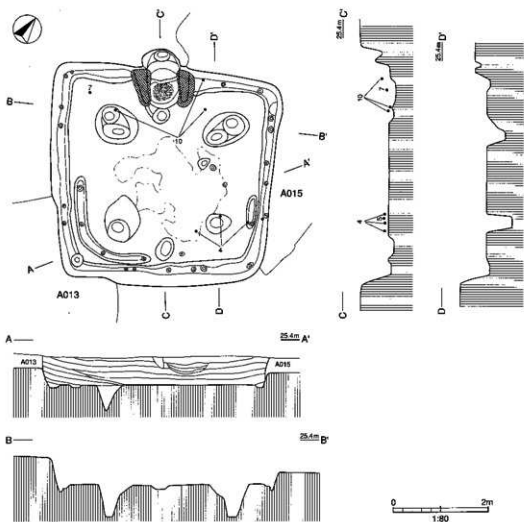


0 10cm  
1:4

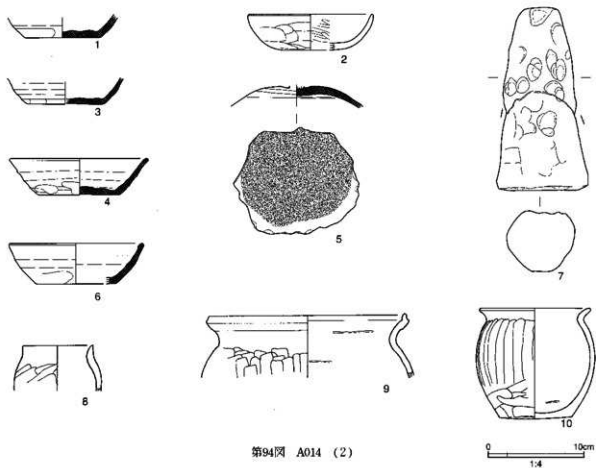
第91图 A012 (1)



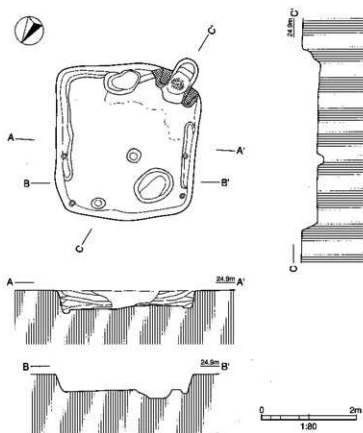
第92网 A012 (2)



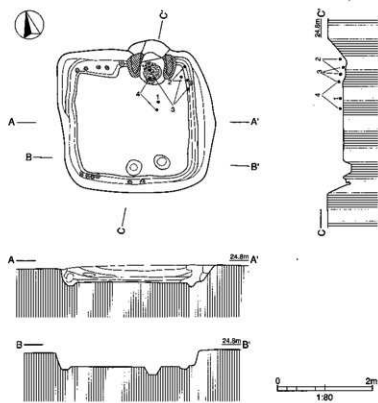
第93网 A014 (1)



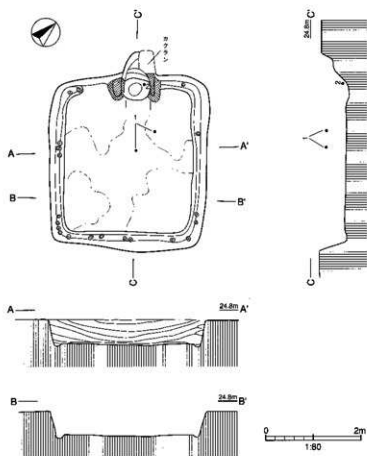
第94图 A014 (2)



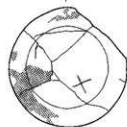
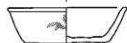
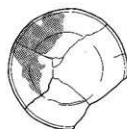
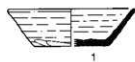
第95图 A019



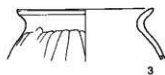
第96图 A021



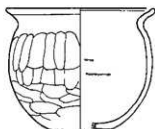
第97图 A022 (1)

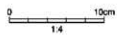
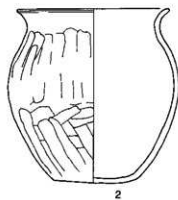
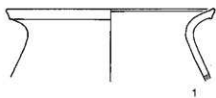


2

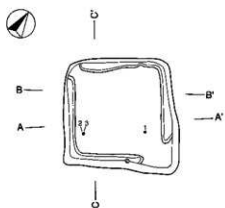


3





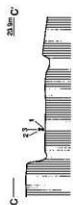
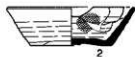
第98图 A022 (2)



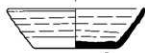
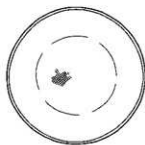
A — 23.9m A'



B — 23.9m B'



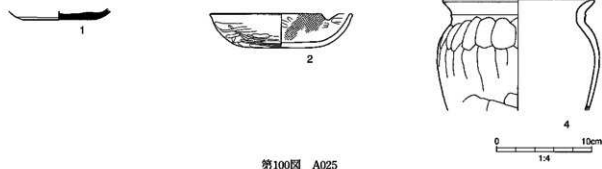
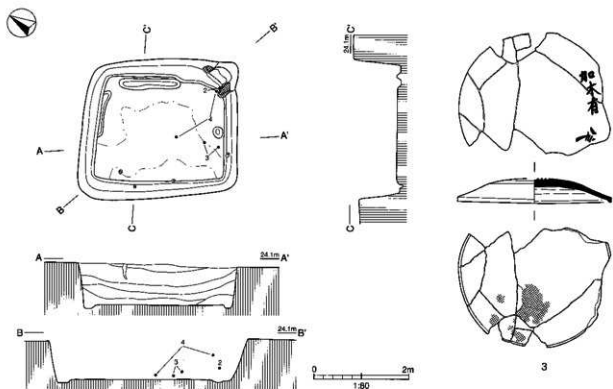
1



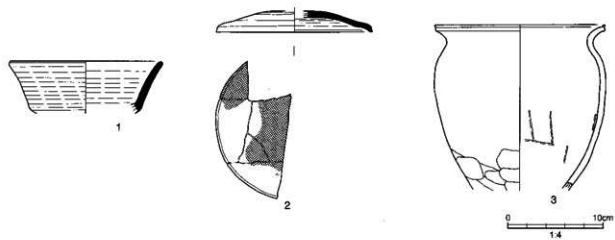
3

第99图 A024



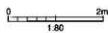
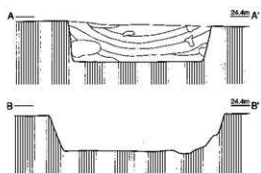
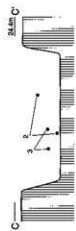
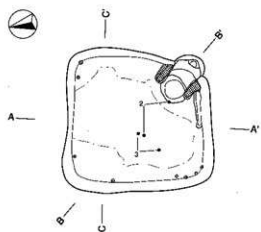


第100图 A025

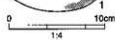
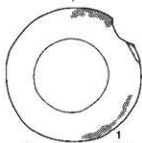
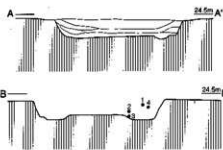
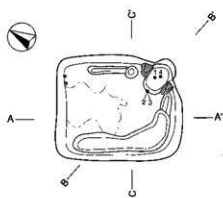


第101图 A026 (1)

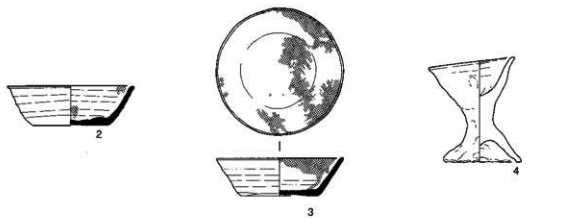




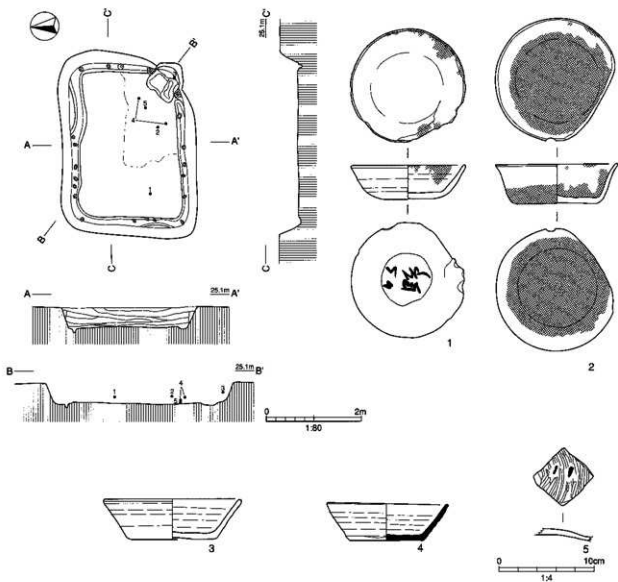
第102图 A026 (2)



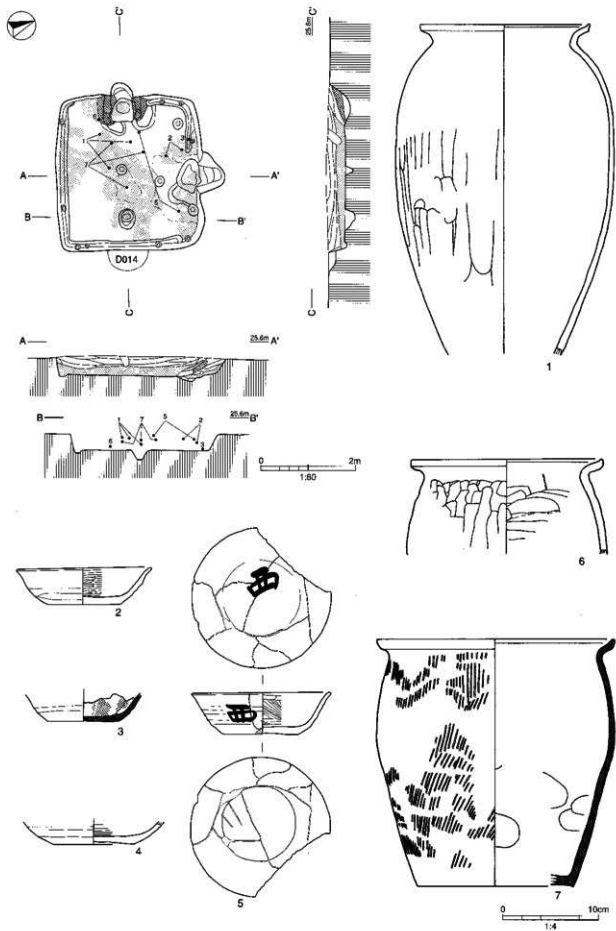
第103图 A027 (1)



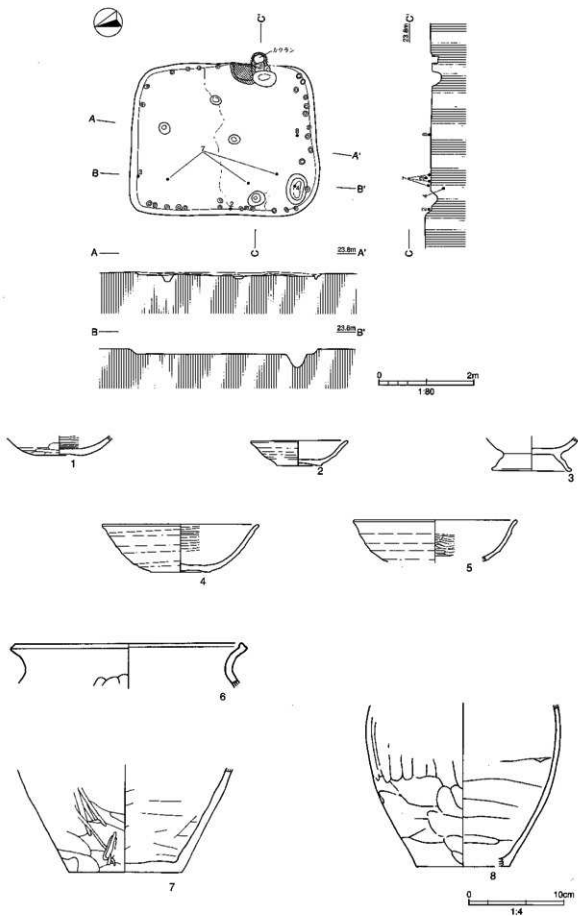
第104图 A027 (2)



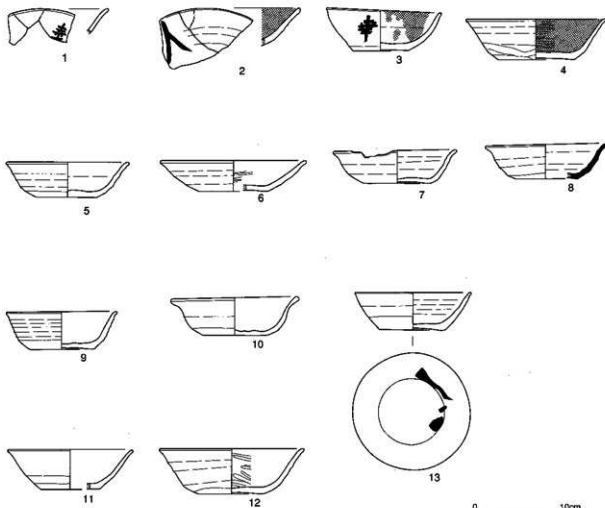
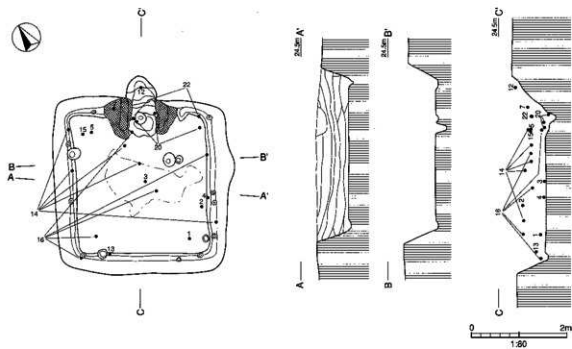
第105图 A034



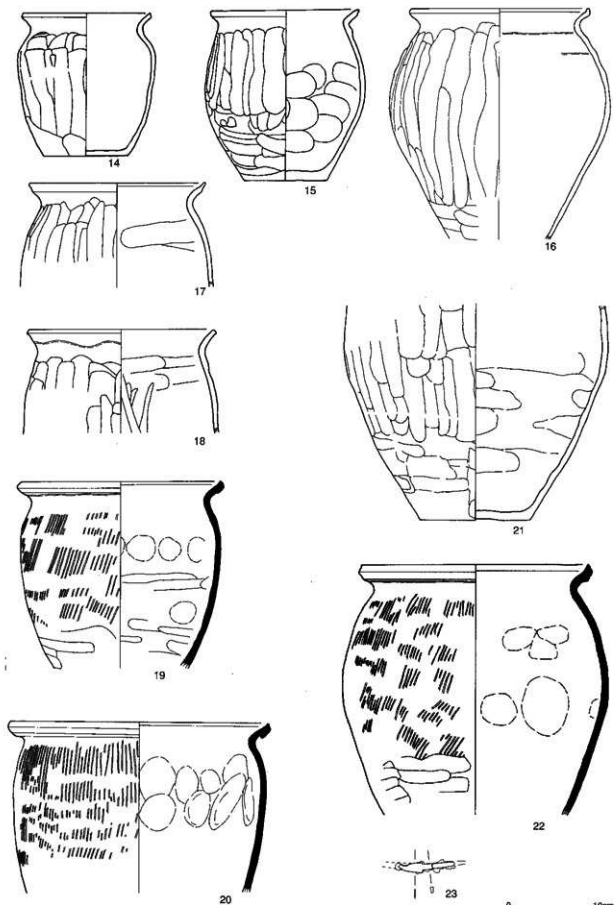
第106图 A039



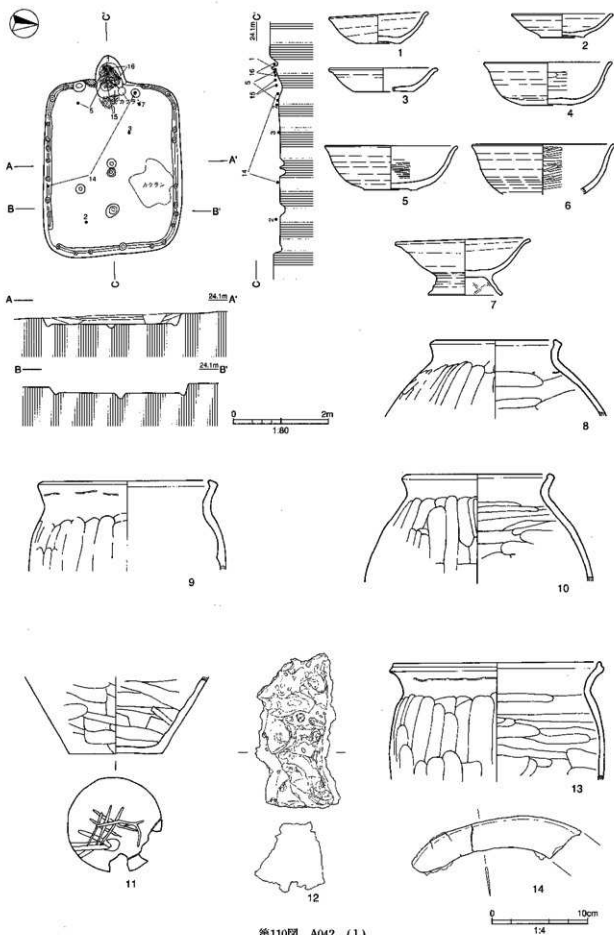
第107回 A040



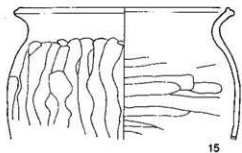
第108图 A041 (1)



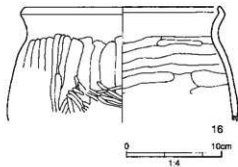
第109图 A041 (2)



第110图 A042 (1)



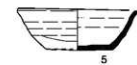
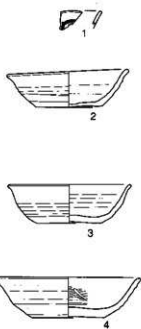
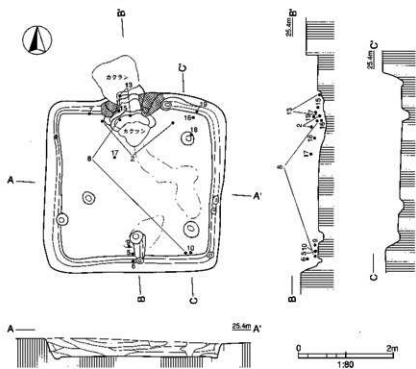
15



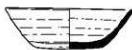
16

0 10cm  
1:4

第111图 A042 (2)



5



6



7



8



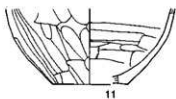
9



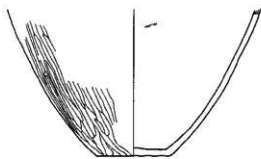
0 10cm  
1:4

第112图 A044 (1)

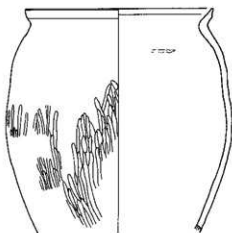




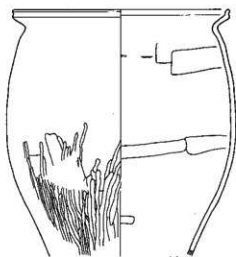
11



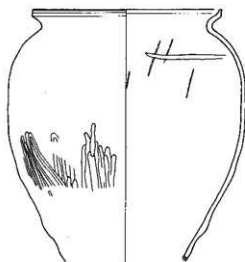
12



13



14



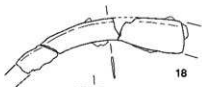
15



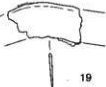
16



17



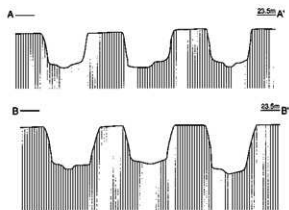
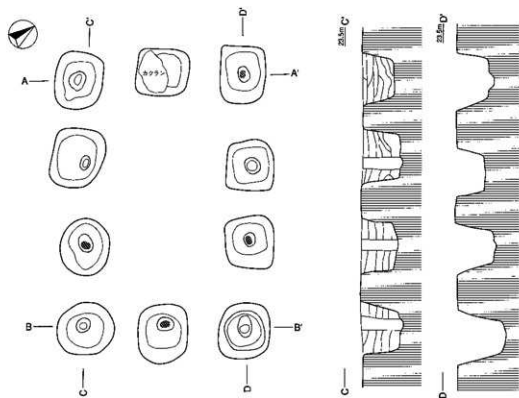
18



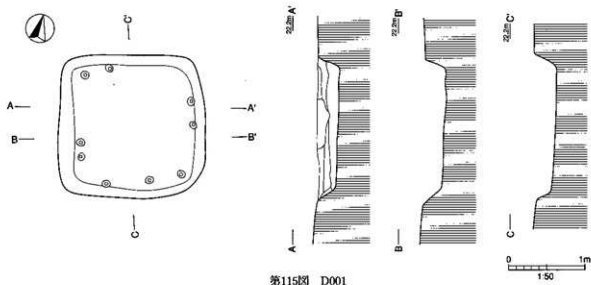
19

第113图 A044 (2)

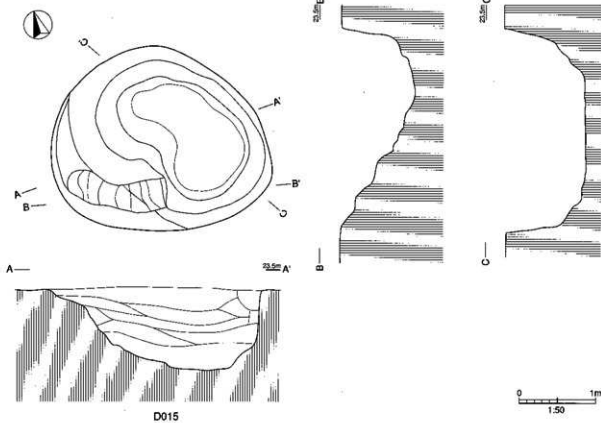
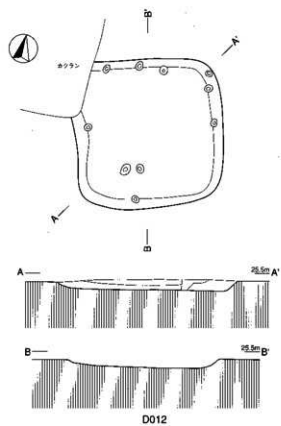
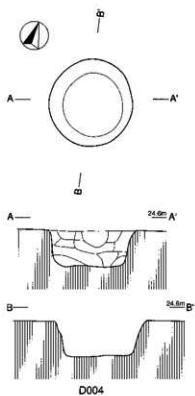




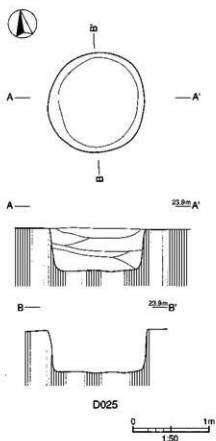
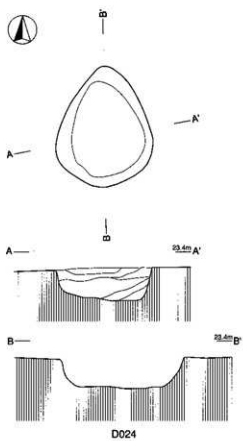
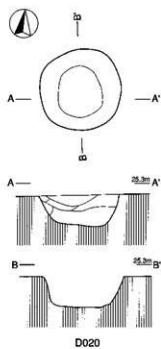
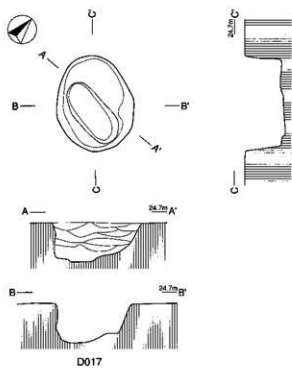
第114图 B001



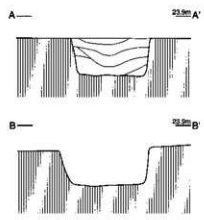
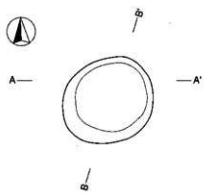
第115图 D001



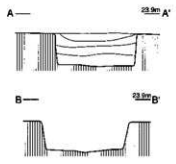
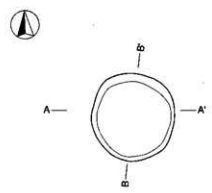
第116図 D004・D012・D015



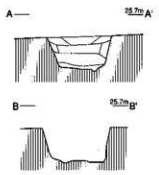
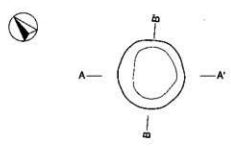
第117号 D017 · D020 · D024 · D025



D026



D027



D029

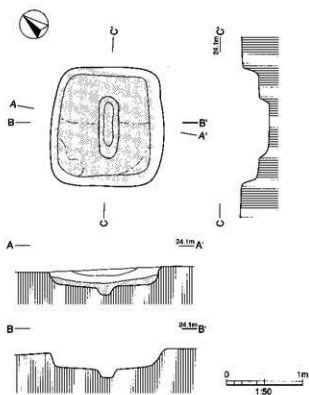


第118图 D026 · D027 · D029

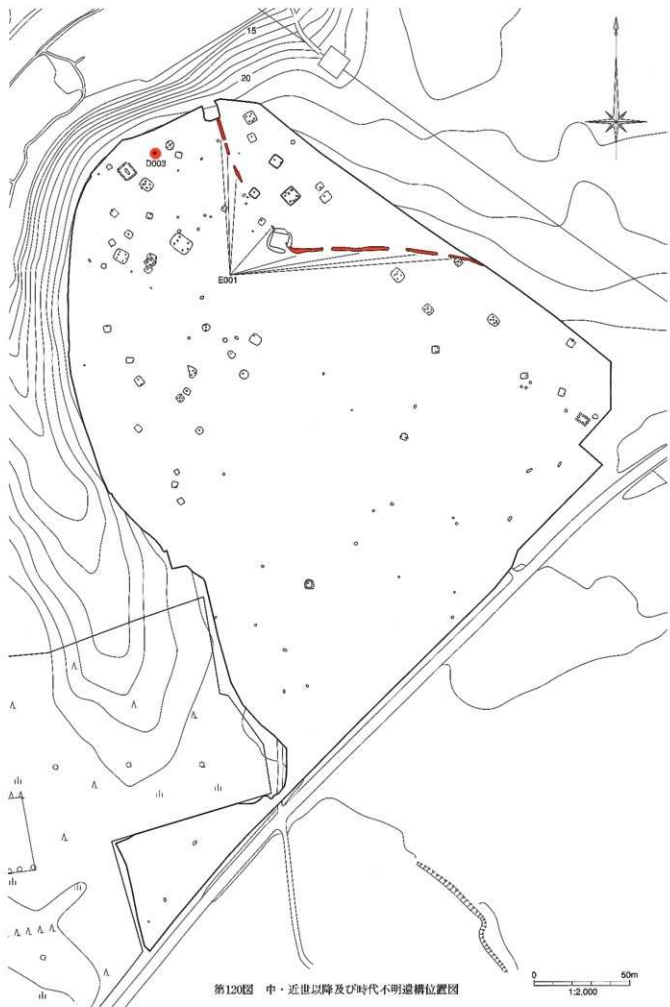
## 第6節 中・近世以降及び時代不明

栗谷遺跡I地区における中・近世以降の遺構は、土坑1基（D003）が台地縁辺部で検出されている。D003は、G5-25に位置し、主軸方位N-49°E、長軸1.6m、短軸1.5m、深さ0.25mを測る。底部に長楕円形の穴を有し、長軸0.8m、短軸0.25m、深さ0.13mを測る。底部は硬度を有し、北東側半分と隅が特に硬くなっている。遺構内にて火が燃やされており、僅かな範囲であるが壁や底が赤色に変色している。焼土層中に細かい炭が多く含まれている。炭焼窯かと思われる。

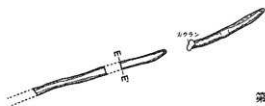
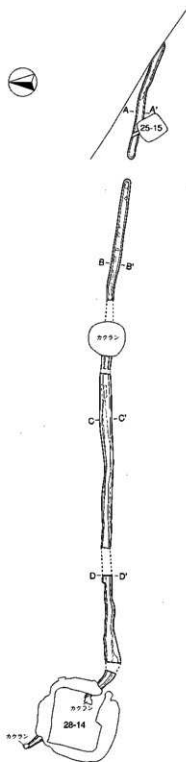
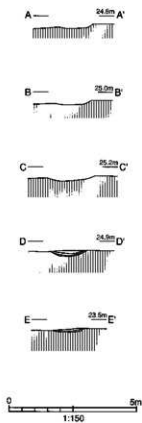
時代不明の遺構は、溝1条（E001）が検出されている。台地縁辺部のG5-52から南東方向へ延び、G5-100で東方向へ曲がり、H6-91に至っている。幅は1mから2.5m、深さ0.5mから1mを測る。溝は浅くなり途切れている所もあるが、1本に繋がっていたものと思われる。溝内に硬化面を有している。用途不明である。



第119図 D003



第120図 中・近世以降及び時代不明遺構位置図



第121圖 E001



### 第3章 小 結

栗谷遺跡は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3地区に分けて報告をしていく予定である。今回本書にて報告した栗谷遺跡Ⅰ地区は遺跡の西側部に位置しており、遺跡の中心から外れている地区であることも、発掘調査の結果から判明している。Ⅰ地区の様相だけでは、栗谷遺跡の説明をすることは困難なことである。栗谷遺跡としての調査成果のまとめは、全ての報告が終了した最終冊で行なうことにしたい。ここでは、Ⅰ地区の調査成果から判明したことについてまとめながら、今後の注意点についてもまとめていくことにする。

遺構は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代のものが検出されている。西側の台地縁辺部と東側の台地縁辺部付近においてややまとまっていると言えるが、古墳時代の堅穴住居跡を除けば、遺構の集中している所はなくバラけている状態であった。台地中央部においては、土坑や加穴が検出されているが、堅穴住居跡はほとんど検出されていない。特殊遺構も検出されていない。奈良・平安時代の堅穴住居跡も多く検出されているが、Ⅰ地区において主体となるのは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堅穴住居跡であると言える。ふたつの時代を合わせると、西側の台地縁辺部を中心に集落がまとまって展開していることがわかる。

遺物は、縄文時代早期・中期・後期、弥生時代後期、古墳時代前期、奈良・平安時代の土器などが遺構内から出土している。遺物が集中して出土している所はなく、縄文時代早期の包含層も検出できなかった。特殊遺物も出土していない。Ⅰ地区の遺物において主体となるのは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてであると言えるが、出土した遺物の量から言うとなら奈良・平安時代の方が多いうである。しかし、墨書などの文字が書かれているものは極めて少なかった。縄文土器の出土も少なくないが、遺構外からのものがほとんどであった。

Ⅰ地区の遺構と遺物を検証していくにあたり、Ⅱ・Ⅲ地区や周辺遺跡との関わりを抜きにしては語れない。ここで、それらのことも考えながら今後の注意点を整理してみたいと思う。

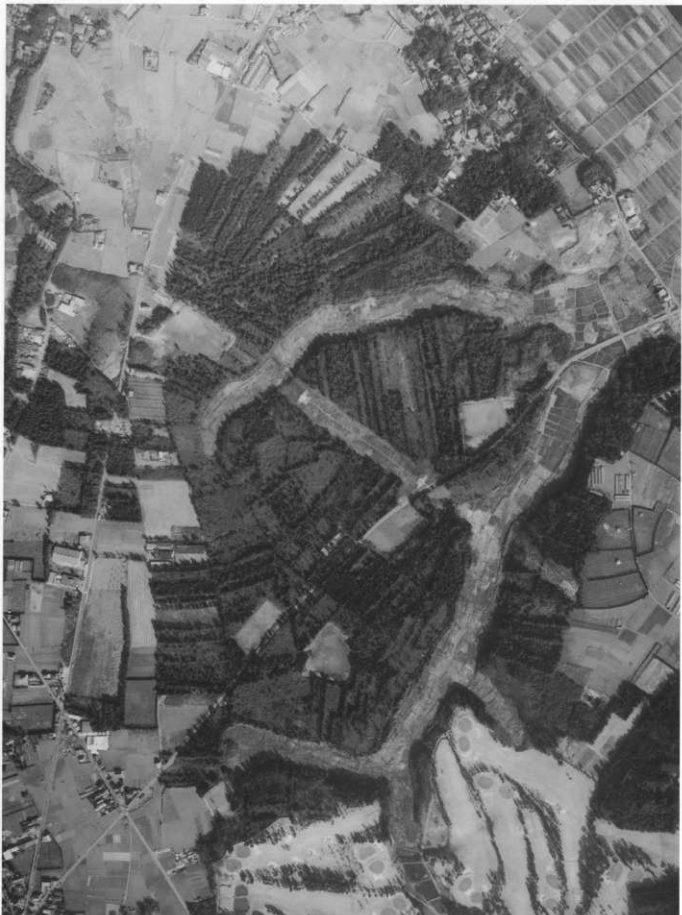
縄文時代早期の炉穴は、栗谷遺跡中央部の北側台地縁辺部にて検出された何時代の包含層と、隣接する上谷遺跡の炉穴群と同時代の包含層なども照らし合わせをしながら考察をしていかなければならないと思う。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は、栗谷遺跡北東部の台地先端縁辺部にて検出された方形周溝墓群を伴う大集落と、隣接する上谷遺跡北側部の同時代の集落なども照らし合わせをしながら考察をしていかなければならないと思う。

奈良・平安時代の集落は、栗谷遺跡中央部の東側台地縁辺部にて検出された四面庇の掘立柱建物跡を含む集落と、隣接する上谷遺跡や谷津を隔てた対岸にある向境遺跡・埴原遺跡の同時代の集落なども照らし合わせをしながら考察をしていかなければならないと思う。

以上のようなことにも注意を払いながら第2・3分冊の報告書を作成し、栗谷遺跡の全容を明らかにするとともに考察をしていきたいと思う。

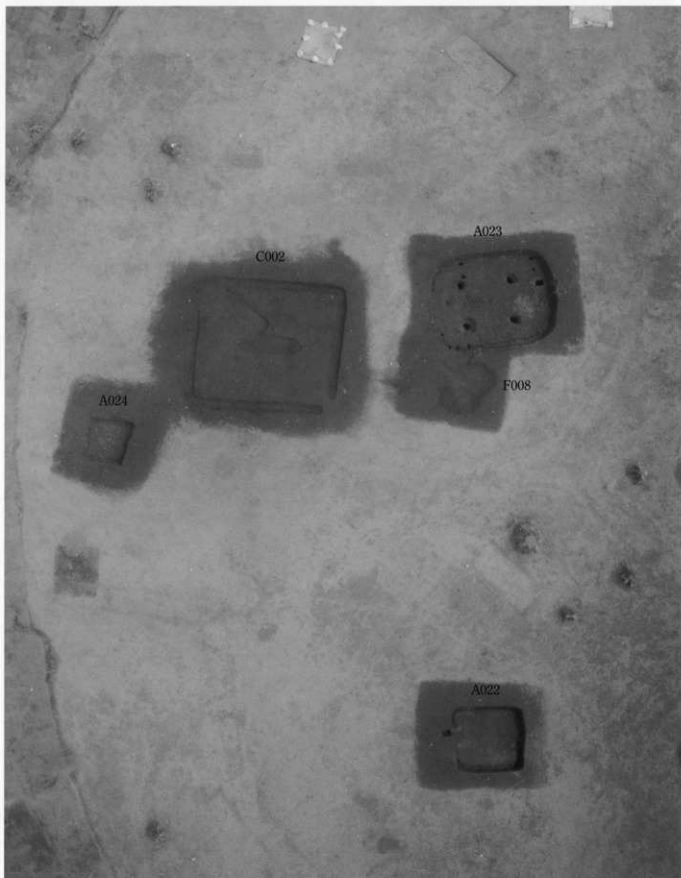
# 写 真 图 版



(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連遺跡周辺航空写真 (昭和63年撮影)



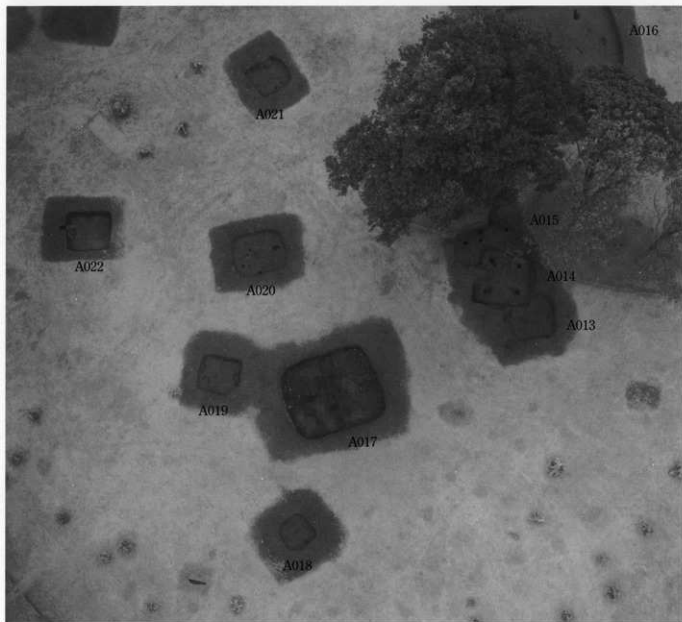
空撮写真 A012・A013・A014・A015・A016・A017・A018・A019・A020・A021・A022・A023・A024  
A027・A028・A029・A030・A031・A032・A033・A034・C002・D006・D007・D008・F008・F009



空撮写真 A022・A023・A024・C002・F008



空撮写真 A016・A020・A021・D006・D007・D008



空撮写真 A013 · A014 · A015 · A016 · A017 · A018 · A019 · A020 · A021 · A022



空撮写真 A028・A030・A031・A032・A033・A034





空撮写真 A002 · A003 · A004 · A005ab · A006ab · A008 · A009 · D001 · E001 · F002 · F003 · F004 · F005 · F006



空撮写真 A001・A002・A003・A004・A005ab・A006ab・A007・A008・C001・D001



空撮写真 A040・A041・A042・A043・B001・D015・D024・D025・D026・D027



空撮写真 A042・A043・A044・A045・A046・A047・D026・D027・E001



調査前風景



調査前風景



調査前風景



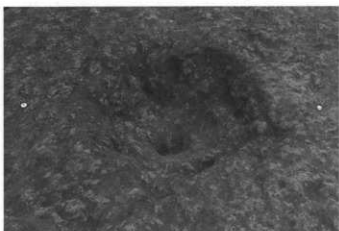
調査前風景



A011



A011



A011



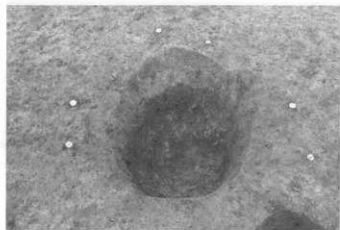
A015



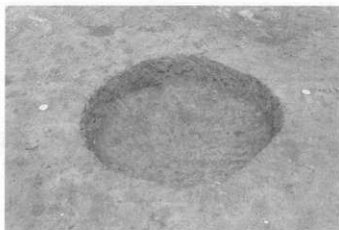
A015



A038



A038



D007



D008



D009



D011



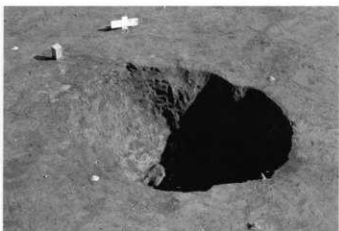
D016



D018



D019



D023



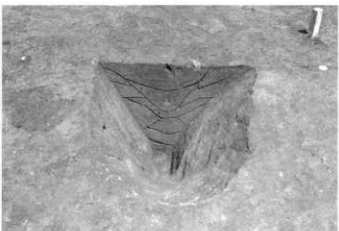
D028



D031



D032



D033



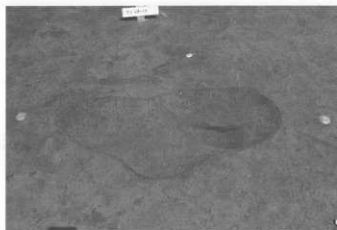
D033



F001



F002



F003



F004



F005



F006



F007



F008





F009



F010



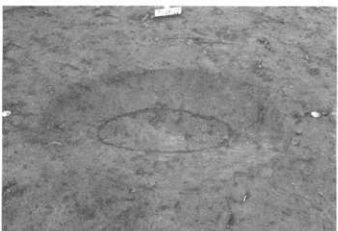
F011



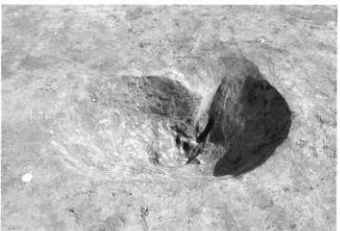
F012



F013



F014



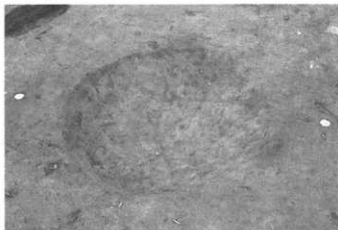
F015



F016



F017



F018



F019



F020



F021



F022



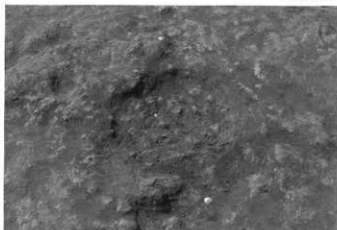
A013 · A014 · A015



A013



A013



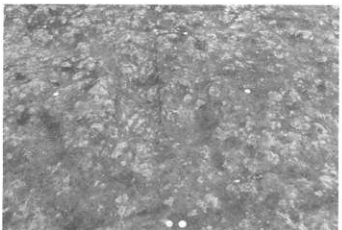
A013



A016



A016



A016



A017



A017



A017



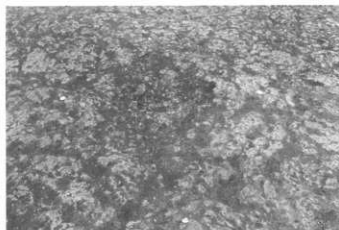
A017



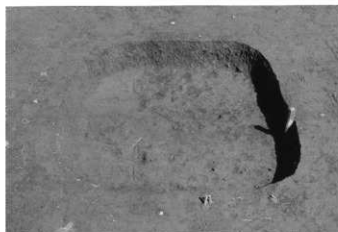
A017



A017



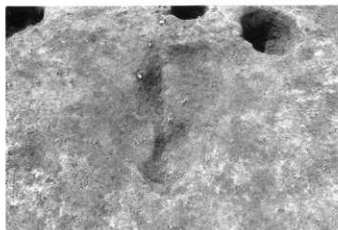
A017



A018



A020



A020



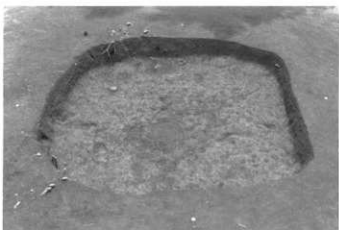
A023



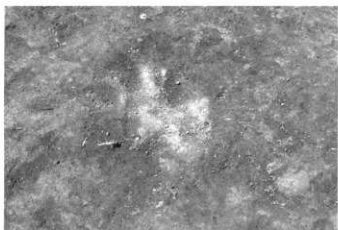
A023



A023



A029



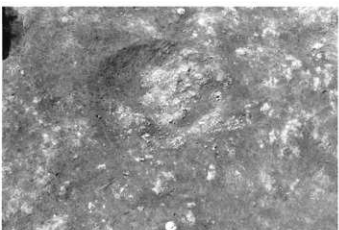
A029



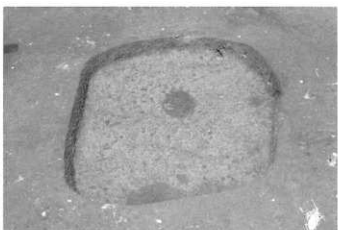
A030



A030



A030



A031